岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (24)

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

(補遺編)

1978・3

岡山県教育委員会

文化課

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

(補遺編)

序

岡山県教育委員会では、昭和44年3月より足掛け9年間にわたり中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に取組んでまいりました。十年一昔のたとえどおり、県内での大型道路幹線網の敷設とともに、とりわけこの中国縦貫自動車道の建設の進行状況と表裏の関係で、埋蔵文化財の保護行政が機構的に整備・拡充してきたといっても過言ではありません。昭和40年代前半と比較すると、まさに隔世の感をおぼえます。暗中模索で取り組んできたこの種の調査は、日を重ね年を追うごとに大変な事業であることに気付き、そのつど一定の条件整備を考えてまいりましたが、必ずしも十分に整備されたとはいえぬ状況であります。現在では、遺物の収蔵施設も暫定的な仮設収蔵庫とはいえ、7棟を数え徐々に遺物の保管・化学的処理のための機器類を整備しつつあります。また、頭初、刊行の予定すらたたなかった報告書の刊行もすでに13分冊を重ねるに到りました。この間、関係機関および各位から、暖かい御指導と御助力を賜わったことを記し、哀心よりお礼申上げる次第です。

なお、本書に収録した久米廃寺ならびに美作国府跡については、かつて略報を上梓いたしましたが、遺跡の規模や出土品が尨大であったため、報告書の作成期間、あるいは、その準備体制が不備な時点であったため意を尽せぬ点が多々ありました。その後も遺物整理を進め、その結果にもとづきなお未了の段階ながらとりあえず補遺編としてまとめ、刊行することにいたしました。

末筆ながら、中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ、地元教育委員会、その他関係各位のご協力とご助言に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和53年3月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

凡　　例

1．本書は、日本道路公団の委託をうけ岡山県教育委員会が実施した。中国縦貫自動車道建設にかかる緊急調査の報告のうち、久米廃寺および美作国府趾についての補遺篇である。

2．本事業に関する報告書は、すでに13分冊を数えるが、久米廃寺は「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」第4分冊（中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊）、美作国府は同書第5分冊（中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3分冊）に、それぞれ遺跡の規模・遺構の配置などを掲載しているので、本書と補完関係にある。お手数ながらご参照いただきたい。

3．調査は、岡山県教育委員会が埋蔵文化財保護対策委員会の助言を得て実施し、報告書作成段階まで適切な指導をうけた。以下、対策委員各位のご芳名を列記して感謝の微意を表したい。

浅野克己　勝央中学校教諭　（昭和47年11月～　）
植月壮介　津山みのり学園　（昭和44年4月～　）
近藤義郎　岡山大学教授　（昭和47年11月～　）
土居　徹　院庄小学校教諭　（昭和44年4月～　）
宗森英之　津山高等学校教諭（昭和47年11月～　）
渡辺健治　津山市文化財保護委員（昭和44年4月～　）

4．本書の作成は、岡山市西古松所在の文化課分室において行った。組織と構成は下記のとおりである。

文化課

課長	飛田真澄
課長補佐	塩見篤
主幹	小川佳彦
文化財二係長	光吉勝彦
文化財保護主査	河本清
文化財保護主事	正岡睦夫
〃	山磨康平
主事	岡本寛久

文化課分室

文化財主幹	難波進
文化財保護主査	葛原克人
文化財保護主事	井上弘
	下澤公明
	松本和男
	岡田博
主事	福田正継
	竹田勝
	藤井守雄

5．本報告書は、「岡山県埋蔵文化財発掘報告」の通巻24分冊にあたり、次のとおり執筆を分担することとした。

久米廃寺　栗野克己（岡山県立博物館　昭和52年4月～　）
美作国府　岡田　博

久米廃寺(19)

(補遺編)

例　　言

1、本報告は先に岡山県教育委員会より、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2）として刊行された「久米廃寺」の報告の補遺編である。

2、久米廃寺は、岡山県久米郡久米町大字宮尾唐臼に所在し、発掘調査は二次に分けて実施されたが、道路公団の工事工程の変更により、第二次調査は前半と後半に分断された。それぞれ下記の調査員が担当した。

第1次調査（昭和44年3月）
葛原克人（社会教育課）
枝川　陽（　〃　）
第2次調査前半期（昭和44年4月～昭和45年1月）
河本　清（社会教育課、兼津山教育事務所）
枝川　陽（　〃　　〃　）
栗野克己（　〃　　〃　）
第2次調査後半期（昭和45年5月～昭和46年7月）
河本　清（文化課、兼津山教育事務所）
泉本知秀（　〃　　〃　）
栗野克己（　〃　　〃　）

3、出土遺物の整理は、現地および他の遺跡調査中に平行して進められ、取扱いがデリケートなものを除き大半の泥落し水洗は終了している。今回の報告書に伴う整理作業は文化課分室で実施した。

4、今回の報告書作成に関して、出土遺物の写真撮影・実測・製図はそのほとんどを栗野が実施した。手拓の一部について、岡本いづみ、大島敏江、生田悦子、製図の一部について、浜本早苗の援助を得た。

中国製陶磁器および和製陶磁器については、京都国立博物館河原正彦氏の御教示を得た。記して感謝の意を表わすものである。

目　　次

例　言

本文目次

第1章　瓦類……10
1．軒丸瓦……10
2．軒平瓦……12
3．丸瓦……13
4．平瓦……15
5．道具瓦……17
6．文様瓦……17
第2章　仏像・塑土・焼土……17
1．塑造仏・如来像……18
2．塑造仏・菩薩像……18
3．塼仏……18
4．塑土・焼土……19
第3章　土器……19
1．須恵器……19
2．土師器……20
3．施釉陶器……20
4．円面硯……20
5．墨書土器……20
6．中国製陶磁器・和製陶磁器……20
第4章　金属製品……20
1．相輪……21
2．青銅金具……22
3．鉄製品……22
4．鉱滓・窯壁……22
5．金箔……23
第5章　石器・その他……23
1．石製鍔帯……23
2．水晶……23
3．環状石斧……23
4．サヌカイト原石と剝片……23
5．石製容器……23
第6章　まとめ……24

図　目　次

第1図　久米廃寺第2次発掘調査地区分け　S＝1/2,000 ……24
第2図　発掘グリッド設定と測量基準線　S＝1/800 ……25
第3図　遺構配置図　S＝1/600 ……24—25
第4図　軒丸瓦（その1）S＝1/4 ……26
第5図　軒丸瓦（その2）S＝1/4 ……27
第6図　軒平瓦（その1）S＝1/4 ……28
第7図　軒平瓦（その2）S＝1/4 ……29
第8図　軒平瓦（その3）S＝1/4 ……30
第9図　(1)　軒平瓦（その4）S＝1/4　(2)　塼仏実大　(3)　緑釉・青磁S＝1/2……31
第10図　丸瓦（その1）S＝1/6 ……32
第11図　丸瓦（その2）S＝1/6 ……33
第12図　平瓦（その1）S＝1/6 ……34
第13図　平瓦（その2）S＝1/6 ……35
第14図　平瓦（その3）S＝1/6 ……36
第15図　平瓦（その4）S＝1/6 ……37
第16図　平瓦（その5）S＝1/6 ……38
第17図　平瓦（その6）S＝1/6 ……39
第18図　平瓦（その7）S＝1/6 ……40
第19図　平瓦（その8）S＝1/6 ……41
第20図　平瓦（その9）S＝1/6 ……42
第21図　隅切瓦　S＝1/6 ……43
第22図　道具瓦（1・2）　文様瓦（1・3～6）S＝1/6 ……44
第23図　須恵器（1～17）　土師器（18～25）　備前焼（26～29）S＝1/4 ……45
第24図　須恵器（1～3・5～10）　円面硯（4）　石製容器（11）S＝1/4 ……46
第25図　須恵器　甕　S＝1/4 ……47
第26図　(1)　石製鍔帯S＝1/2　(2)　相輪（その1）S＝1/3……48
第27図　相輪（その2）S＝1/3 ……49
第28図　(1)　相輪（その3）S＝1/3　(2)　相輪出土位置 ……50
第29図　鉄製品（その1）S＝1/3 ……51
第30図　鉄製品（その2）S＝1/3 ……52
第31図　鉄製品（その3）S＝1/3 ……53

図 版 目 次

図版1　1．軒丸瓦Ⅰ類　2．軒丸瓦Ⅰ類　3．軒丸瓦Ⅱ類
図版2　1．軒丸瓦Ⅲ類　2．軒丸瓦Ⅲ類　3．軒丸瓦Ⅲ類
図版3　1．軒丸瓦Ⅲ類　2．軒丸瓦Ⅳ類　3．塼仏
図版4　1．軒平瓦Ⅰ類　2．軒平瓦Ⅱ類
図版5　1．軒平瓦Ⅲ類　2．軒平瓦Ⅳ類
図版6　1．軒平瓦Ⅴ類　2．軒平瓦Ⅵ類
図版7　1．丸瓦1　2．丸瓦2
図版8　1．丸瓦3　2．丸瓦4
図版9　1．丸瓦5　2．丸瓦6
図版10　1．丸瓦7　2．丸瓦8
図版11　1．丸瓦9　2．丸瓦10
図版12　1．丸瓦11　2．丸瓦12
図版13　1．平瓦1　2．平瓦2
図版14　1．平瓦3　2．平瓦4
図版15　1．平瓦5　2．平瓦6
図版16　1．平瓦7　2．平瓦8
図版17　1．平瓦9　2．平瓦10
図版18　1．平瓦11　2．平瓦12
図版19　1．平瓦13　2．平瓦14
図版20　1．平瓦15　2．平瓦16
図版21　1．平瓦17　2．平瓦18
図版22　1．平瓦19　2．平瓦20
図版23　1．平瓦21　2．平瓦22
図版24　1．隅切瓦1　2．隅切瓦2
図版25　1．熨斗瓦1　2．熨斗瓦2
図版26　1．文様瓦3　2．文様瓦5・文様瓦4
図版27　1．塑造仏　如来像螺髪　S＝1/2　2．塑造仏　菩薩像臂釧　S＝1/2
図版28　1．塑造仏　菩薩像頭髪　S＝1/2　2．塑造仏　菩薩像顔面　S＝1/2
図版29　1．塑造仏　菩薩像瓔珞・裳・裾　S＝1/2　2．塑造仏 菩薩像裳・裾　S＝1/2
図版30　1．塑造仏　菩薩像垂髪・頭髪・台座の反花　S＝1/2
　　1．塑造仏　菩薩像指先　S＝1/2　3．塑造仏　天部　S＝1/2
図版31　1．4区黒色粘土層出土須恵器（2・1・3）　2．須恵器4坏

図版31　3．4区大溝出土須恵器

図版32　須恵器（5・7・8・11・16・17・18）　土師器（21・22）　円面硯

図版33　1．須恵器　花瓶　2．須恵器　平瓶

図版34　1．須恵器　甕1　2．須恵器　甕

図版35　1．須恵器　甕2　2．須恵器　甕5　3．須恵器　甕6
　　4．須恵器　甕4　5．須恵器　甕7　6．須恵器　甕8・9

図版36　1．緑釉陶器内面　2．緑釉陶器外面

図版37　1．中国製陶磁器・和製陶器　2．備前焼　擂鉢

図版38　相輪

図版39　1．釘　S＝1/2　2．鉄製鍬先　S＝1/2　3．鉄製矛？　S＝1/2
　　4．青銅製金具　S＝1/2

図版40　1．金箔　2．水晶　3．墨書土器　4．壁土　5．縄文式土器

図版41　1．サヌカイト原石・剝片　環状石斧　2．同上裏面

第1章　瓦　　類

瓦類は遺跡地内全面に散布しているが、特に建物Ⅰ（塔）・建物Ⅱ（講堂）・建物Ⅲ（金堂）、東廻廊線、それぞれの周囲の溝や凹みに瓦留りとして、集中した堆積状況を示して発見されている。軒先瓦・道具瓦についての整理はできたが、丸・平瓦については調整の観察により識別できたものをとりあげたにすぎず、その量的問題については処理できなかった。軒丸瓦は4種類、軒平瓦は6種類である。

1．**軒丸瓦**（第4・5図、図版1～3）

Ⅰ類は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は花弁より一段高く突出し、蓮子は1＋6＋8と三重である。中房の縁はやや高く突線状となる。比較的平坦な蓮弁は中房に接しており蓮弁と間弁の弁端は連続している。外区外縁は内傾する三角縁であり、内傾する面に一部面違い鋸歯文とも観察されるような、線鋸歯文約54単位が刻まれている。瓦当厚は2.0㎝と比較的薄い作りである。丸瓦部との接合は直角に近く、製作の第1段階で笵型に厚さ1㎝程の粘土をあてた直後にあらかじめ作成した丸瓦をあて、さらに瓦当部を厚さ2㎝にして形を整えている。瓦当裏には指頭圧痕が多く残る。胎土には白色砂粒を多く含み青灰色を呈し堅緻なものが多い。又赤褐色軟質のものも目立つ。丸瓦部は縦位のヘラケズリのあと横位の浅い刷毛目がかすかにみられる。

Ⅱ類は当初Ⅰ類と識別できなかった。また細片では識別不可能なものもあり表1に示した。Ⅰ類と基本的には変らない複弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、以下異なる点を列挙する。直径と中房がやや大きく、蓮子の数が1＋5＋8と少ない。また蓮弁が中房と接しておらず、やや離れた位置に圏線をめぐらしそれに接している。花弁と間弁は離れており、Ⅰ類のように弁端は連続しない。すべて赤褐色を呈し焼成があまいということも特徴といえよう。完形品は得られなかった。外縁は三角縁で鋸歯文を刻んでいる点もⅠ類と同様である。丸瓦との接合方法もⅠ類と同様である。

Ⅲ類　複弁七葉蓮華文軒丸瓦であり久米廃寺から最も多く出土している。全体に平坦な瓦当面を呈し、外縁だけが突出している。中房は蓮弁と同一平坦面にあり、太い線で区画され圏線の中に1＋8の蓮子がおかれ、蓮弁は圏線からやや離れ、間弁とも離れている。瓦当面には白色～灰色砂粒が顕著にみられ笵型と粘土の剝離を容易にするため、笵型に砂をまいたものが付着したと考えられる。それは文様部分の突出した部分、すなわち笵型において文様の最も凹んだ部分に特に多く砂粒が付着していることからもうなづける。瓦当厚は1.0㎝と非常に薄く、丸瓦部との接合は裏面に粘土をあて押えてあり、指頭圧痕が顕著なものが多い。また、丸瓦部の先端部凸面、凹面とも斜めに削り、先端部に10ケ所ヘラで刻目を入れて接合している。胎土は粗く白色の小礫や砂粒が多く含まれている。青灰色～灰色を呈し堅緻なものが多いが、赤褐色～灰白色軟質のものが若干含まれる。一方このⅢ類には製作技法・胎土の異なるものが一点存在する（第5図7、図版3－1）。やや小さな丸瓦部を瓦当中位近くにあて、丸瓦部凸面・凹面両側に粘土をあてている。灰黒色（断面は灰白色）軟質で砂粒の少

表1. 軒丸瓦計測値・出土個体数一覧

(単位 cm)

軒丸瓦		Ⅰ類	Ⅱ類	※Ⅰ・Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅲ類		
瓦当直径		17.0	17.6	——	16.5	17.1		
瓦当厚		2.0	1.9	——	1.0	1.9		
内区	中房径	7.0	7.8	——	6.3	5.2		
	蓮子数	1+6+8	1+5+8	——	1+8	1+8		
	弁幅	3.2	3.4	——	3.4	1.1		
	弁数	複8	複8	——	複7	単16		
外区	外縁幅	1.2	1.2	——	1.1	2.8		
	〃 高	1.2	1.2	——	0.7	0.7		
	〃 文様	線鋸歯文	線鋸歯文	——	素文	圏線		
全長		41.4	不明	——	37.5	不明	地区別個体数	%
出土個体数	1区	28	11	7	75	0	121	21.0%
	2区	6	3	2	297	1	309	53.7%
	3区	5	0	0	58	0	63	11.0%
	4区	4	0	0	45	0	49	8.5%
	5区	1	0	0	29	0	30	5.2%
	7区	0	0	0	0	0	0	
	8区	0	0	0	0	0	0	
	その他	0	0	0	3	0	3	0.5%
	合計	44	14	9	507	1	575	99.9%
全個体数に占める割合 %		7.7%	2.4%	1.6%	88.2%	0.2%	100.1%	

※ Ⅰ類またはⅡ類に属するが、細片のため類別不能のもの。

ない粘土である。特例である。

Ⅳ類 単弁十六葉蓮華文軒丸瓦。全体に平坦な瓦当面で、外区圏線だけが一段高い。中房は蓮弁と同一平坦面に圏線をめぐらした中に1＋6の蓮子をおいている。蓮弁は中房圏線に接続し、連続したものとして表現されている。丸瓦部との接合は笵型に厚さ約1cmの粘土を密着させた後に瓦当外縁よりやや内側に丸瓦をあて、瓦当裏面を厚さ約2cmに整えさらに凸面・凹面の隅の部分に粘土を補足し仕上げている。美作国分寺・国分尼寺に同笵のものが知られている。いずれにしても一例だけで、久米廃寺の主体をなす瓦ではない。

2．軒平瓦（第6～9図、図版4～6）

Ⅰ類は素文裏面突帯文軒平瓦である。軒先の先端部はゆるく外反するだけで何らの文様も施されていない。そのかわり凸面の先端部から10～20cmの位置に貼付突帯文がつけられている。突帯は4本を基本とするもので、さらに上側、瓦当面から約20cmの位置にしばしば朱線の付着がみられる。軒先の木質部を塗装した折に付いたものとすればこの凸帯は軒板より出ており、軒平瓦の全長の約$\frac{1}{5}$が突出していることになる。凹面には桶巻きづくりの際の模骨痕が顕著にみられ、粘土板縦位の合せ目がみられる。凸面には粗いハケ目がみられⅠ類の場合はこれ以外の刷毛目工具により製作されたものはない。

Ⅱ類は重弧文軒平瓦である。Ⅰ類同様笵型によらないもので、平瓦の厚さを瓦当部に至るまで徐々に増していく直線顎である。瓦当部は指の太さの凹線をつけ重弧文とした極めて大ざっぱな造りの瓦である。凹面には桶巻きづくりの模骨痕がみられ凸面の調整には、A．浅くうすい刷毛目（第8図4）、B．やや強い刷毛目（第7図2）、C．強い刷毛目（第8図3）の三種に分類できる。刷毛目調整のあとで格子目叩きを施した例もありそれぞれTをつけて個体数をだしてみた。A 83点、AT 3点、B 30点、BT 3点、C 21点、CT 41点、識別不可能なものを除いた結果である。Aはさらに二種に細分できる可能性もあるが、叩き目の有無は別にして、3～4種の刷毛目工具によって製作された軒平瓦Ⅱ類はそれぞれ別の工人の手によるものと考えられる。次にⅡ類の中には平瓦に対して瓦当面を斜位に製作したものがみられる（第7図2）。2のように右を短かくしたもの10点、左を短くしたもの6点が判別された。Ⅱ類の軒平瓦の胎土中には直径2cm程の礫まで含まれ非常に粗い粘土を使用、焼成良好、灰色で堅緻なものが多い。Ⅰ類同様、凸面の瓦当面から13～15cmの所に朱線がついている例がある。

Ⅲ類　四重弧文軒平瓦、瓦当面に楕状工具で三本の平行した凹線を引き四重弧文としたものである。平瓦の凸面に巾約5cmの粘土板を貼り付け段顎としたもので、しばしば剝離しているものがある（第8図7）。凹面には模骨痕がみられ桶巻きづくりである。凸面斜格子叩目がみられ、それが顎まで及ぶ例もある（第8図5）。焼成はあまく茶褐色を呈し軟質のものが多い。

Ⅳ類　均整唐草文軒平瓦。瓦当面の保存が悪いが、上下外区とも圏線を3本置き、その間に左右に3回反転する均正唐草文をおいたものである。灰黒色、胎土中に砂粒を多量に含む。平瓦部との接合は瓦当上面に平瓦をあてており曲線顎としている。均整唐草文は美作国において美作国府・美作国分寺・美作国分尼寺・勝央町平遺跡等で出土例がみられるが、同笵であるかどうか同定していない。

Ⅴ類　破片から復元できたもので、右へ6回反転する偏行唐草文軒平瓦である。唐草文の端部が百合の花弁状に囲まれているのが特徴である。下外区に2本の圏線があり、この圏線と唐草文の線の断面は三角形を呈し、他種類の瓦当文の文様断面が半円形を呈するのに対し異なる。また、平瓦の広端凸面に粘土を貼って厚くして瓦当を作り、曲線顎としている。凸面は瓦当から約7cmまでナデているが、凹凸のはげしい縦位の条線がつけられている（第9図11）。凹面は瓦当面から15cm位までヘラケズリされており、模骨痕のついた布目圧痕がみられる。

Ⅵ類　久米寺と直接かかわるかどうか疑わしいものだが、珠文軒平瓦が一点出土している。上下外区は素文縁で内区に、2個の珠文を線で結んだものを一単位とする文様をおいている。

表2. 軒平瓦計測値・出土個体数一覧

単位 cm

軒平瓦		I 類	II 類	III 類	IIII 類	V 類	VI	地区別個体数	
上弦幅		30.5	26.7	——	——	(25.2)	——		
下弦幅		33.1	28.2	——	27.0	(27.0)	——		
厚		2.3	5.0	3.3	5.7	3.8	4.0		
内区文様		——	——	——	均正唐草文	扁行唐草文	珠文		
上外区文様		——	——	——	圏線	——	素文		
下外区文様		——	——	——	圏線	圏線	素文		
全長		41.1	378	不明	不明	不明	不明		
出土個体数	1区	12	16	11	0	5	0	44	14.4%
	2区	44	160	1	1	5	0	211	69.2%
	3区	9	14	1	0	0	0	24	7.9%
	4区	5	11	2	0	0	0	18	5.9%
	5区	1	5	0	0	0	1	7	2.3%
	7区	1	0	0	0	0	0	1	0.3%
	8区	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	72	206	15	1	10	1	305	100%
全個体数に占める割合 %		23.6%	67.5%	4.9%	0.3%	3.3%	0.3%	99.9%	

( ) は復元数値

3. 丸瓦 (第10・11図、図版7～12)

玉縁をつけないいわゆる行基葺き型式のものだけが出土している。ほぼ全形のわかる12点を図と写真で示したが、3・4が同一である以外はそれぞれ刷毛目、布目痕ヘラケズリ調整の方法などが異なり11種類に分類できる。全長35～38cmであるが1例だけ30cmと小さいもの (12) がある。これは布目叩き目がみられ、他の丸瓦と多少異なるものといえよう。

表3. 丸瓦一覧表

単位 cm

番号	長	幅 狭	幅 広	高	凸面	凹面	焼成 胎土 色調
1	38.0	9.8	17.5	7.7	うっすらした刷毛目	布目 広端・狭端部ヘラケズリ 側端部ヘラケズリ	良好 堅緻 灰色～淡茶褐色
2	37.7	9.1	17.3	7.5	縦位のヘラケズリのあとうっすらした刷毛目	布目 側端部ヘラケズリ	良好 堅緻 茶褐色がかった灰色
3	37.0	10.2	16.0	8.6	目立たない刷毛目 刷毛目端部が凹凸を示す。	布目 広端・狭端部ヘラケズリ 側端ヘラケズリ	良好 堅緻 灰色断面明茶褐色
4	38.6	9.0	16.6	8.7	目立たない刷毛目 刷毛目端部が凹凸を示す。 丸瓦3と同類	布目 広端部・狭端部ヘラケズリ 側端ヘラケズリ	普通 やや軟 黄茶褐色
5	36.8	9.7	15.7	8.5	目立たないうっすらとした刷毛	布目	普通 やや軟質白色砂礫多し 淡灰色
6	34.5	8.0	14.4	7.9	浅く細い刷毛目	布目	良好 堅緻 灰黒色
7	35.8	10.4	16.1	9.5	目浅く細かい刷毛目 広端部ヘラケズリ	細かい布目 広端部ヘラケズリ 側端部ヘラケズリ	良好 堅緻 暗茶褐色
8	36.1	(10)	17	8.2	広狭のある細かい刷毛目	やや粗い布目 側端部ヘラケズリ	普通 やや軟 灰白色
9	34.8	9.3	(16.0)	7.5	幅の広い粗い刷毛目	布目はやや粗い	良好 堅緻白色砂粒多い 灰色で断面茶褐色
10	——	9.4	(13.8)	8.3	幅の広い粗い刷毛目	布目細かい	良好 堅緻 灰色がかった暗茶褐色
11	35.5	11.5	20.9	9.9	粗い刷毛目（軒平瓦Ⅰ類と同じ）。広端部ヘラケズリ	布目	良好 堅緻白色砂礫多い 青灰色
12	30	7.9	(12)	9.2	縄目叩き目のあとナデている。広端部ヘラケズリ	布目の上をナデ、側端部ヘラケズリ、広端部ヘラズズリ	良好 堅緻 灰白色

4．平瓦（第12～20図、図版13～23）

刷毛目調整や格子目・縄目叩き目により16種に分類できる。1～8の刷毛目はそれぞれ幅・深さが異なる。9・10は同一種で大形の斜格子叩き目、11・12は小形の斜格子叩き目で別種。12は軒平瓦Ⅲ類の斜格子叩き目と同一。13は縦位の刷毛目。14は縦位の条痕で軒平瓦Ⅴ類と同一。15・16は斜位縄目叩き目。17・18は粗い縄目叩き目。19～22は浅い縄目叩き目。以上16種類に分類される。このうち15・16と19・22の縄目叩き目の瓦は他と比較して全長が短い。凹面には成形時の布目痕が明瞭に残っているが1～16はすべて桶巻きづくりによる模骨痕がみられるのに対して17・18、19～22の二種は模骨痕を残さず、後者の側面に布目痕がまわり込んでいるものがみうけられることから凸型により1枚作りによったものと考える。

表4　平瓦一覧表　　単位 cm

番号	長さ	巾 狭	巾 広	厚	凸面	凹面	焼成 胎土 色調
1	41.2	26.0	28.6	3.2	巾広く浅い刷毛目 中央部ナデ	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端ヘラケズリ	良好 堅緻 青灰色
2	41.0	25.4	28.0	4.0	巾広く浅い刷毛目	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端ヘラケズリ狭端ヘラケズリ 粘土板を縦位につなぐ	良好 堅緻 暗茶褐色
3	——	——	27.0	2.5	巾広く浅い刷毛目	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端部ヘラケズリ	普通 灰色—灰黒色
4	——	——	28.9	2.9	粗い刷毛目 広端部ヘラケズリ	布目 模骨痕 桶巻きづくり 広端部ヘラケズリ	良好 堅緻 青灰色
5	41.5	27.2	29.0	3.0	巾広くはっきりしたハケ目	布目 模骨痕 桶巻きづくり 広端部ヘラケズリ	不良 軟質 灰白色
6	40	26.5	30.5	2.5	細かいハケ目	布目 模骨痕 桶巻きづくり 広端部ヘラケズリ	良好 堅緻 灰黒色
7	——	——	——	2.4	細かい刷毛目の上に格子目タタキ	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端部ヘラケズリ	灰色軟質
8	42.3	27.2	28.5	3.0	刷毛目のあとで格子目タタキ	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端部ヘラケズリ 狭端部ヘラケズリ	やや軟 灰色

9	(36.0)	——	——	3.0	大型斜格子 広端部ヘラケズリ	布目 模骨痕 桶巻きづくり 広端部ヘラケズリ	不良 軟質 灰黒色
10	——	——	——	2.8	大型斜格子 9と同類	布目 模骨痕 桶巻きづくり	普通 やや軟 灰色
11	——	——	——	1.7	やや大きい斜格子	布目 模骨痕 桶巻きづくり	不良 やや軟 黄褐色
12	——	——	——	1.8～ 2.7	小さい斜格子	布目 模骨痕 桶巻きづくり	不良 やや軟 黄褐色
13	——	——	——	2.4	縦位の刷毛目	模骨痕 桶巻きづくり 側端部ヘラケズリ	不良 軟質 黄褐色
14	——	——	——	2.7	縦位の直線条痕 側端部ヘラケズリ	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端部ヘラケズリ	不良 軟質 黄褐色～暗灰褐色
15	——	(22.5)	24.6	2.6	斜位の縄目叩き	布目 模骨痕 桶巻きづくり 側端部ヘラケズリ	不良 軟質 灰白色～灰黒色
16	35	——	24.5	——	斜位の縄目叩き 15と同類	〃 〃	不良 軟 黄褐色
17	40.5	20.7	27.5	3.5	粗い縄目タキ目	布目 側端部ヘラケズリ 広端部ヘラケズリ	軟 灰黒色
18	43.4	27.9	28.9	4.2	粗い縄目タタキ目 17と同類	布目 側端部ヘラケズリ 広端部ヘラケズリ	不良 小礫混り 灰白色軟質
19	35.6	21.9	23.3	2.7	縄目タタキ目 19.20.21.22は同類	布目 側端ヘラケズリ	やや軟 灰色
20	33.7	24.7	26.2	2.8	縄目タタキ目	布目 側端ヘラケズリ	良好 焼きぶくれ、 焼ひずみ 軟 青灰色
21	35	26.7	27.2	2.3	縄目タタキ目	布目 側端ヘラケズリ 側面に布目がまわる凸型1 枚づくりを示すもの	やや 灰白色

22	34.5	24.6	26.4	2.7	縄目タタキ目	布目 側端ヘラケズリ	堅緻 灰色

5．道具瓦（第21・22図、図版25）

隅切瓦・熨斗瓦の二種が出土している。隅切瓦は45点確認されている。再度瓦の破片にあたって検討すれば増加する可能性もある。凹面を正面隅切部を上位にして左上を切断したもの28点、右上を切断したもの17点である。凸面縄目叩き目のものを含まずすべて刷毛目調整と格子目叩きの平瓦を利用して焼成前に隅切瓦としたものである。

表5.　隅切瓦

地　区	出土点数	左	右
1　区	26	20	6
2　区	13	7	6
3　区	3	1	2
4　区	2		2
その他	1		1
計	45	28	17

熨斗瓦として確認できたものは、わずか2点である。第22図1は凸面に刷毛目のある平瓦を焼成前にあらかじめ4ケ所刻みを入れておき、焼成後に4分割して利用したものである。矢印の位置からそれぞれ2～5cmの刻み込み痕跡がある。第22図2は焼成前に巾20.6cmに切断したものである。1は建物Ⅱの東北隅礎石から南へ地覆として敷かれた瓦等の中に置かれていた。2は建物Ⅱの南雨落溝内より出土した。

6．文様瓦（第21・22図、図版24～26）

ヘラによる印刻と、指頭によるナデの二種がある。第22図1は熨斗瓦の凸面に細い線で斜位の平行した6本の線を引き、それと直交し、かつ1本1本の間を少しづつずらしながら階段状に、しかも対称的に刻み込んでいる。第22図3はやや太いヘラにより圏線をめぐらし一部それと重なるように花のようなものを2つ描いている。

4・5・6は平瓦あるいは軒平瓦の凸面に指頭によるナデにより書かれたもので、調査中に文字の可能性も指摘されていた。しかし、その後の整理により、この種の平瓦・丸瓦の凸面ナデであり、文字ではない可能性がでてきたが一応今後の検討のためにも図示しておく。

第2章　仏像・壁土・焼土

仏像は塑造と塼仏の二種出土している。塑像は如来・菩薩・天部の破片に分類できる。塼仏は如来座像2点と三尊仏1点であり、2区、すなわち塔・金堂周辺から出土しており、特に塔周囲から焼土・壁土を混在して出土した。塔心礎西北12mの地点には東西5m、南北3m、深さ40cmの浅い凹みがあり、ここから一括して菩薩像の頭髪・顔面・腕・裳等の破片が多く出土した。（前回報告書掲載、写真49～51参照）塔周囲では、雨落溝の瓦留りより上層で出土する傾向があり、基壇上面に堆積していた焼土等を後に整理して周囲の雨落溝の凹みに落したり、西北方の凹みに廃棄したものと考えられ

る。塑造仏はすべて砂質の均一な胎土で、壁土は不均一な粘土で小礫混りのものであることから、焼土の中から分類できる。

1．塑造仏・如来像（図版27）

如来像の部分として判別できるものは、約15点出土した螺髪だけである。直径2.5cm×2.1cmのやや楕円形で高さ2.9cmの円錐形を呈し、頂部からみて左廻りに螺線状に4～5回転する。笵型に粘土を入れて作ったとみられ、型の合せ目の甲張り状のものが左右対象で縦位にみられる。頭の表面と接合する部分は、やや斜めに切断され、直径7mm、深さ約2cmの円錐形の孔があり、棒状のもので頭部と螺髪を接合したと考えられる。胎土は砂質で黄褐色～茶褐色～灰色に焼けているが、火災にあい焼けたものだろう。表面に金箔がわずかに付着しているものもあり、本来は金色に輝いていただろう。

2．塑造仏・菩薩像（図版27～30）

塑造仏の破片はほとんど菩薩像の破片である。頭髪（垂髪）・顔面・上腕と臂釧（ひせん）・瓔珞（ようらく）・裳・裙・指・台座の反花等が判別することができた破片である。頭髪は太さ約1.5cmの紐状の髪がとぐろをまいた感じで、頭頂部のふくらみを表現している。図版28—1は頭の中心部が残っており、空胴部分の内面に巾約1cmの凹みが螺線状にめぐっており、対象的な位置に2cm×2cm、長さ1.5cmの釘が2本一対で打たれている。すなわち、心棒の周囲に縄状のものを巻きつけ、½程外に残すように釘を打ち、それに粘土を貼付けたに違いない。この折に木心にそのまま粘土を貼付けずに縄状のものを使用したのは、貼り付けた粘土が乾燥時の収縮により剝落したり、ヒビ割れすることを防ぐ効果があったと想定される。

顔面は顎から唇・鼻にかけてのものと、目から下唇にかけてのもの、鼻下の破片があり三体分とみられる。上腕の臂釧は5点あり（第27図2）、腕の直径は5.5cm～6cmである。いずれも中心に1.3cm×1.85cmでやや長方形断面の孔が貫通している。

指先は一本の太さが1.1cm～1.8cmでやや小ぶりである。爪や関節の皺まで表現している。独立した指には直径3mmの鉄心を利用している。

台座反花は幅約8cmで隆起が大きい。複弁で弁端外縁には櫛歯文の凸帯がめぐる。

3．塼仏（第9図(2)、図版3）

4点検出されたが、そのうち1点は発掘の際破砕されたまま復元に到っていない。いずれも台の上に半肉彫で仏像を表現したものである。そのうち2点は同笵の如来座像で、高さ4.65cm、巾3.6cm厚さ1.3cmと小さく、全体が黒褐色に焼かれているが、顔面に金箔の付いているものがあることから、かつては金色に輝いていたのだろう。同笵によるものが2点あるので、欠損部分をそれぞれ補って図を書いたが、特に腕の中心から左手にかけてはっきりしない。全形が光背形で縁に蓮弁をかざり、蓮華座の上に座し、頭光と身光はそれぞれ二重になっている。肉髻は、はっきりするが、耳はもともとないらしい。眉、目、鼻、口も図に書くとはっきりするが、光線のかげんで判別しにくい。胸に二重の輪が見えるのは三道だろうか、右手は指先が省略されている。ひざとひざの間に見える三本の線は衣を表現したものだろうか。側面から見ると、縁の蓮弁から3mm程の所に段がついている。これが笵型の終っているところで、そこから背面までの間4～7mm程は、ヘラで削りとられている。背面には指紋

の跡が生々しく、それもヘラで削っている。このように精製された粘土を指で笵型に押込んで縁のでている所をけずり、背面の指圧痕を消して型からはずし焼き上げたものだろう。

もう一種類の塼仏は三尊仏の断片である。左の脇侍菩薩の膝から上と、中心仏の右腕と光背の部分である。現存の高さ4.6cm、幅4.6cm、厚さ1.52cmで黒褐色に焼けており、中心仏から復元すると幅9cmとなる。顔面と胸部に金箔痕がみえる。脇侍菩薩は頭光が一段高く、肉髻も表現されている、両手を合掌した立像である。左端に巾約5mmの縁があり、ヘラケズリされている。側面には前者と同じく文様面から2～3mmの所に段がつき、笵型によって製作されたことがわかる。

4．壁土・焼土（図版40—4）

発掘調査により1区、建物Ⅱの西溝からは炭化物を主体とした焼土が整理箱に1箱出土している。が、量的には多くない。塔周辺の焼土が最も多く3箱、次いで金堂付近で仏像片と共に約1箱分出土している。いずれも壁面表面がよく焼けて、灰色を呈するものもある。生焼けの焼土塊の中に、灰白色を呈した軟質の壁面の漆喰が付着しているものがみられる。壁面と判別のできる焼土塊は厚さ5cm、最大長10cm以下に分解している。胎土は荒く、スサが混入し、小礫・砂粒も多い。

第3章　土　　器

8区を除き各調査区から多量の土器が出土しているが断片が多く、寺院建立前の弥生式土器、土師器、須恵器もみられ、重複遺跡であることが知られている。ここではその一端を紹介するにとどめる。

1．須恵器（第23～25図、図版31～35）

寺院建立前の黒色土層、黒褐色土層あるいは整地土層中から、しばしば古墳時代の土器の出土がみられる。第23図1～3は4区黒色土層中から一括出土したもので、ひずんでいる坏身口縁部を復元すれば口径約12cmを計る。小壺の底部は火をうけて茶褐色軟質に変質しており、内面には黒色の付着物もみられる。須恵器として煮沸に使用する例は珍しい。4は口径10.1cmの坏身で、久米廃寺北側を東西方向に走る農道拡幅工事中に出土したもので、口径の小さく、口縁部立上りの小さい同様の断片は、しばしば基壇造成土や旧表土中から細片が出土する。5～8は蓋である。扁平なつまみを有するものが多い。5は口径18.3cmと大きく、ヘラケズリのあとつまみを接合したもので、灰色を呈し、軟質、焼成不良である。6は墨書土器で口径13.7cmである。灰色、やや軟質、焼成良好、ヘラ起しである。7は、口径14cm、青灰色を呈し堅緻、焼成良好である。8は口径15.3cm、灰白色堅緻、白色砂粒多く、焼成良好である。

坏身は高台のしっかりしたもの（9・10）から、退化して小さく斜め外方へ向くもの（11・12）がある。底部糸切底（14・15）は胎土、焼成からいわゆる「勝田焼」である。11は口径12.1cm、高さ4.3cmで、底部ヘラ起し、口縁部内面に灯明皿として使用した際の灯心のススの付着がみられる。灰色を呈しやや軟質である。12は口径15cm、高さ5.9cm、灰色を呈し堅緻、焼成良好、白色小砂粒を含む。13は口径15.8cmで、灰色を呈し堅緻、焼成良好である。

高坏は脚部の破片がみられる。16は灰色堅緻、17は灰白色でやや軟質である。

第24図１は大形の花瓶である。底部糸切底で広がった底部から垂直に立上った円筒部を有する点に特徴があり、青灰色堅緻である。青銅器の花瓶を模したもので、須恵器で大形のものとしては他に類例を知らない。２・３も花瓶の類の口縁部で、１・２は塔西北部仏像溜りより、仏像といっしょに出土しており、仏花器としての使用がうかがえる。５は細片から図上復元した平瓶で、灰白色で上面にガラス質の緑色自然釉のかかった優品である。胴上端内面に、青海波文叩き目を残す。５・６は薬壷形壷、８は長頸壷、９は壷底部、10は鉢または広口壷の底部である。

甕類は、大きく外反する口縁部に櫛状工具により格子目文を施こした第25図１や波状文を施したもの（図版34—２）がある。削り出しの耳の破片も出土している。甕の叩き目で内面に格子目叩きを施す特徴的な一群（第25図２）がある。４は内面青海波をナデ消している。５は青海波文を残すもの、６～９は内面を粗い刷毛目でナデ消している。

２．土師器（第23図18～23）

18は丹塗り坏で口径15.3㎝高さ3.3㎝底部内面に指頭圧痕を残しそのあとナデており、他はヨコナデ、外面底部から立上る所に凹線がめぐる。口縁部はゆるく外反する。19は内面黒色を呈し、20の灯明皿や備前焼と共に建物Ⅵ付近から出土したものである。いずれもヘラ起しの底部で、20は口縁内面にススの付着がみられ灯明皿として使用したことがうかがえる。22は皿部が２段になったもので、灰色部もあり土師質須恵器の可能性もある。23は内外面ともにススが厚く付着している。建物Ⅴ（金堂）北溝より出土した。

３．施釉陶器（第９図(3)、図版36）

須恵質の緑釉陶片が６片出土している。底部を有する一片は蛇の目高台となっており、平安緑釉であろう。口縁部は一片あり、口縁端部が外反している。

４．円面硯（第24図、図版32）

破片一点が出土している。上部の陸の部分はないが、海から透し底面までがあり、復元すれば直径21～22㎝高さ6.5㎝となるだろう。長方形の透し孔は19～23を数え、灰白色堅緻、焼成は良好である。

５．墨書土器（第23図６、図版40）

須恵器坏蓋の上面に一字だけ書かれている。正確には判読できないが、島・鳥・嶋・為と色々に解釈できる。

６．中国製陶磁器・和製陶磁器（図版37、第23図26～29図）

中国製陶磁器は蛇の目高台をもつ越州窯青磁が一点検出された（第９図３）。他は龍泉窯系、福建省広東地方の南方系の窯の、白磁がある。和製陶磁器は備前焼等が出土している。備前焼は擂鉢が多く、口縁部のあまり発達していない鎌倉末のものから室町・桃山・江戸期のものまである。

第４章　金　属　製　品

青銅製相輪、青銅金具、鉄釘、鉾、鏃先、刀子、金箔等が出土している。鉱滓についても記すこと

にする。

1．**相輪**（第26～28図、図版）

銅製相輪片20点は、いずれも塔基壇周辺瓦溜りに集中して出土した。これらは、形態・構造等により水煙、九輪、刹柱、伏鉢または露盤の四種に分類できた。

1～9は水煙あるいはそれに関連した板状透彫の破片で、その一つづつの断面は台形を呈し、3面に鋳型の砂を残す。砂の付着していない面に近い側面は、鋳型の縁からのつば状の薄いはみ出しがみられる。平担な鋳型の上に、巾3.5cm前後、深さ1～1.4cm程度の溝を基本とした文様を彫りつけ鋳造したものと想定される。鋳型の砂粒は1mm以下の均質な細粒でほとんど白色を呈する。文様構成としては1が「法隆寺」の水煙の外郭を形造っている火焔状の突起の一つとみられる。2は二つの瘤がみられるが、どのような文様の部分なのかたどるすべがない。

相輪一覧表

番号	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	
1	25.3×11.7	0.9	746.0	
2	10.7× 6.9	1.1	319.0	
3	5.5× 4.2	1.1	93.2	
4	8.7× 4.0	0.9	110.7	
5	9.5× 7.7	1.0	276.5	
6	5.5× 5.4	1.05	127.5	
7	10.6× 3.6	1.4	201.0	
8	12.6× 4.0	1.35	266.0	
9	23.1× 5.2	1.35	572.0	
10	8.5× 7.1	0.5	130.5	
11	8.0× 3.4	0.6	31.6	
12	20.1× 1.2	0.6	676.0	2片接合
13	8.0× 6.7	0.4	68.2	
14	5.4× 2.4	0.7	28.0	
15	28.1×15.4	0.9	1400.0	
16	9.4× 9.1	1.1	301.5	
17	9.9× 4.9	1.3	231.0	2個に分離する
18	16.0× 4.0	1.8	188.0	
19	8.8×10.7	1.05	287.0	
20	5.6× 2.6	0.65	20.0	
合計			6073.7g	

10～17は円筒形を呈し前述のものと構造を異にする。すべて円筒の下端につば状にはみ出し部分がみられることから、下端を上面にした鋳型により鋳造されている。10～14は15～16と比べて直径が小さく、12・13のように接続のための段が付くことから、相輪の中心柱である「刹柱（さつちゅう）」であると推考させられる。11は下端直径9.5cmなのでかなり上位、12は下端直径24cm、胴筒部直径22cmで下位の部分である。13は外面の剝離がはげしいが、縦位の板状のものが接続しており、九輪等への接続部分とみられる。15～16は九輪の破片である。16は下端部復元直径98.8cmを測り、上端はゆるく内傾し尖って終る。15は内面に板状の接続部分がやや斜位についており、刹柱への接続は13のような構造のものとの組み合せと考えられる。17・18は円弧を描かず直線的であり、どの部分の破片かにわかに決し難い。19は平面図でみられるように直径40cm程度の円弧に接する造りでややゆるく内湾する平担な破片である。伏鉢あるいは露盤の部分の可能性がある。

材質については理化学的分析をしなければ正確なことを述べることはできないが、茶褐色の鉄錆も目立つ。鉄分が多いことを示すのであろうか。しかし大きい錆の塊を剝落とした部分は赤銅色を呈し、錆の発生していないものでは濃紺色（青黒色）である。銅質は1㎜前後の気孔が目立ち、中には5㎜に達する程大きな気孔や海綿状を呈するものもあり、概して不良である。また17・18にみられるごとく、湯冷えまたは湯まわりが悪いため、疑似口縁を呈する断面となり、18はその部分が分離する。

2．青銅金具（図版39）

現存長5.14㎝、巾0.6㎝、厚さ0.3㎝の長方形の銅板の下端から0.8㎝の所に0.35㎝×0.3㎝の方形の穴があけられている。また下端から4.2㎝の位置でゆるく外反し、やや幅広くなり厚さも減じてくる。下端から4.8㎝に下端近くと同様の方形の穴があけられている。

3．鉄製品（第29～31図、図版39）

久米廃寺出土鉄製品は総数500点ちかくあるが、そのうちサビ落しの済んだ147点について記述する。

鉄製の釘は方形の断面をもち長さによって次の3群に分類される。

A群、長さ23.5㎝、断面12～3㎜、B群、長さ11～14㎝、断面6～7㎜、C群、長さ6～7㎝、断面3～5㎜、A群は現在までのところ1点、B群、C群が大半を占める。特に仏像溜りから出土したもの（16～34）はほとんどこのC群より構成されている点興味を引かれる。釘の頭は薄く打ち叩いてL字形に折り曲げるのが基本であるが、円形に打ち広げたり（1・33）、両側へ突出させる（7・117）例外品がある。また欠損品ではなしに当初から頭を大きくしていないもの（12・127）も存在するが、これは隠し釘にした可能性がある。12・67・102・103・110のようにL字型に直角に曲った釘は打込んだ先を曲げて使用したのであろう。

14は鎹と考えられる。104は一本の釘を二ツ折りにして打ち込んで環状になった部分へ紐などをかけて利用したもの。105は刀子である。147は鍬先、146は鉾である。

4．鉱滓・窯壁（表）

鉱滓・窯壁一覧表 単位 g

	鉱　滓	窯　壁
1区	12,328	1,352
2区	5,147	487
3区	1,938	121
4区	11,031	2,985
5区	3,121	608
7区	516	8
計	34,081	5,561
総計	39,642	

鉱滓・窯壁は瓦と混在して出土するが、寺院建立前の古墳時代の黒色土層からも多く出土するため直接関連するものではないかも知れないが、出土状況について紹介する。鉱滓と窯壁はその比重によって異なるはずだが、外見は非常に似ているため明確に区別し難い。多少の混同はあろうが傾向は出ている。総量39,642gそのうち窯壁5,561gで全体の約$\frac{1}{7}$。鉱滓の出土状況は1区・4区が圧倒的に多くそれぞれ10㎏を超え次に2区と5区が約3～5㎏、3区約2㎏、7区0.5㎏である。これは寺院建立のための造成工事の及び方と関連があるかも知れない、下層の古墳時代以前の土層からかなり多く露出する鉱滓がある。しかし窯壁片の出土が多いことから、これが遠方から運搬されたとは考えられず。製鉄炉又は鍛冶炉がこの地に存在していたことが想定されよう。

5．金箔（図版40—1）

平坦で凹凸のない黒茶色の漆膜に金箔が付着したものが数点出土している。図版に示したものは、12㎜、10㎜、18㎜を計る。仏像類に付着している金箔にはこのような漆膜はないため別種のものと考えられる。

第5章　石器，その他

石製鍔帯・水晶・環状石斧・サヌカイト原石・その他、別の項目で取りあげなかった遺物について取りあげることにする。

1．石製鍔帯（第29図(1)）

鍔帯の一部分である丸鞆が一点出土している。幅2.4㎝、高さ2.3㎝、厚さ0.6㎝の楕円形の下端を直線的に切断した形を呈し、下辺に近く1.7㎝×0.4㎝の長方形の透孔が作られている。裏面が広く、表面は約1㎜づつひとまわり狭くなっている。裏面には帯に止めるための糸通し孔が3ケ所穿ってある。これは1ケ所に2孔を穿ち、内部で連結する孔となっており孔の直径は約1㎜～1.4㎜である。材質は黒色粘板岩製と思われる。

美作国では久米廃寺に隣接する「領家遺跡」で透孔が無い形式のものが出土している他、津山市二宮所在の「二宮遺跡」から最近の出土例がある。

2．水晶（図版40—2）

塔北側と金堂北側から計3点の水晶が出土している。一点は2.2㎝×1㎝の6角柱、2.7㎝×1.4㎝の七角柱。4.9㎝×3.5㎝の原石塊である。水晶は、鎮壇具にも利用されているし仏舎利の代用品として仏像胎内に埋込まれる場合もあり、一概に何に使用したか想定できない。

3．環状石斧（図版41）

現状で11.6×6.8㎝厚さ1.74㎝の大きさであり、復元すれば直径12㎝、中央部の孔の直径2㎝となる。片岩製で、中央孔は両面からの細かい敲打痕が付いており、外縁をはじめ剝離痕が目立つ、平坦面は研磨されており、外縁に近づくにつれ厚さを減じていく。4区E17NIC層上面出土であり弥生時代の土器も寺域内から出土しているので、一応弥生時代のものと推定される。

4．サヌカイト原石と剝片（図版41）

4点ある。①最大のものは23.5㎝×11.3㎝、厚さ2.4㎝、2区瓦留りから出土。②11.4㎝×8.3㎝厚さ2.2㎝のものは1区出土③7.8×5.4、厚さ4㎝のものはW1N2から出土④8.6×5.4㎝厚さ0.9㎝のものはW1N2出土。①は大型の原石で周囲に自然面を残す。②は大型の剝片、③は全体が三角形を呈し3ケ所剝片をとったあとがある。④は薄手の縦長剝片で、連続して剝片をとった痕跡がある。

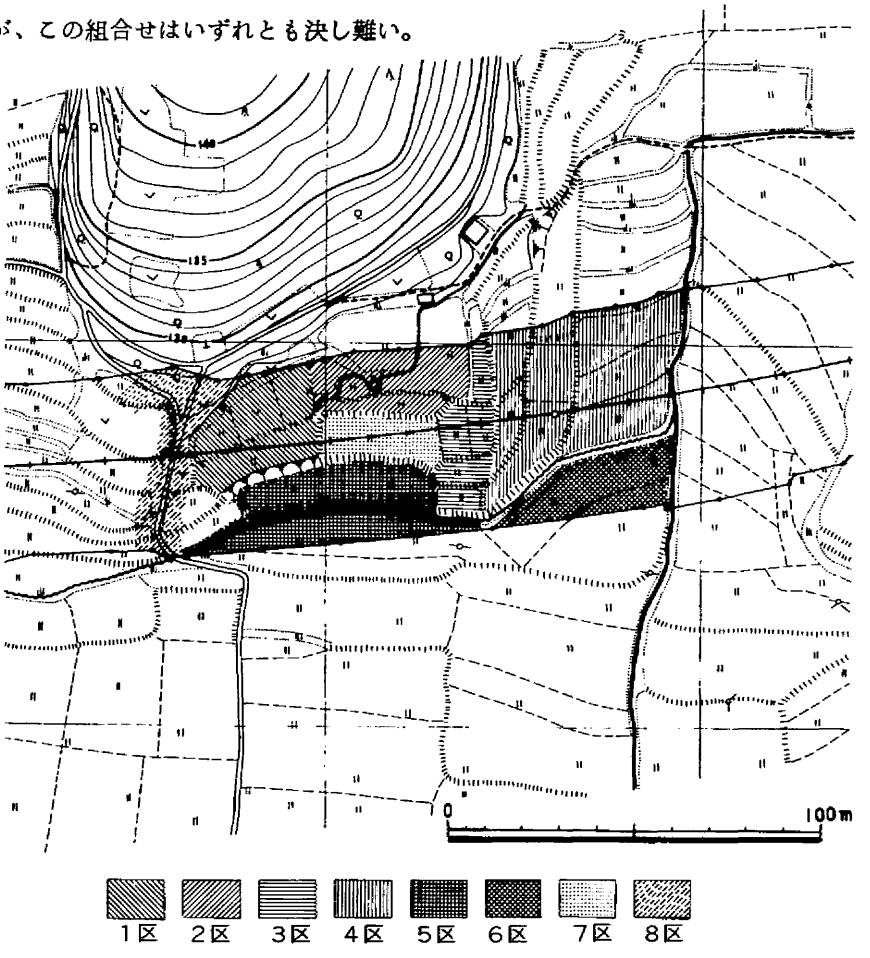
5．石製容器（第24図11）

直径15.4㎝高さ13.5㎝上面は円形を呈し直径5.6㎝深さ7㎝の孔が穿たれている。厚手の容器である。久米廃寺より南の国道に近い水田中より出土したとのことである。

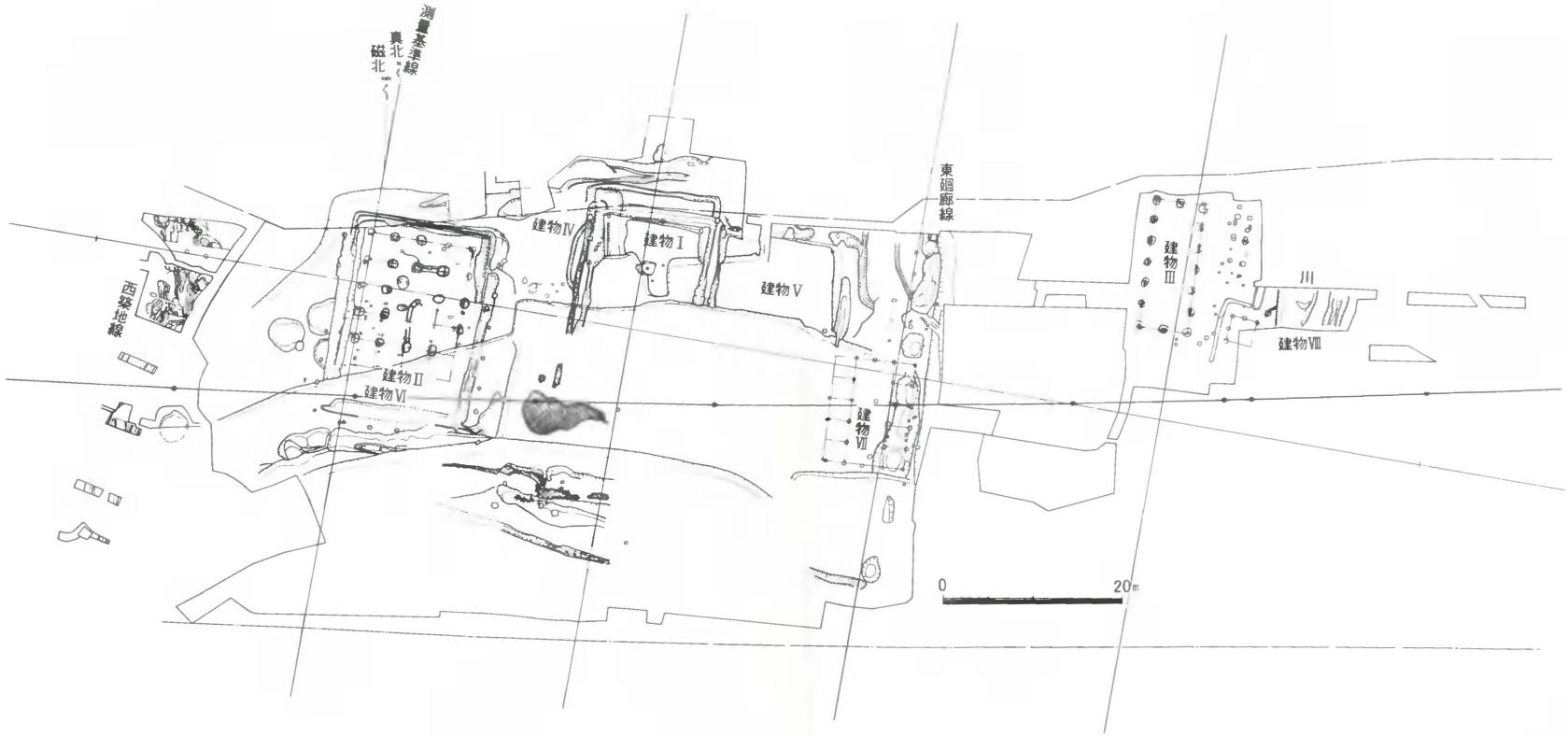
第6章 ま と め

久米廃寺の瓦について

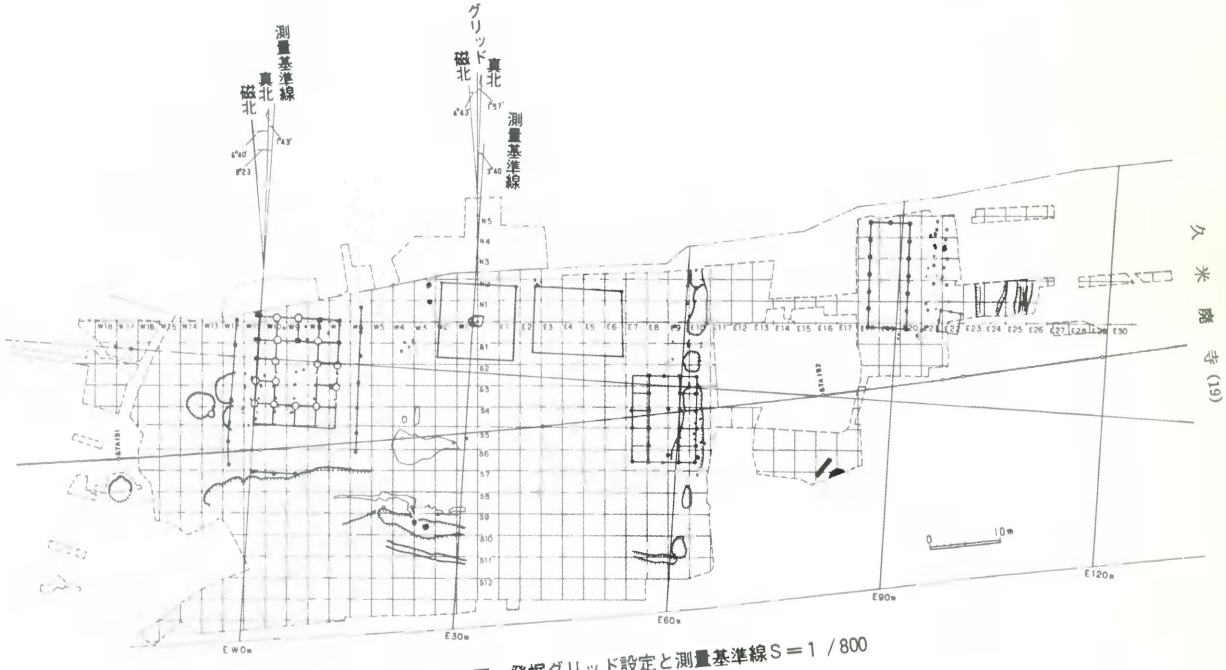
調査により出土した軒瓦の点数は軒丸瓦575点、軒平瓦305点を数え、一寺院址からの出土量としては非常に多く軒瓦の組合せについて考える素材となる。軒丸瓦ではⅢ類(複弁八葉蓮華文)の507点。軒平瓦ではⅡ類（重弧文）207点がきわだって多く、胎土、焼成も似ており、久米廃寺の代表的な軒瓦の組合せといえるだろう。次に多いのは軒丸瓦Ⅰ類(複弁八葉蓮華文)と軒平瓦Ⅰ類（素文裏面突帯文）である。この組合せは前者と比べてそれぞれ古い様相を持つものとしても妥当と考えられる。他に数量的に問題とならない軒丸瓦Ⅳ類（単弁十六葉蓮華文）・軒平瓦Ⅳ類（均整唐草文）・Ⅵ類（珠文）を除けば、軒丸瓦Ⅱ類（複弁八葉蓮華文）に軒平瓦Ⅲ類（三重弧文）・Ⅴ類（偏行唐草文）が存在するが、この組合せはいずれとも決し難い。



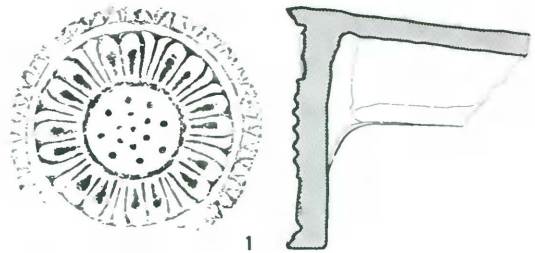
第1図 久米廃寺第2次発掘調査地区分けS＝1／2,000



第３図　遺構配置図Ｓ＝１／600　（方眼は測量基準線）

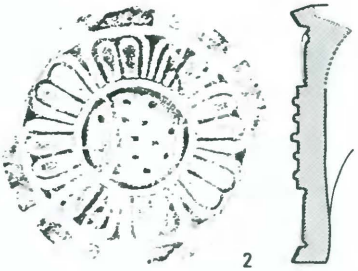


第2図　発掘グリッド設定と測量基準線S＝1／800



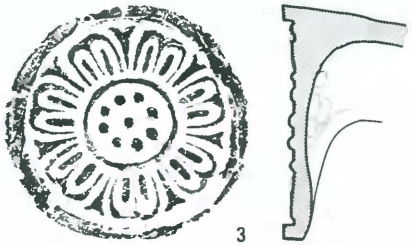
1

Ⅰ類
複弁八葉蓮華文軒丸瓦
中房　1＋6＋8
外区　線鋸歯文縁



2

Ⅱ類
複弁八葉蓮華文軒丸瓦
中房　1＋5＋8
外区　線鋸歯文縁



3

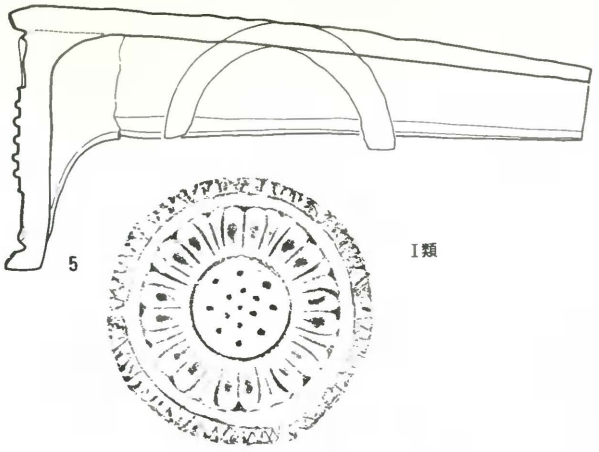
Ⅲ類
複弁七葉蓮華文軒丸瓦
中房　1＋8
外区　素文縁

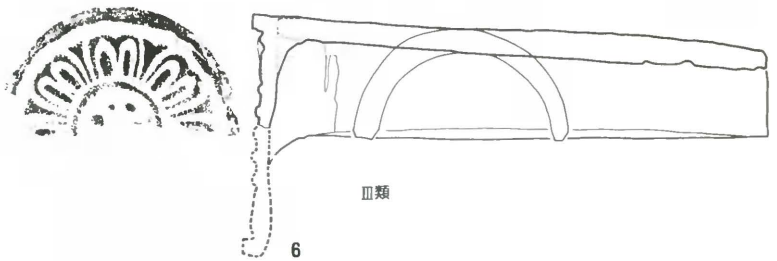
4

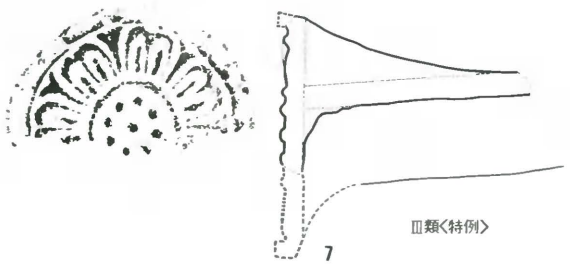
Ⅳ類
単弁十六葉蓮華文軒丸瓦
中房　1＋8
外区　圏線文縁

0　30cm

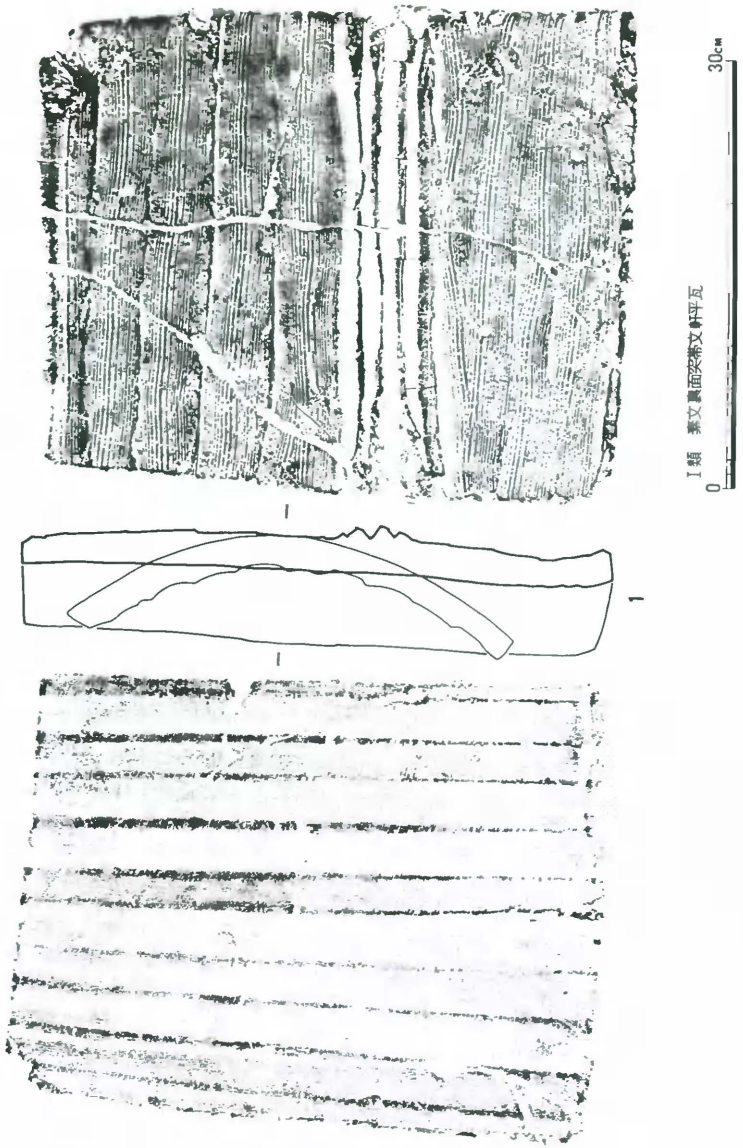
第4図　軒丸瓦（その1）S＝1／4



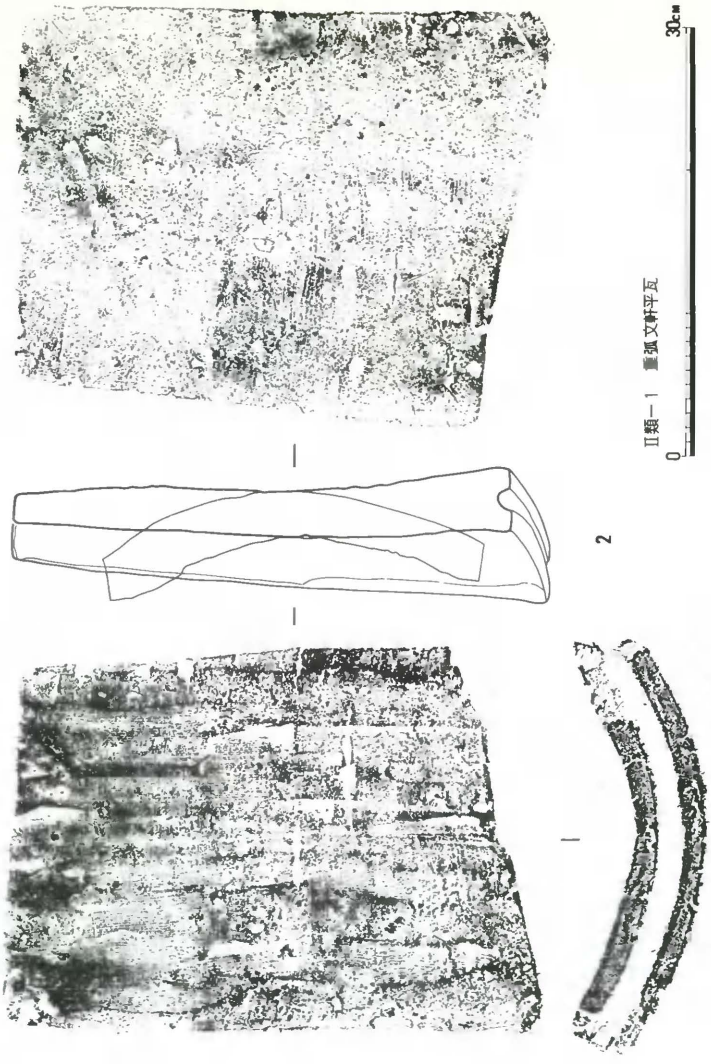




第5図　軒丸瓦（その2）S＝1／4



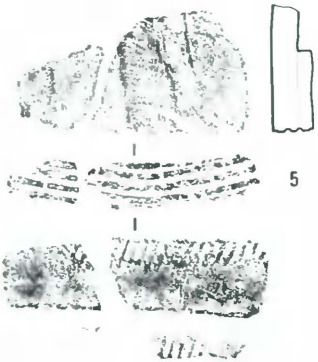
第6図 軒平瓦（その1） S＝1／4



第7図 軒平瓦（その2）S＝1／4

3

Ⅱ類－2

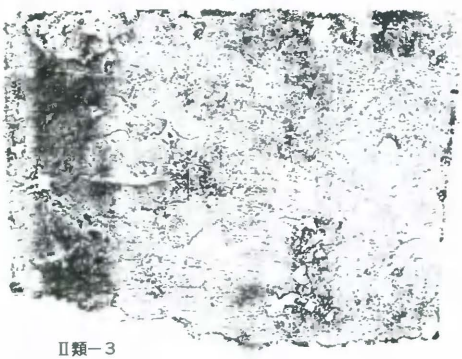


5

6

Ⅲ類－2

4



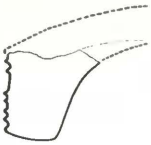
Ⅱ類－3

7

Ⅲ類－3

0 30cm

第8図　軒平瓦（その3）S＝1／4



Ⅳ類
均整唐草文軒平瓦

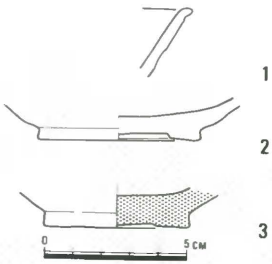
Ⅴ類
偏行唐草文軒平瓦

10 Ⅴ類 復元図
11 Ⅴ類 凸面拓影

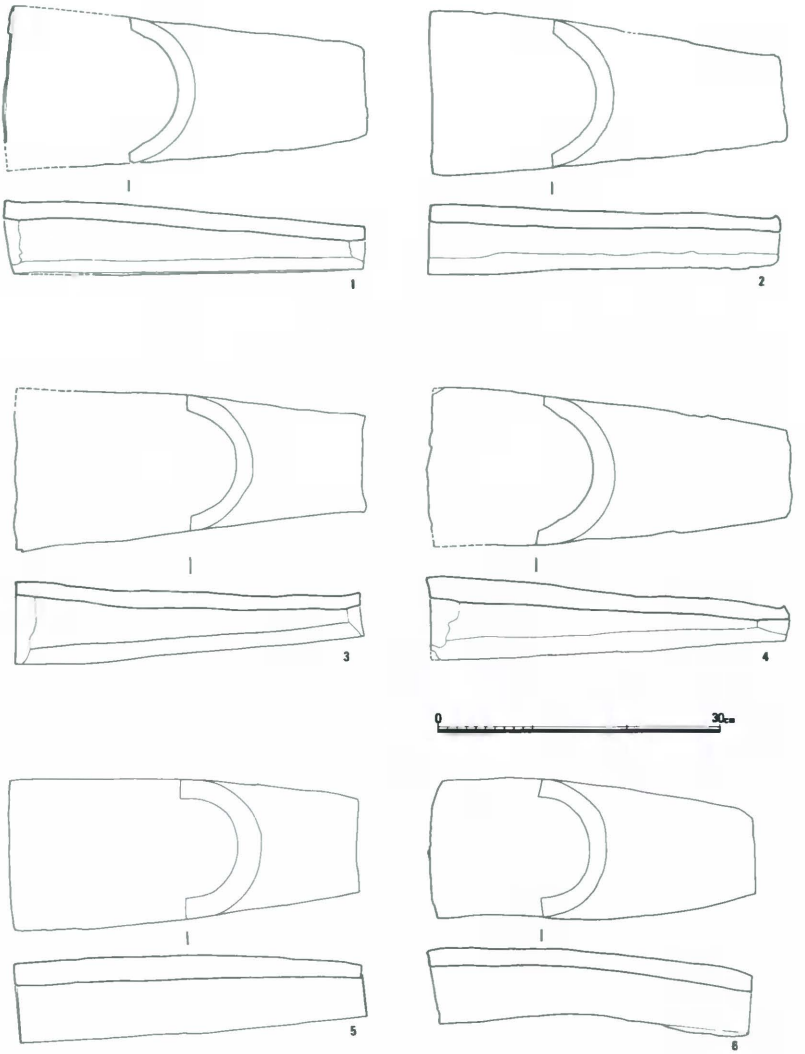
Ⅵ類
珠文軒平瓦

第９図―(1) 軒平瓦（その４）Ｓ＝１／４

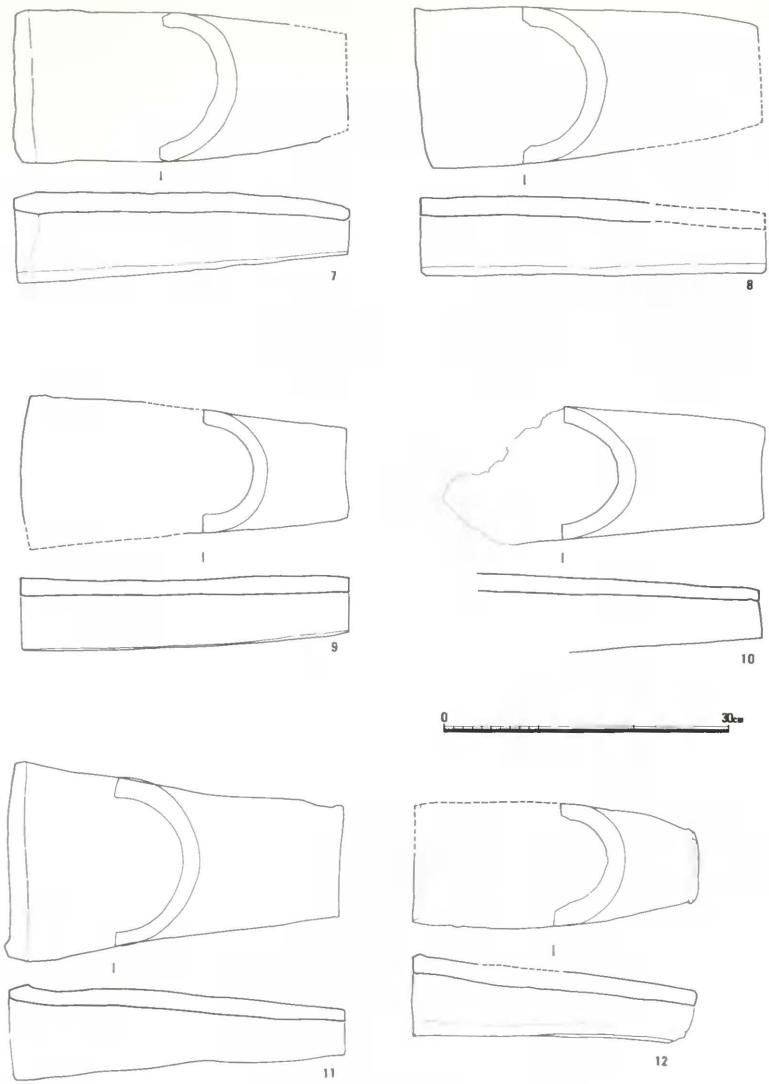
第９図―(2) 塼仏 実大



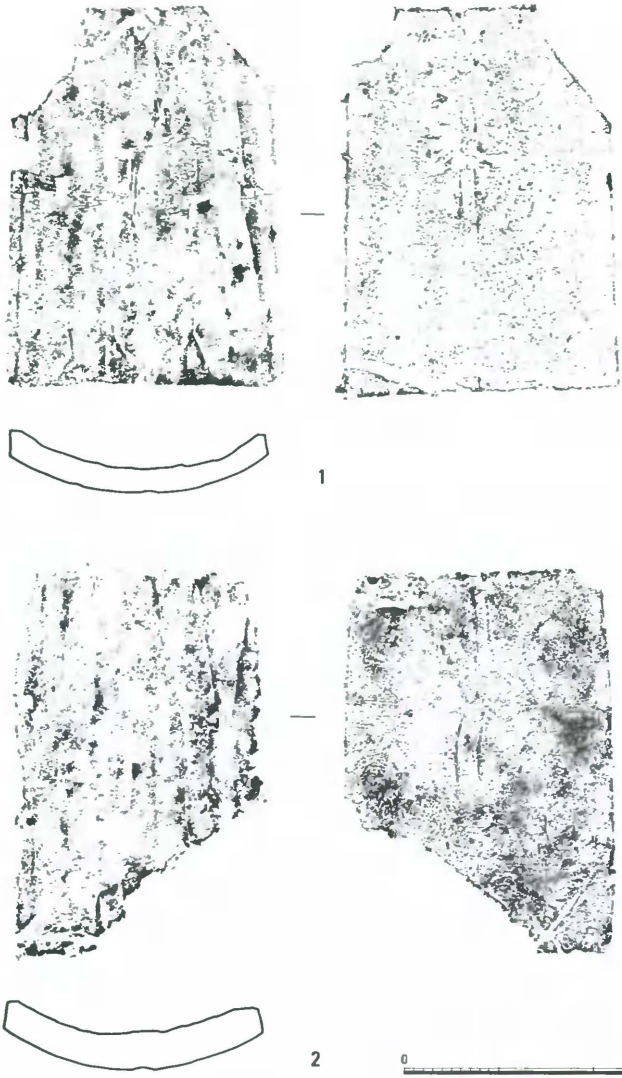
第９図―(3) 緑釉(１・２)・青磁(３)Ｓ＝１／２



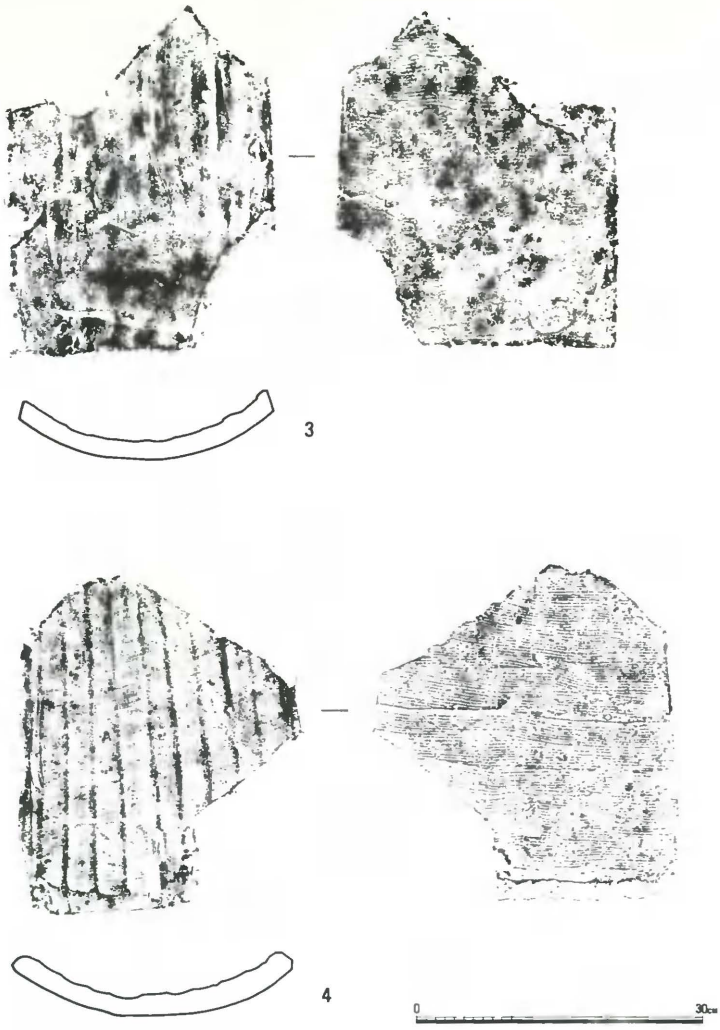
第10図　丸瓦（その1）S＝1／6



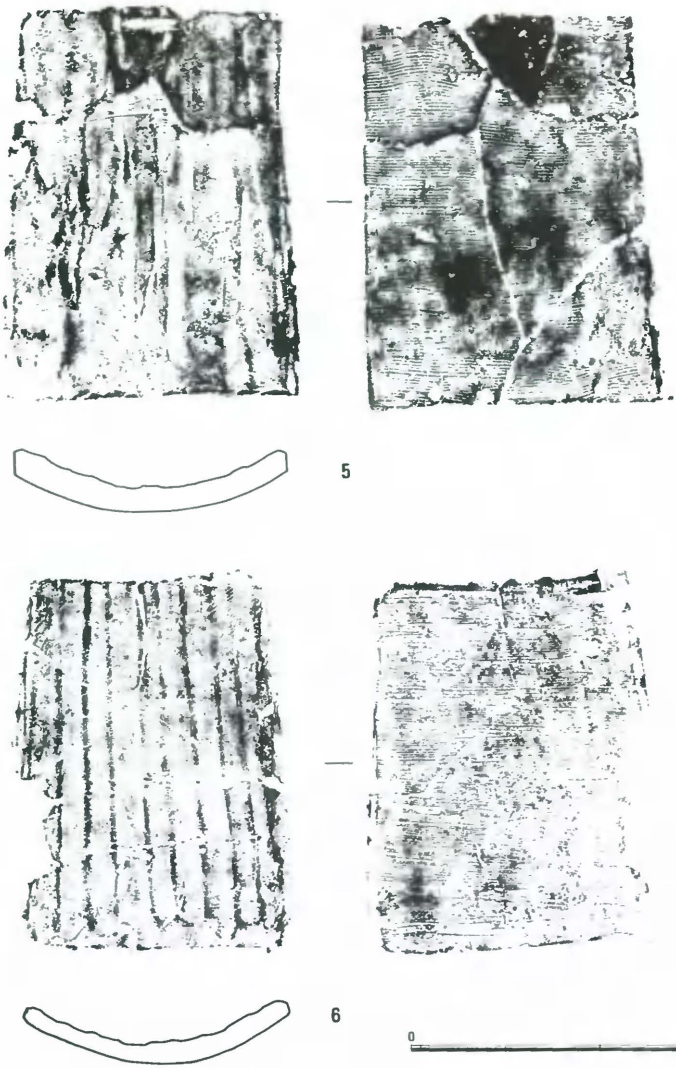
第11図　丸瓦（その2）S＝1／6



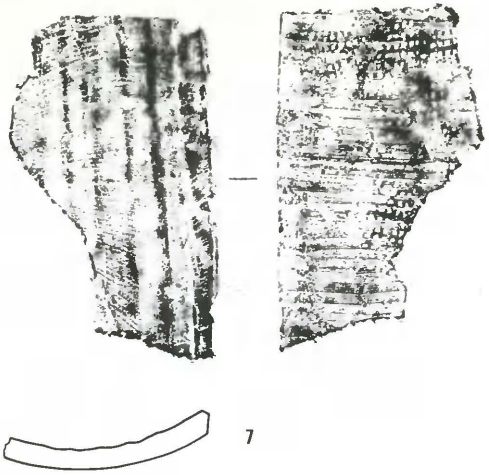
第12図　平瓦（その１）Ｓ＝１／６



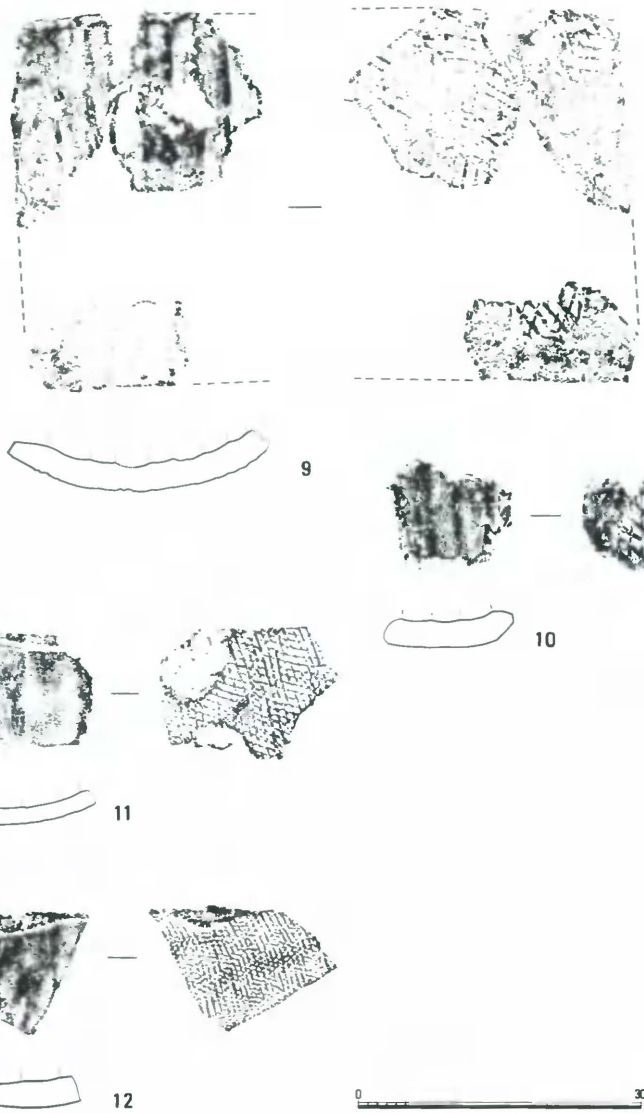
第13図 平瓦（その2）S＝1／6



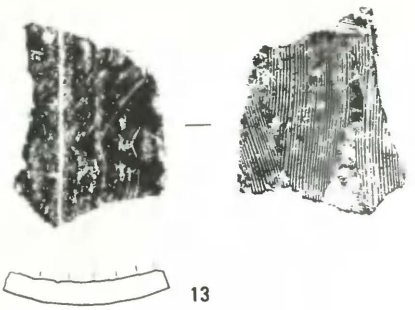
第14図　平瓦（その3）S＝1／6



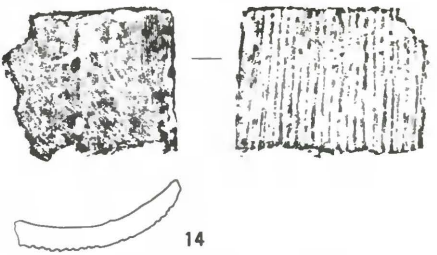
第15図　平瓦（その4）S＝1／6



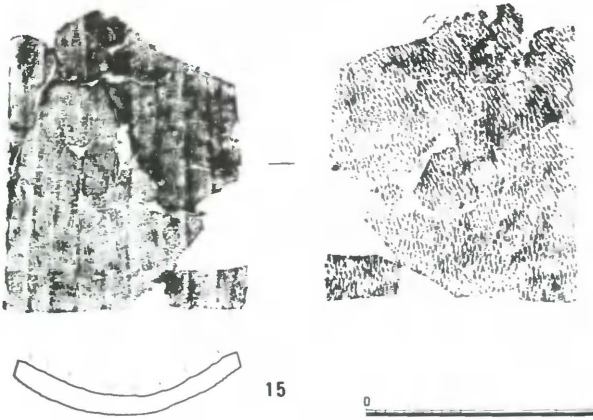
第16図　平瓦（その5）S＝1／6



13



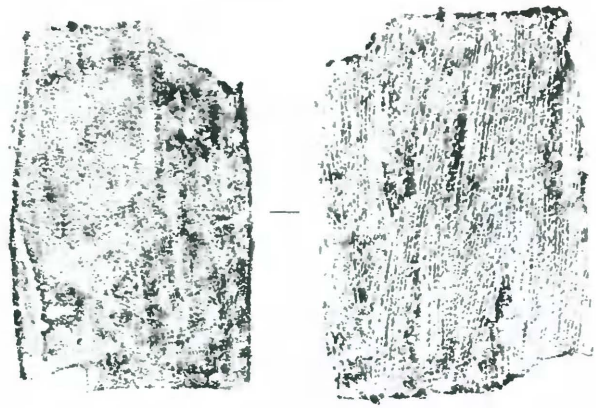
14



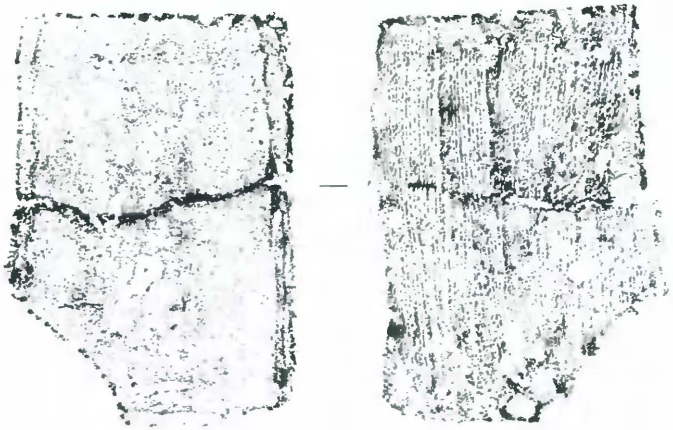
15

0 30cm

第17図　平瓦（その6）S＝1／6



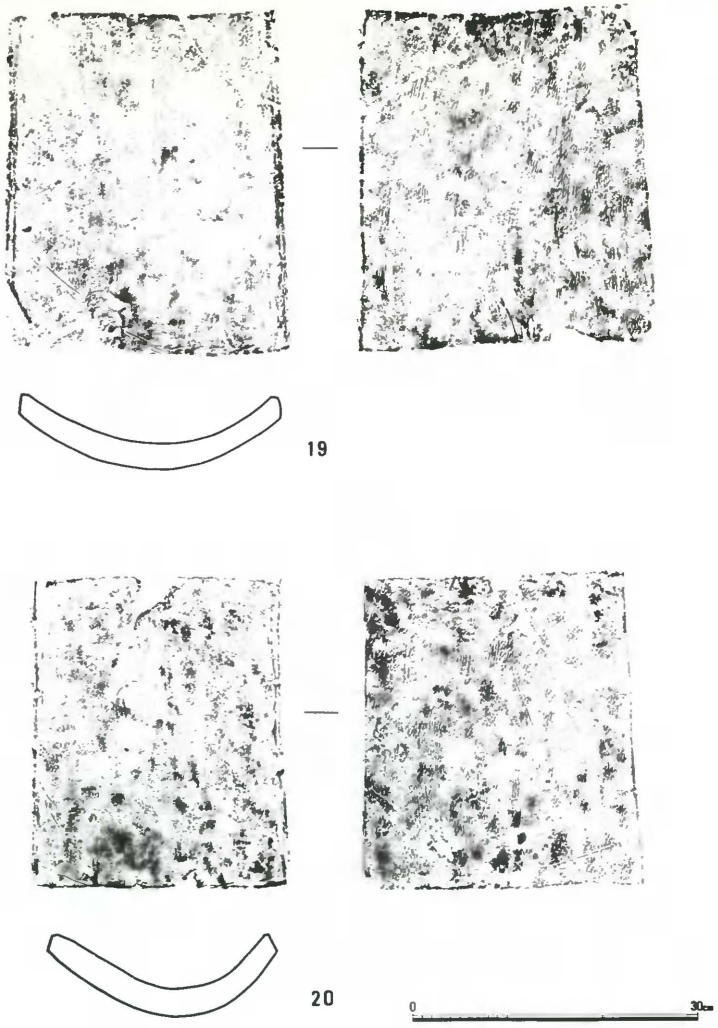
17



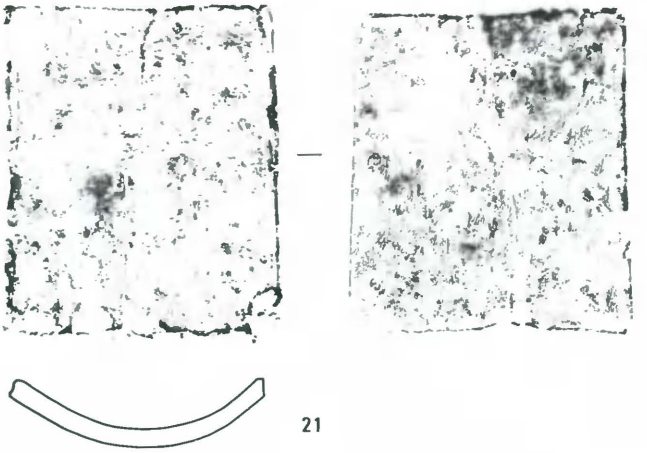
18

0 30cm

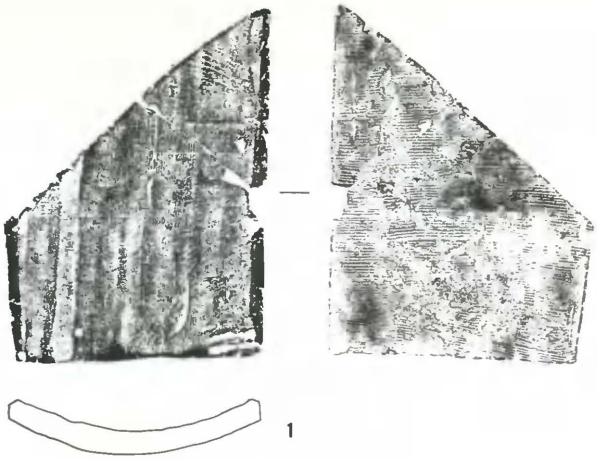
第18図 平瓦（その7）S＝1／6



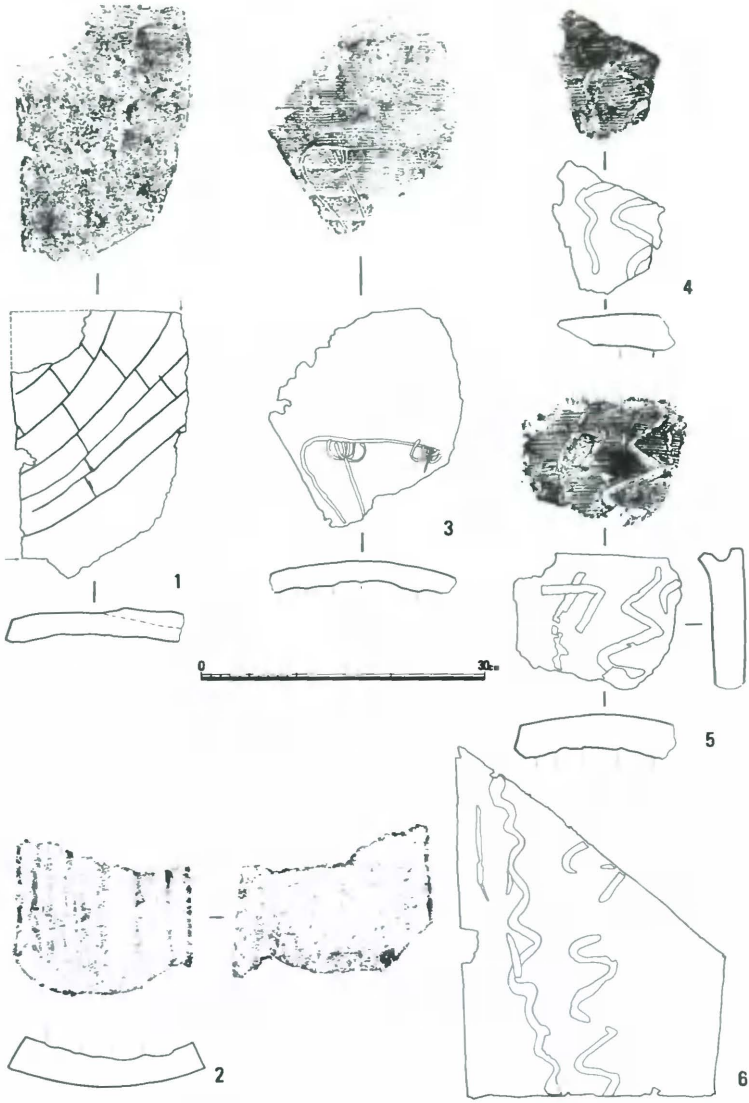
第19図　平瓦（その8）S＝1／6



第20図　平瓦（その9）S＝1／6

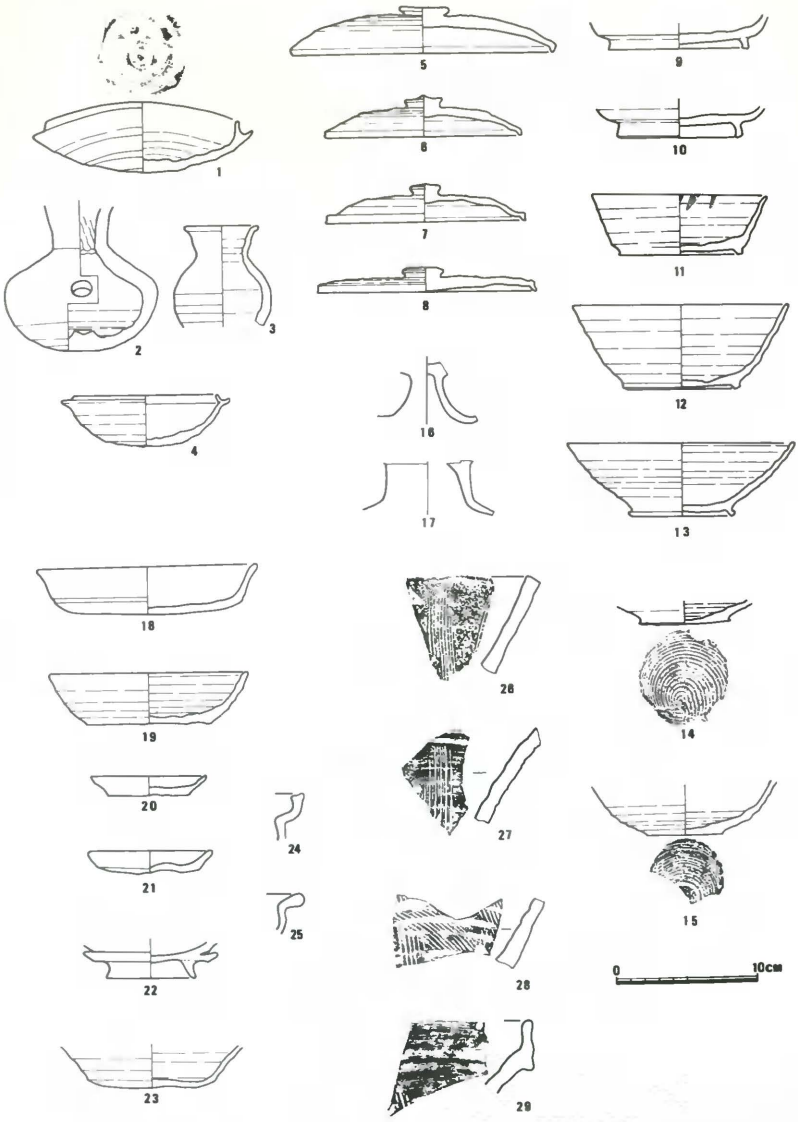


第21図　隅切瓦S＝1／6

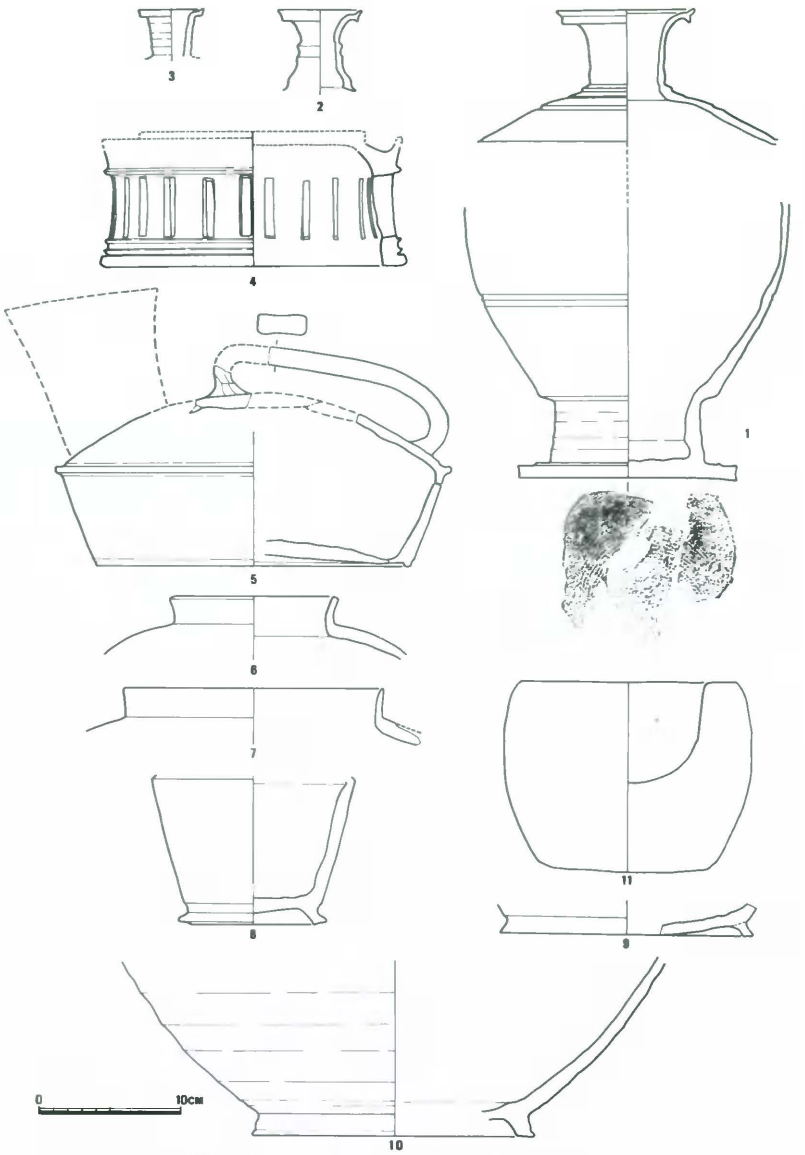


隅切瓦1

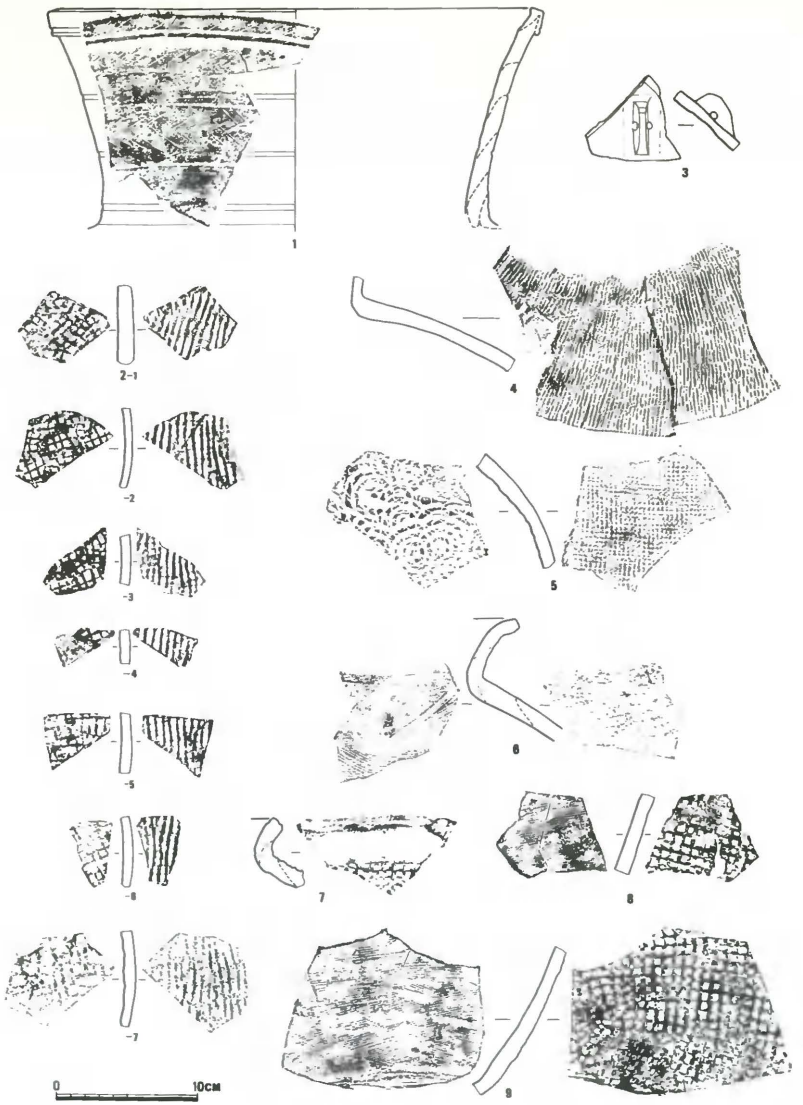
第22図　熨斗瓦（1・2）文様瓦（1・3～6）S＝1／6



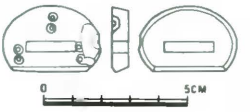
第23図　須恵器(1～17)土師器(18～25)備前焼(26～29)　S＝1／4



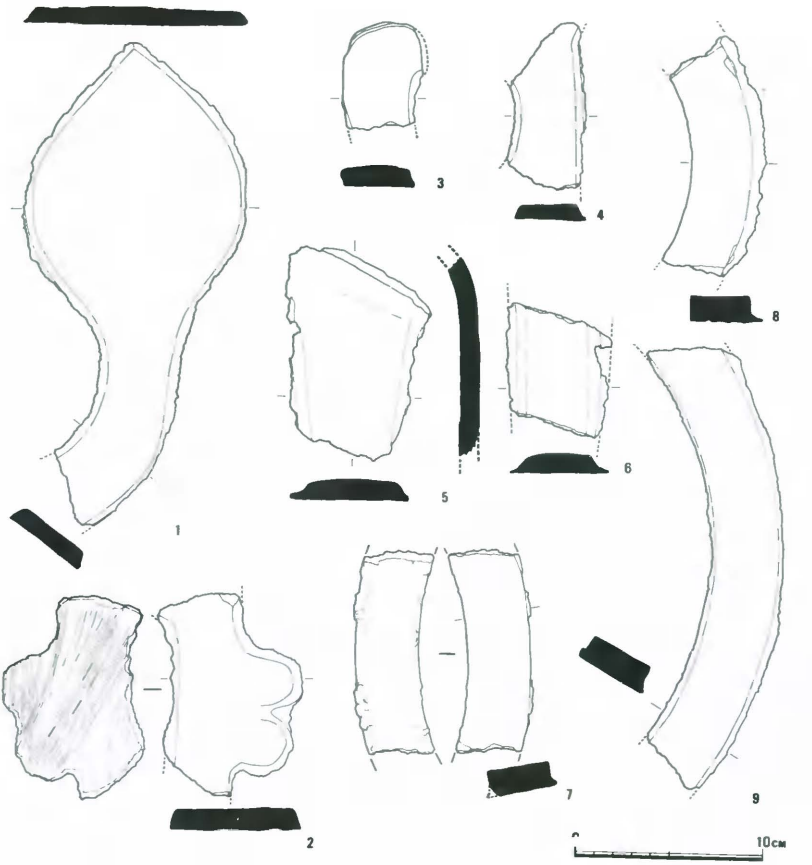
第24図　須恵器(1～3，5～10)円面硯(4)石製容器(11) S＝1／4



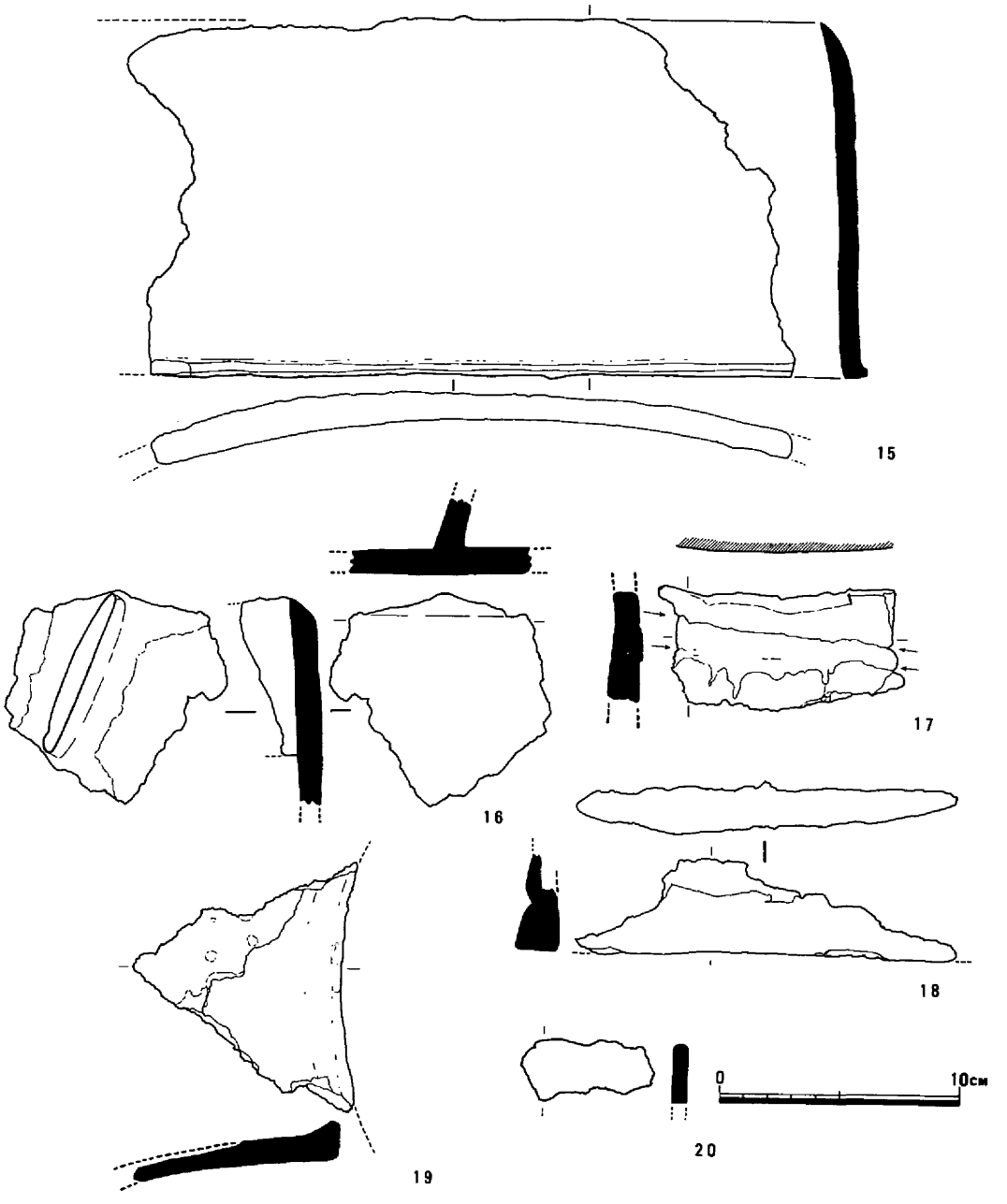
第25図　須恵器　甕　S＝1／4



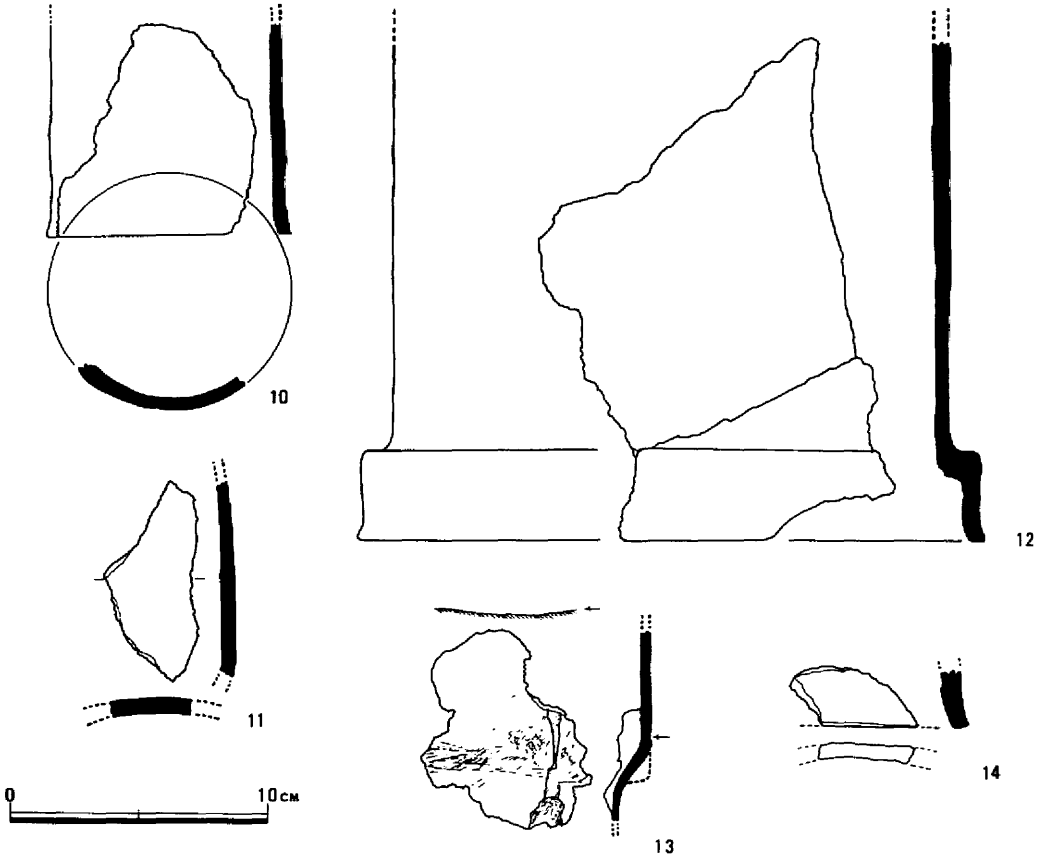
第26図(1)石製銙帯S＝1／2



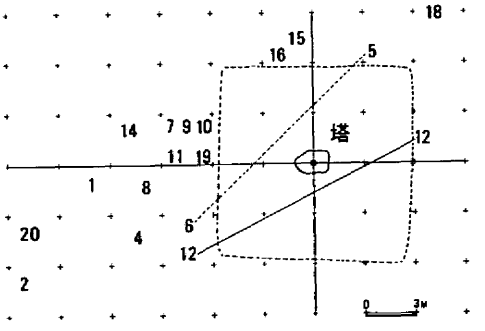
第26図(2) 相輪（その1）S＝1／3



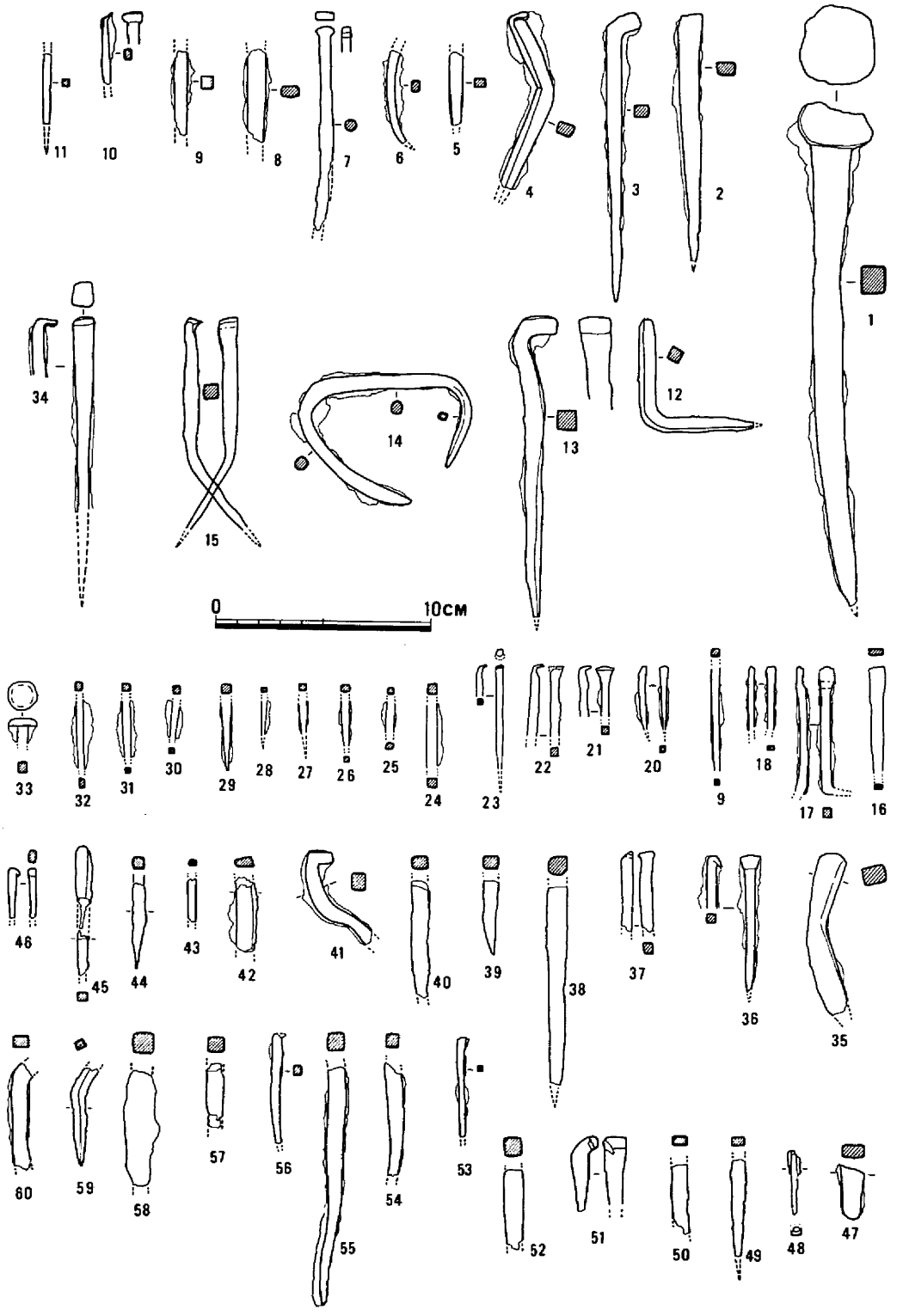
第28図　相輪（その2）S＝1／3



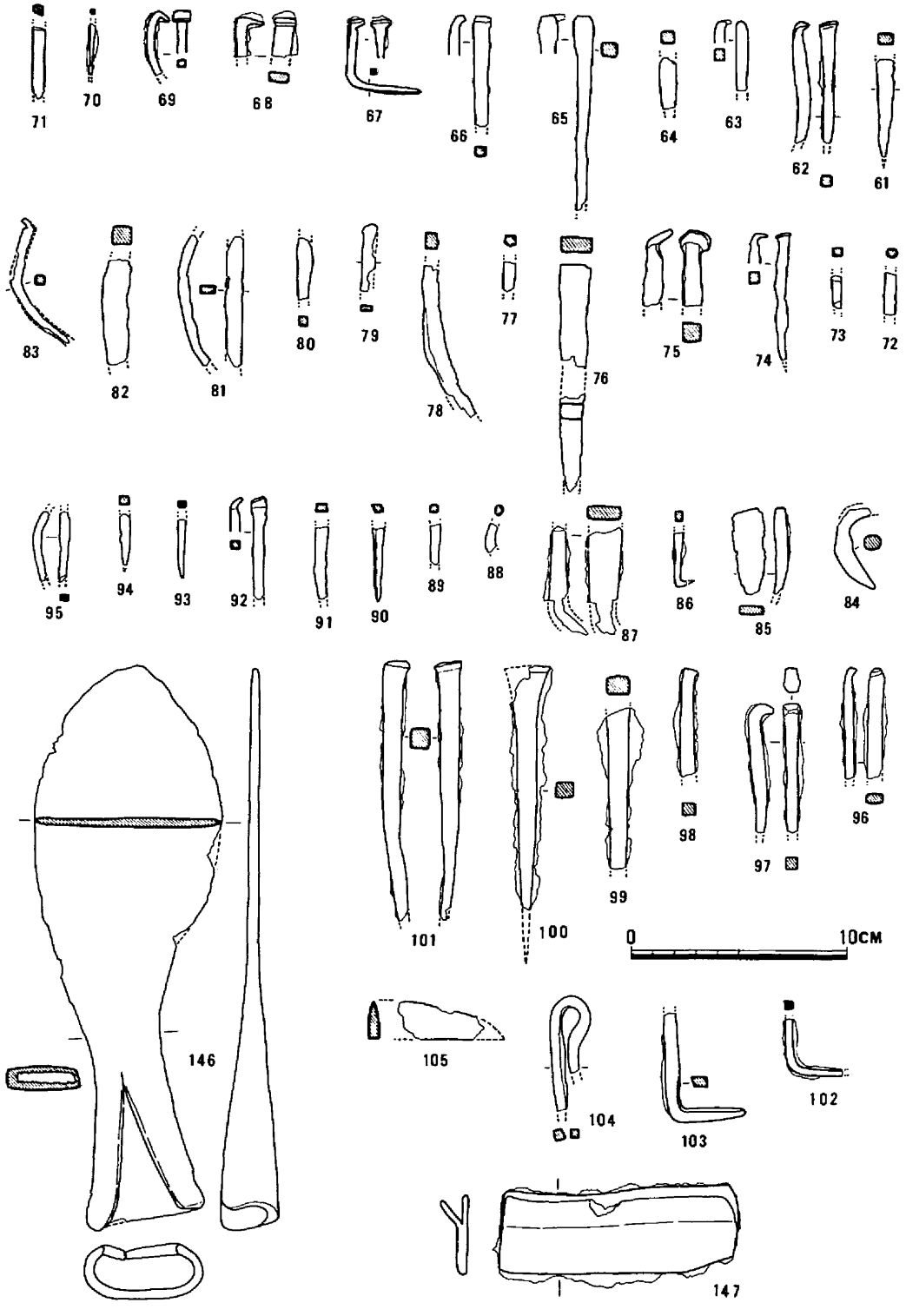
第27図—(1) 相輪（その3） S＝1／3



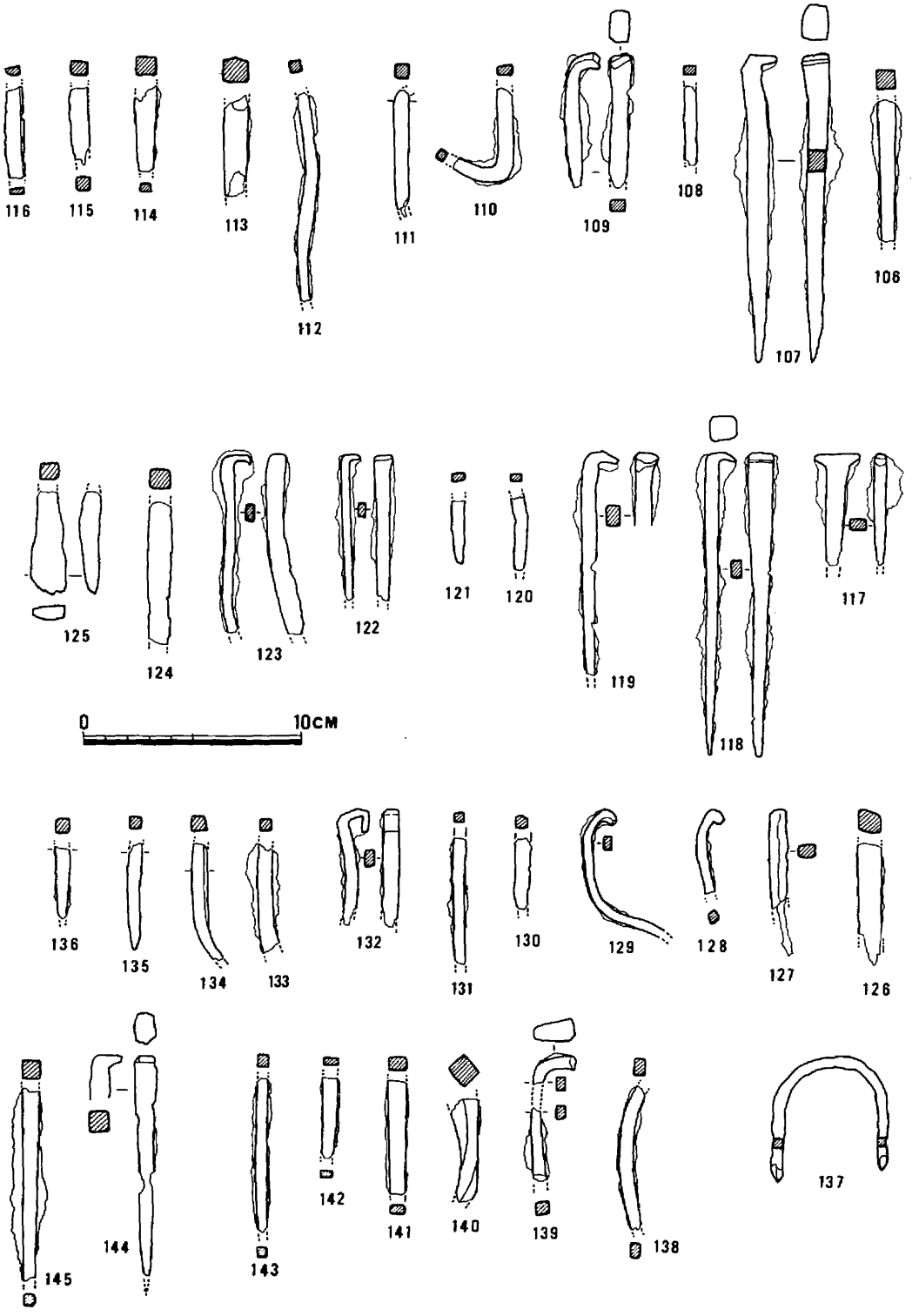
第27図—(2) 相輪出土位置



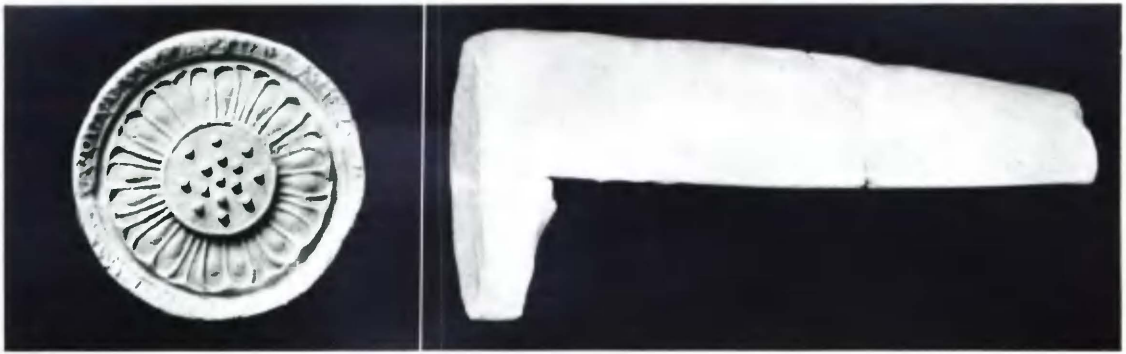
第29図　鉄製品（その１）Ｓ＝１／３



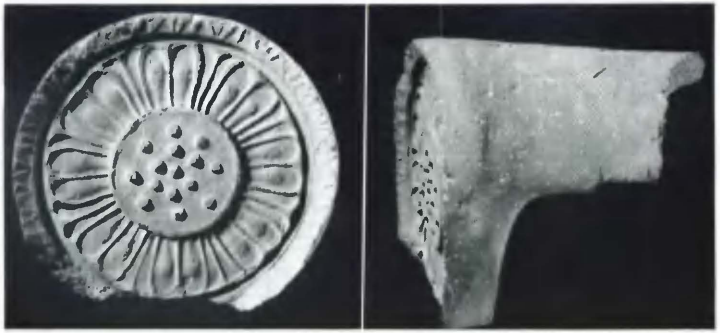
第30図　鉄製品（その2）S＝1／3



第31図 鉄製品（その3） S＝1／3



1．軒丸瓦Ⅰ類



2．軒丸瓦Ⅰ類

3．軒丸瓦Ⅱ類

1．軒丸瓦Ⅲ類

2．軒丸瓦Ⅲ類

3．軒丸瓦Ⅲ類（丸瓦先端部刻み）

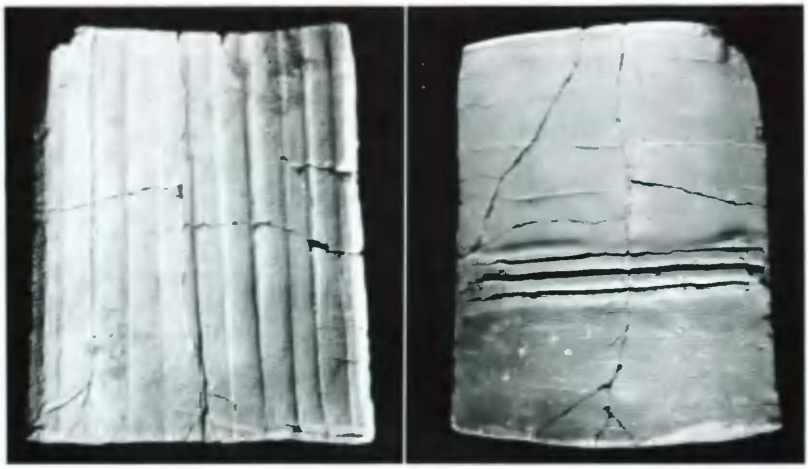
１．軒丸瓦Ⅲ類

２．軒丸瓦Ⅳ類

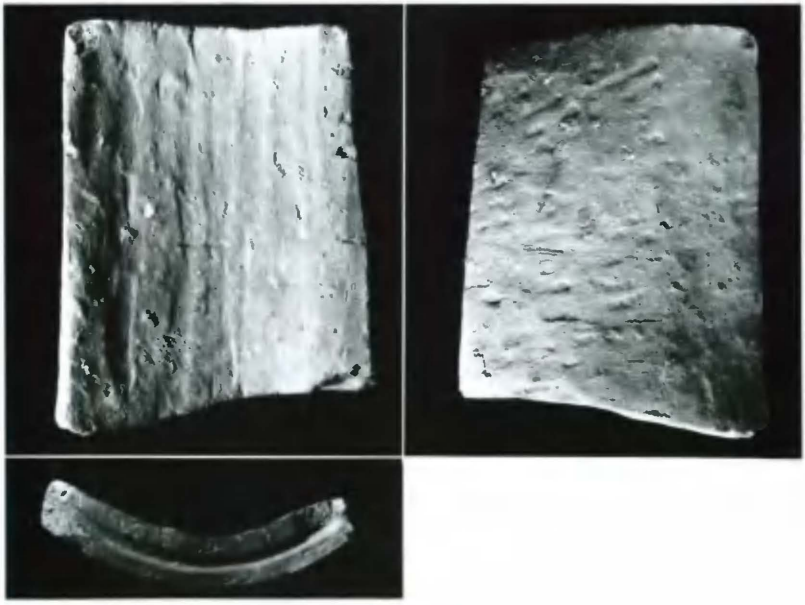
1　2　3

３．塼仏（実大）

図版４



1．軒平瓦Ⅰ類



2．軒平瓦Ⅱ類

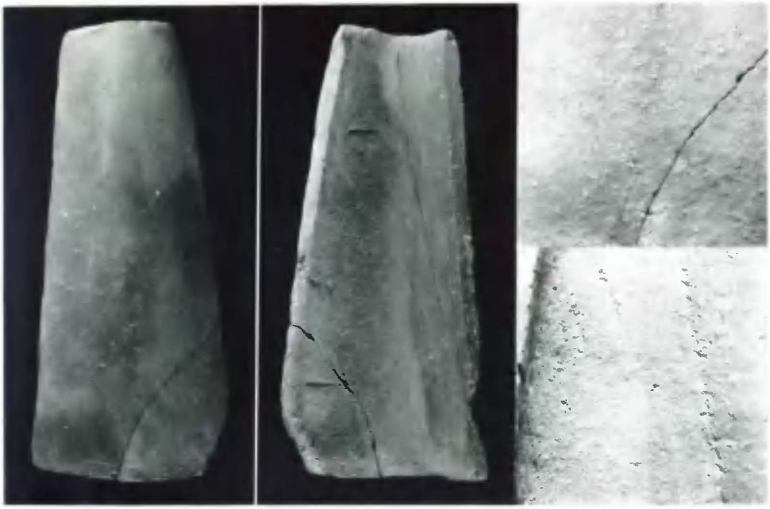
1．軒平瓦Ⅲ類

2．軒平瓦Ⅳ類

図版６

1．軒平瓦Ⅴ類

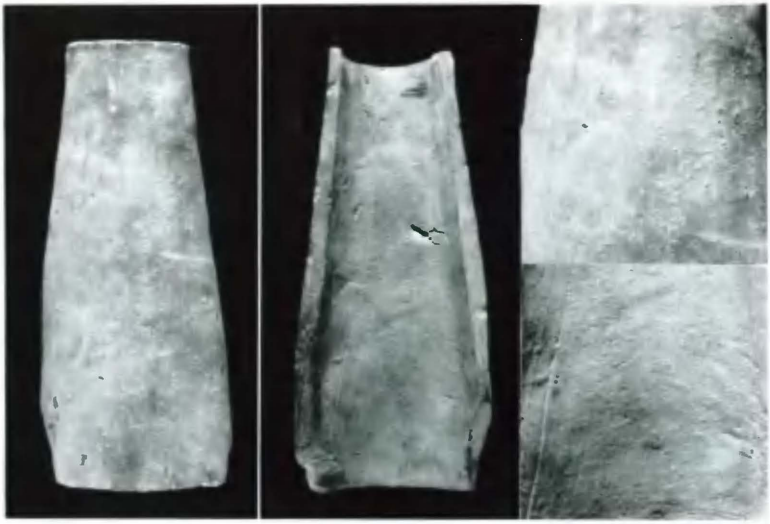
2．軒平瓦Ⅵ類



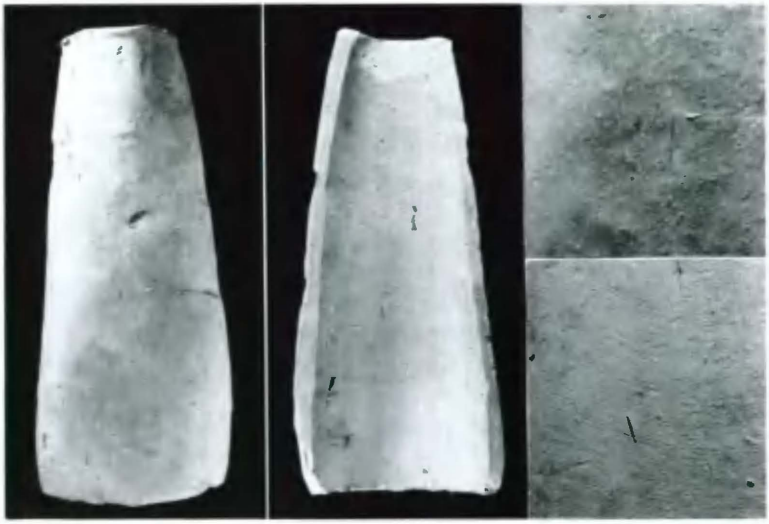
1．丸瓦1

2．丸瓦2

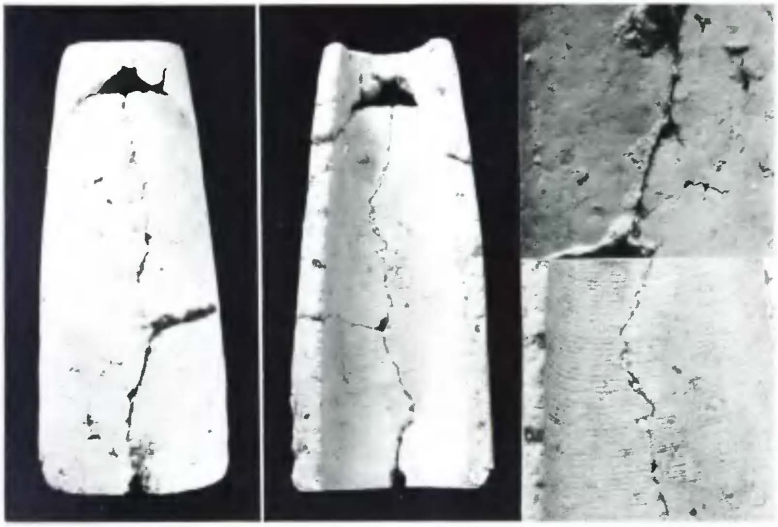
図版８



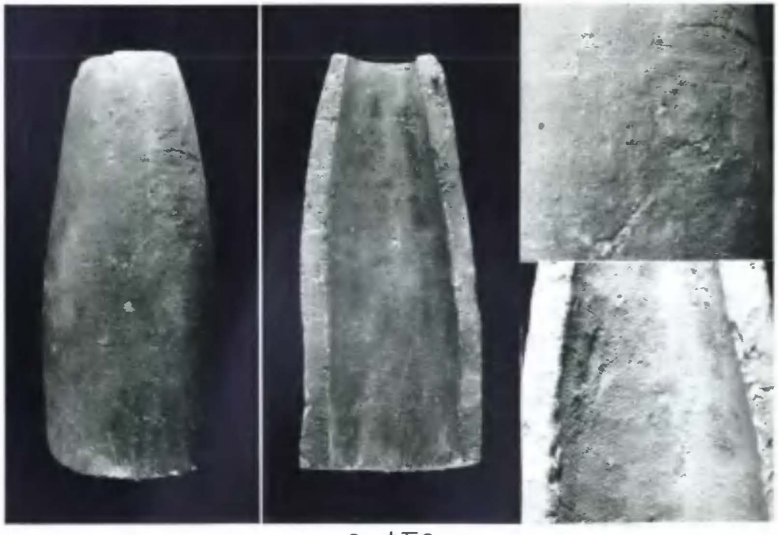
1．丸瓦3



2．丸瓦4

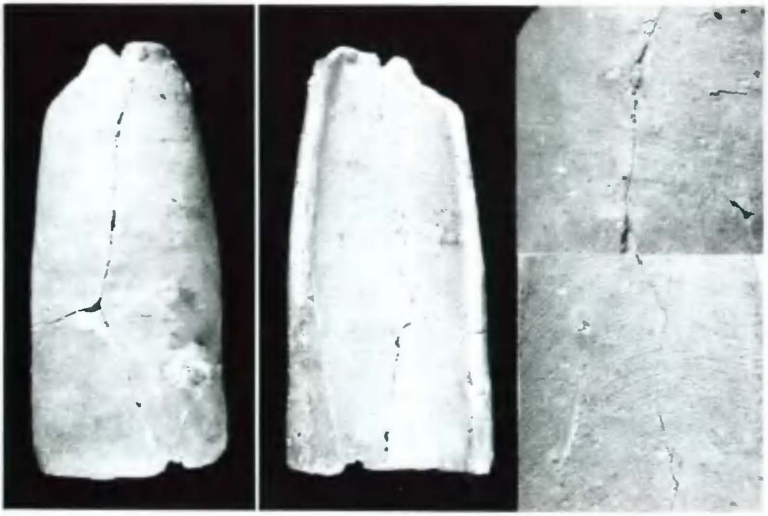


1．丸瓦5

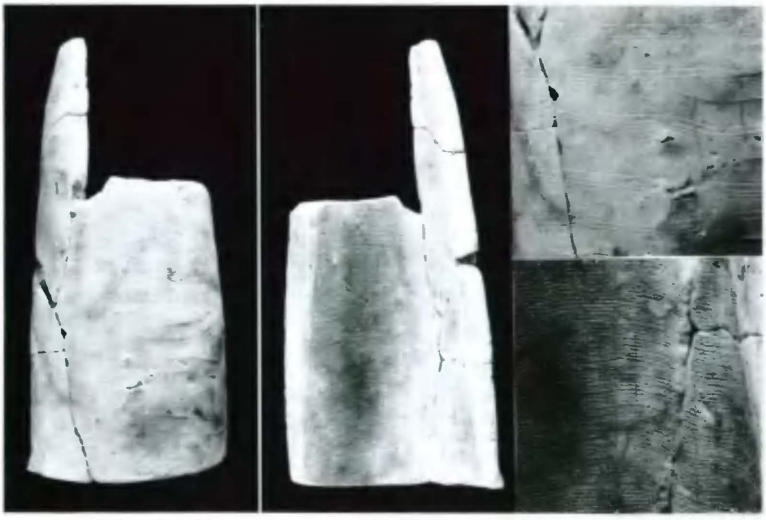


2．丸瓦6

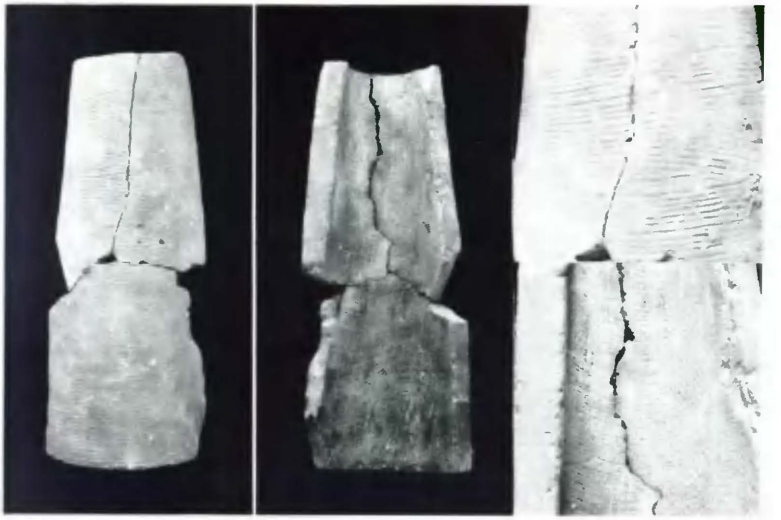
図版10



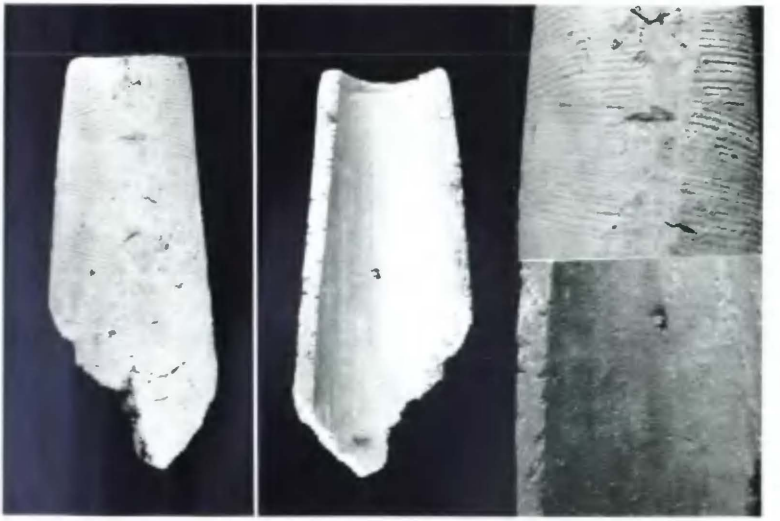
1．丸瓦7



2．丸瓦8

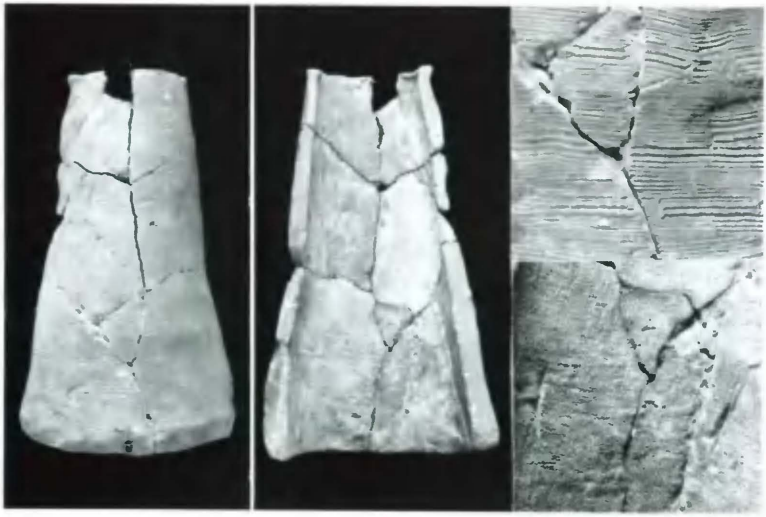


1．丸瓦9

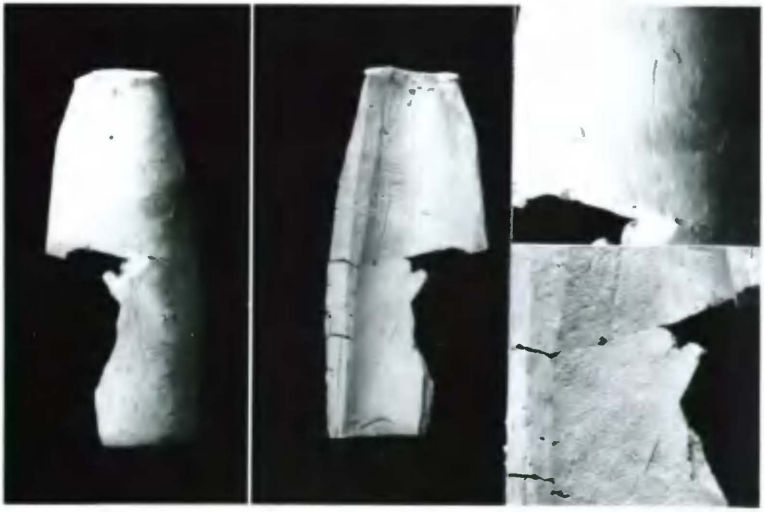


2．丸瓦10

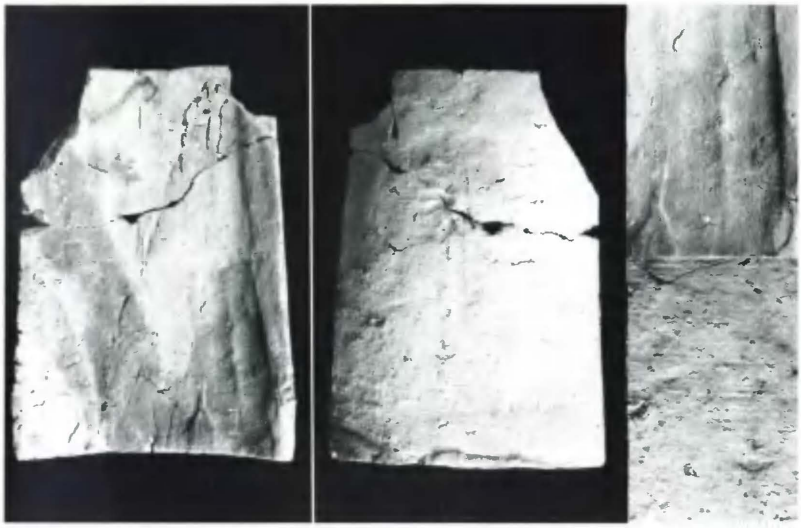
図版12



1．丸瓦11



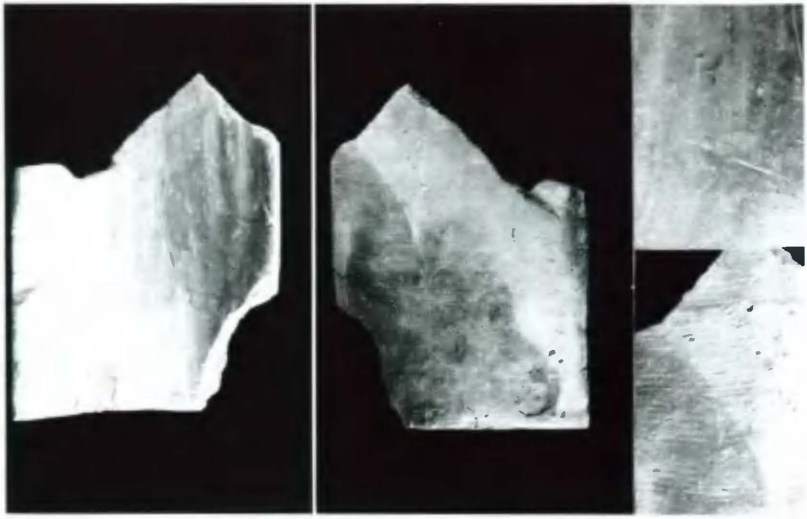
2．丸瓦12



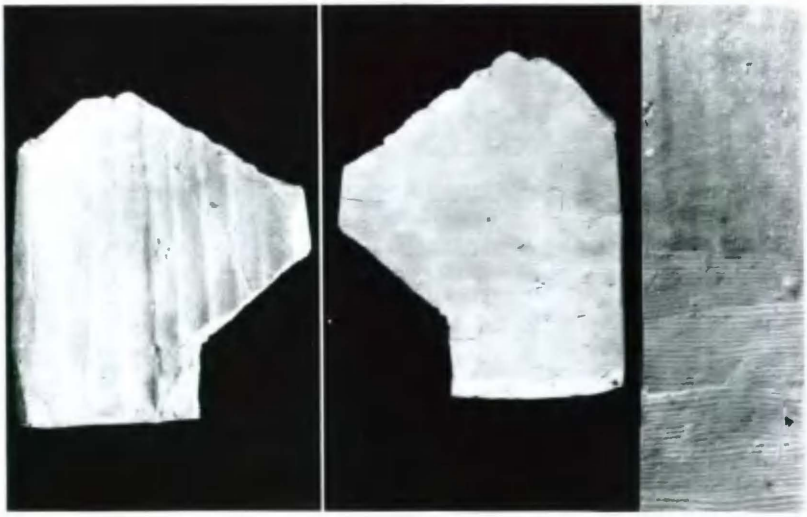
1．平瓦1

2．平瓦2

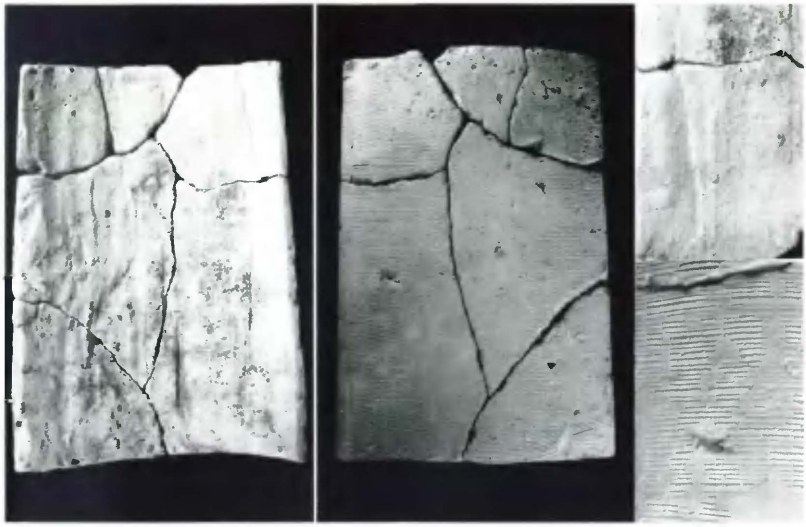
図版14



1．平瓦3



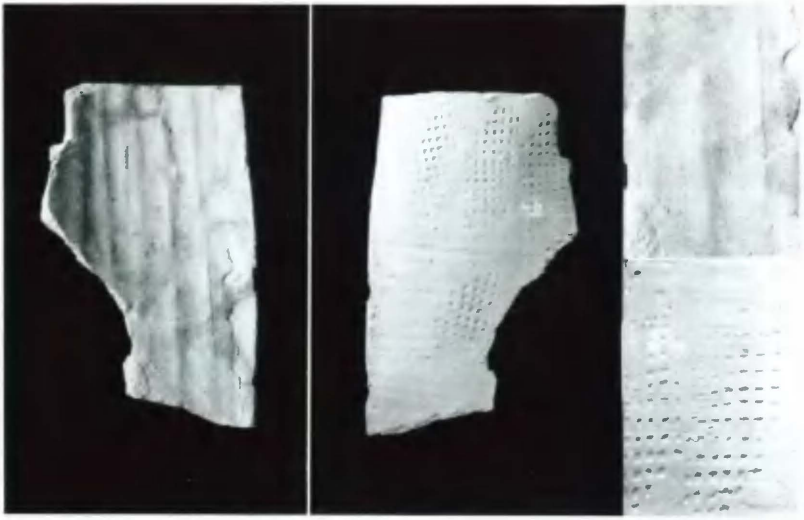
2．平瓦4



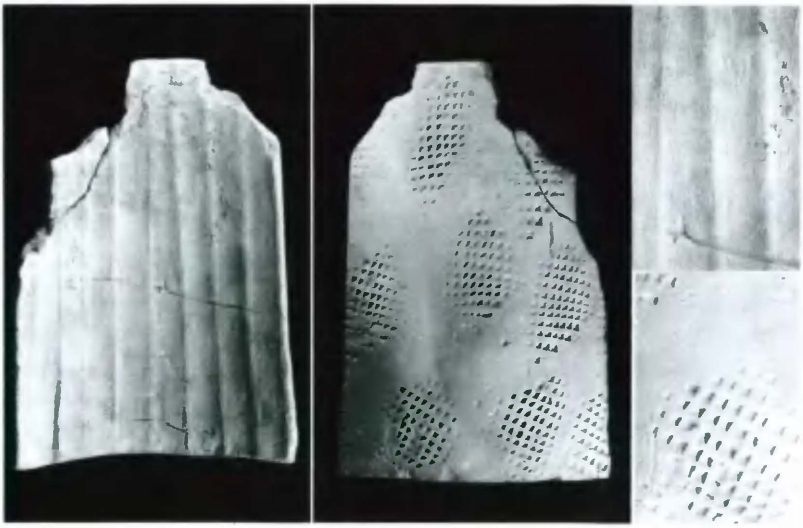
1．平瓦5

2．平瓦6

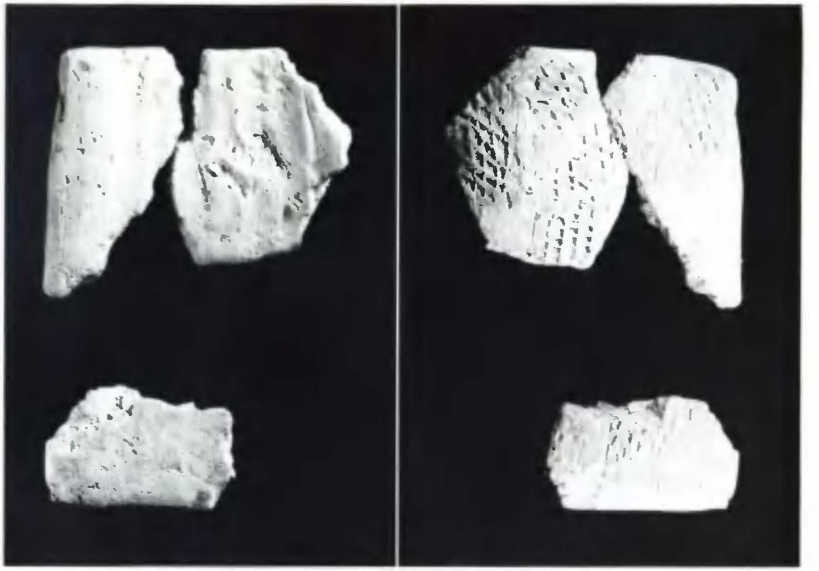
図版16



1．平瓦7

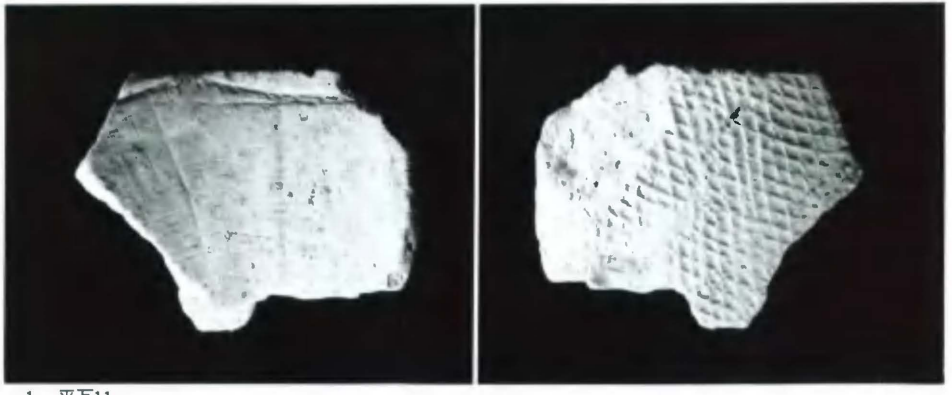


2．平瓦8

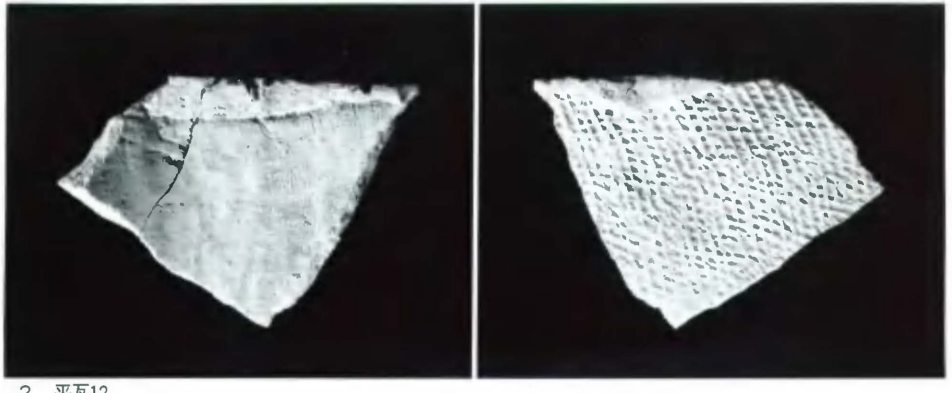


1．平瓦9

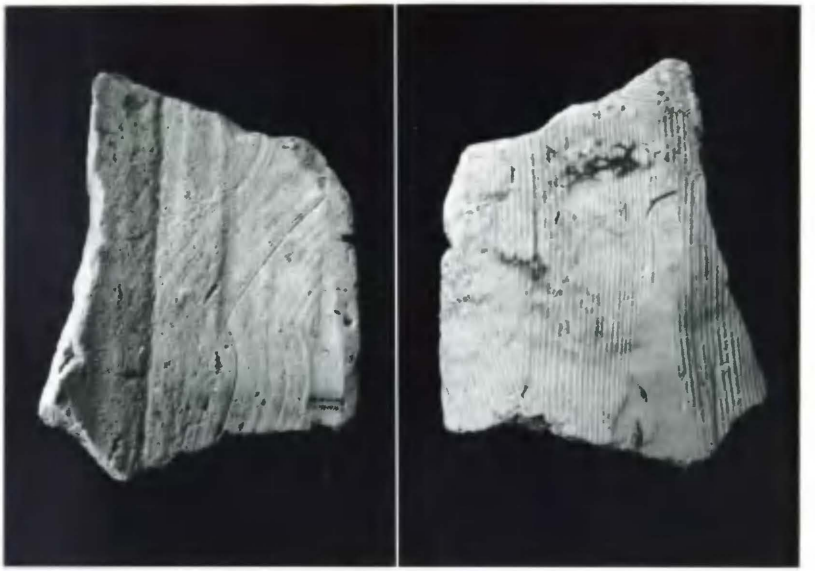
2．平瓦10



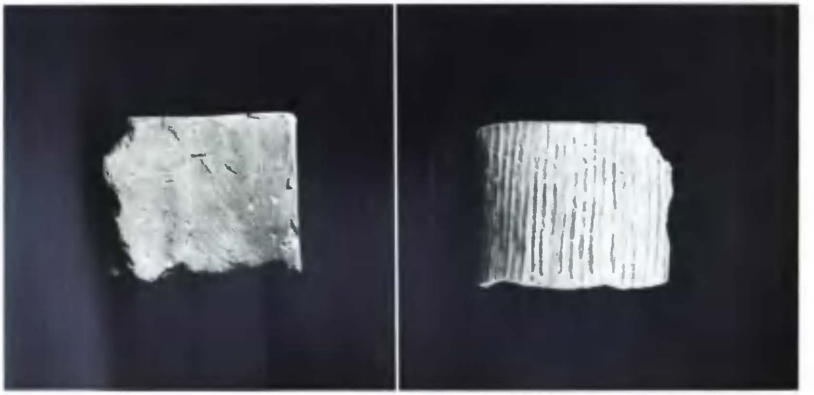
1．平瓦11



2．平瓦12

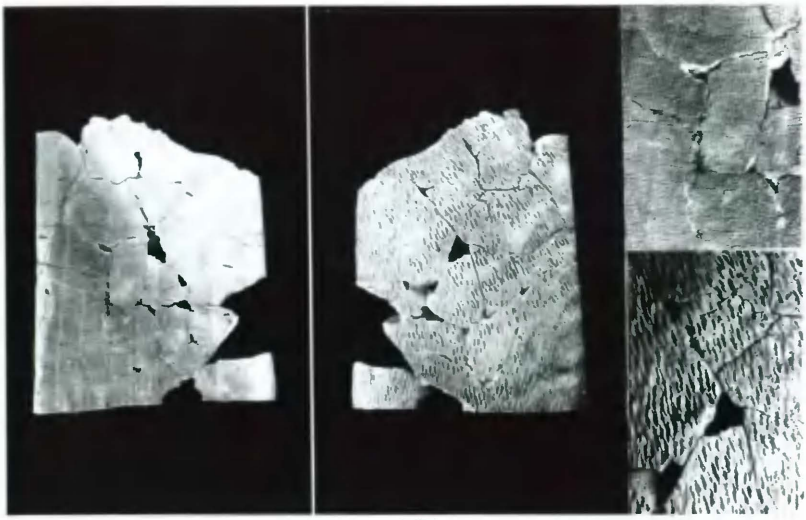


1．平瓦13

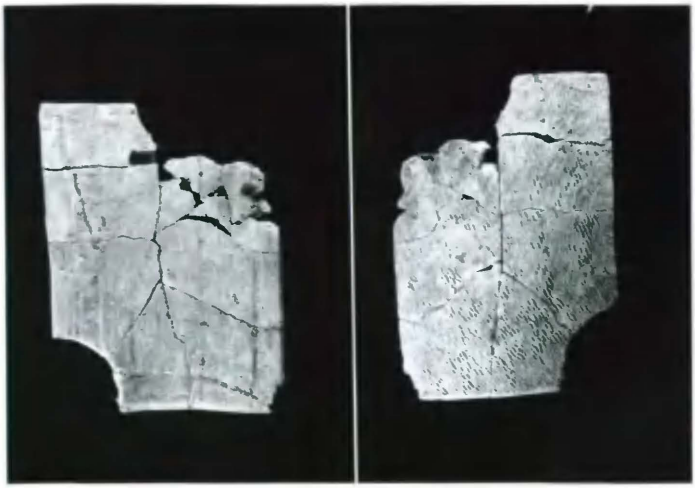


2．平瓦14

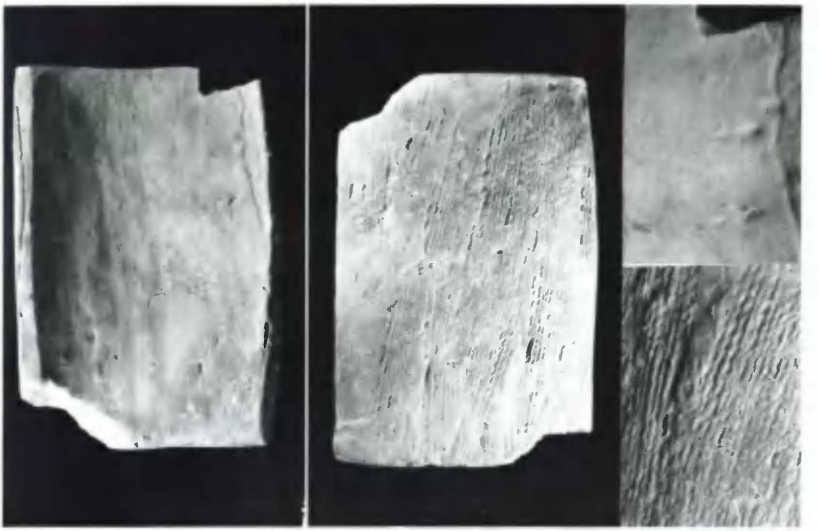
図版20



1．平瓦15



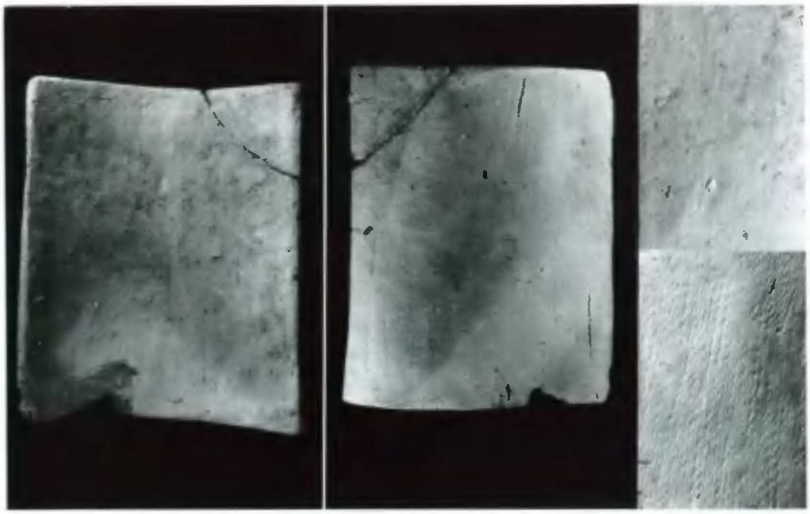
2．平瓦16



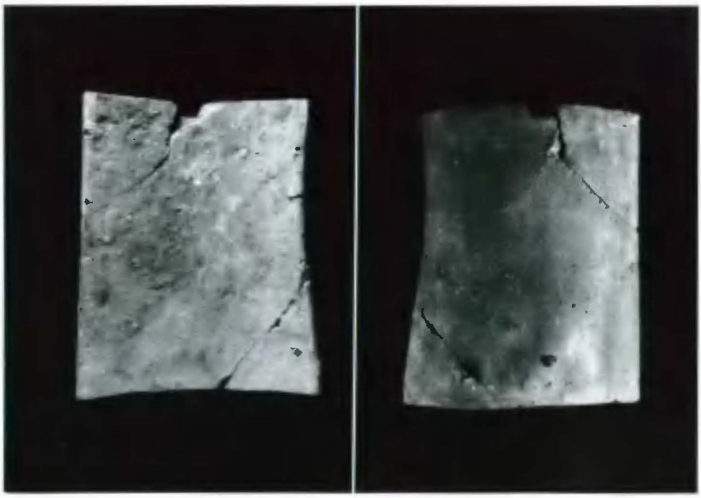
1．平瓦17

2．平瓦18

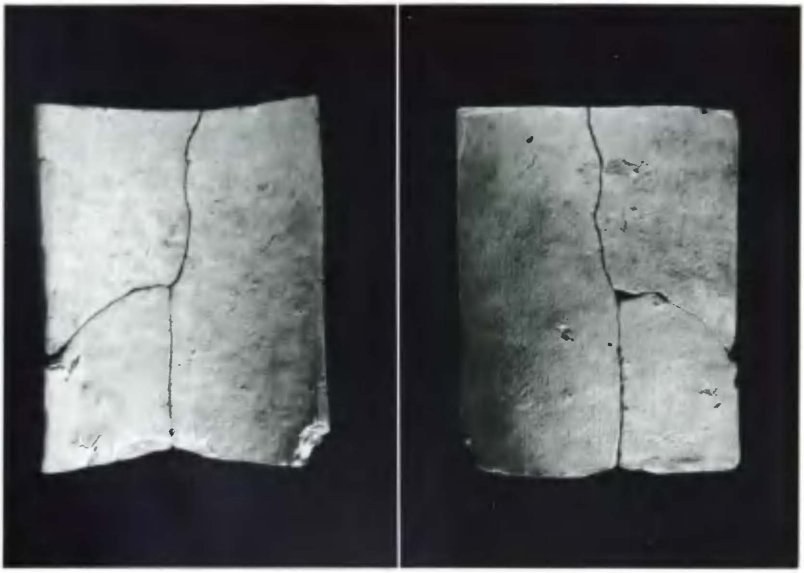
図版22



1．平瓦19



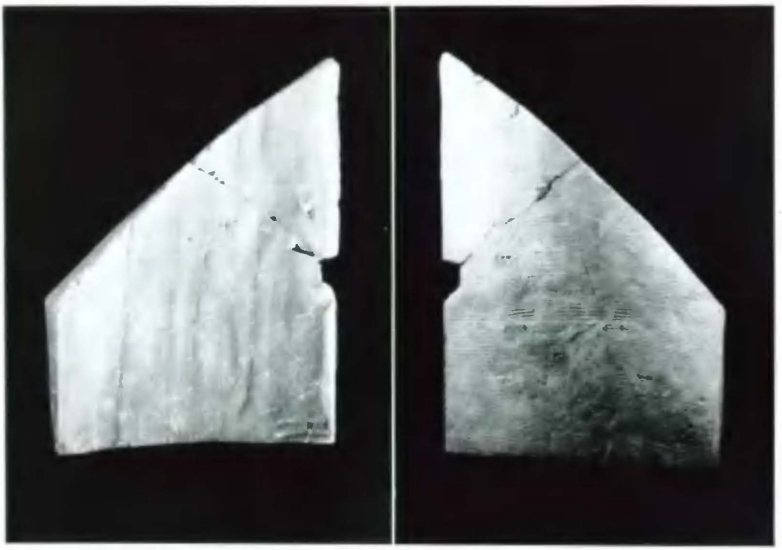
2．平瓦20



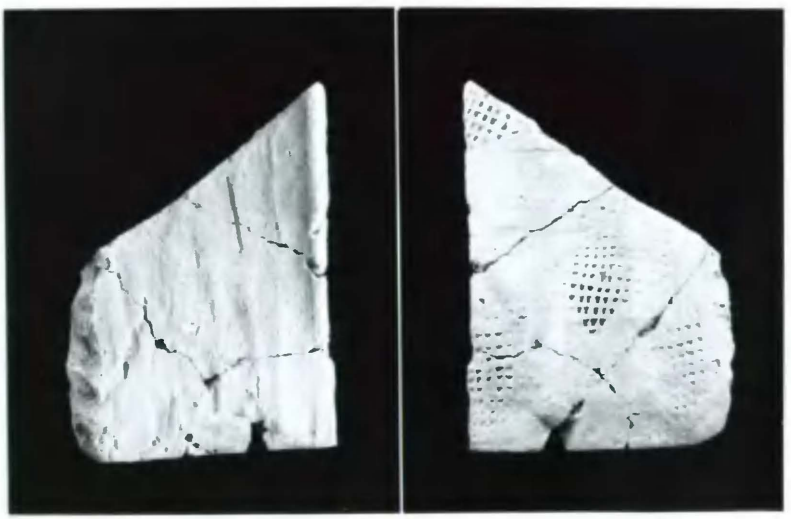
1．平瓦21

2．平瓦22

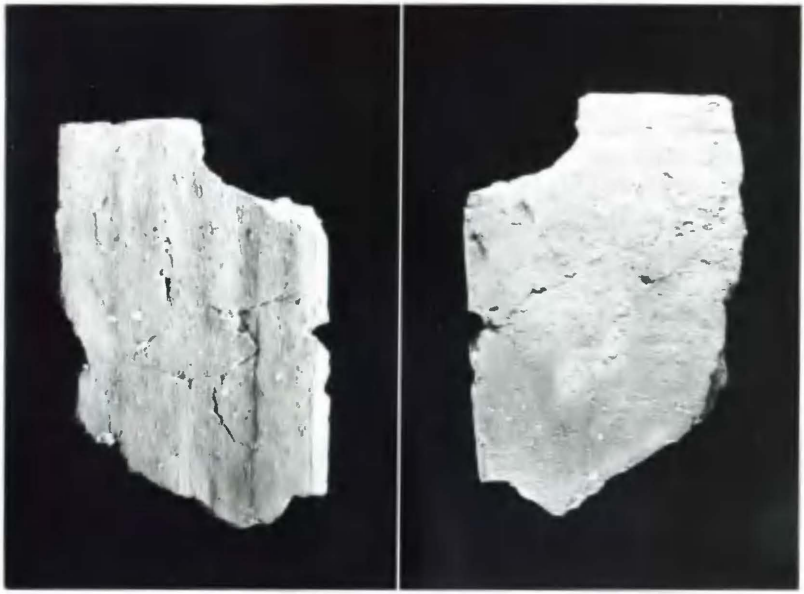
図版24



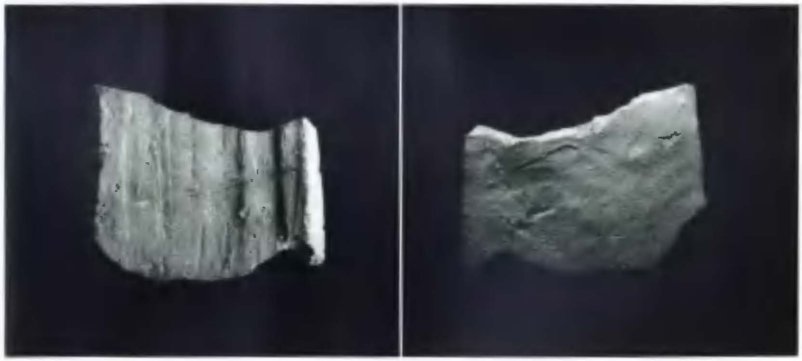
1．隅切瓦1



2．隅切瓦2



1．熨斗瓦1（線刻文あり）



2．熨斗瓦2

図版26

1．文様瓦3

2．文様瓦5　　3．文様瓦4

1．塑造仏如来像螺髪（$\frac{1}{2}$）

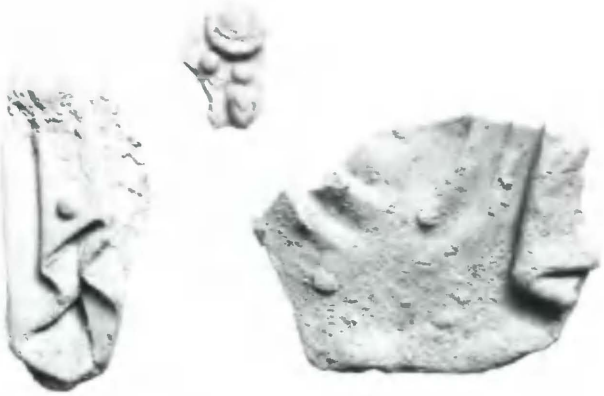
2．塑造仏菩薩像臂釧（$\frac{1}{2}$）

図版28

1．塑造仏菩薩像頭髪（$\frac{1}{2}$）

左下は下からみたもので心棒を通した穴
心棒には縄状のものが巻いてあったらし
く螺旋がついている

2．塑造仏菩薩像顔面（$\frac{1}{2}$）



1．塑造仏菩薩像瓔珞・裳・裙（½）

2．塑造仏菩薩像裳・裙（½）

図版30

1. 塑造仏菩薩像　垂髪（上左）・頭髪・台座の反花（下左二点）（$\frac{1}{2}$）

2. 塑造仏菩薩像　指先（十点）（$\frac{1}{2}$）

3．塑造仏天部の胸か？（$\frac{1}{2}$）

1．4区黒色粘土層出土須恵器（2・1・3）

2．須恵器4坏身

同上(3)内面

3．4区大溝出土須恵器

図版32

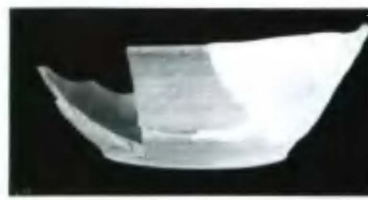
5

7

8

11

12



16

17

18

21

22

円面硯

須恵器（5・7・8・11・16・17・18）土師器（21・22）

1．須恵器　花瓶1・2

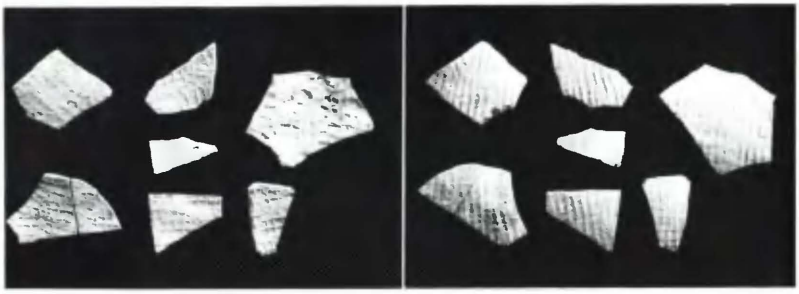
2．須恵器　平瓶5

図版34

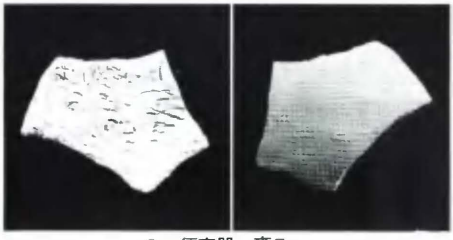
1．須恵器　甕1

2．須恵器　甕

須恵器　甕3



1．須恵器　甕2（左　内面格子目叩き・右　外面）

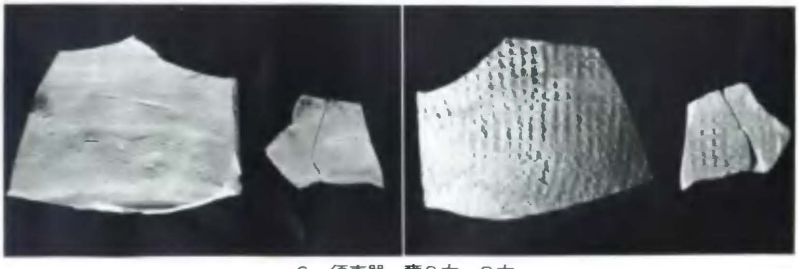


2．須恵器　甕5

3．須恵器　甕6

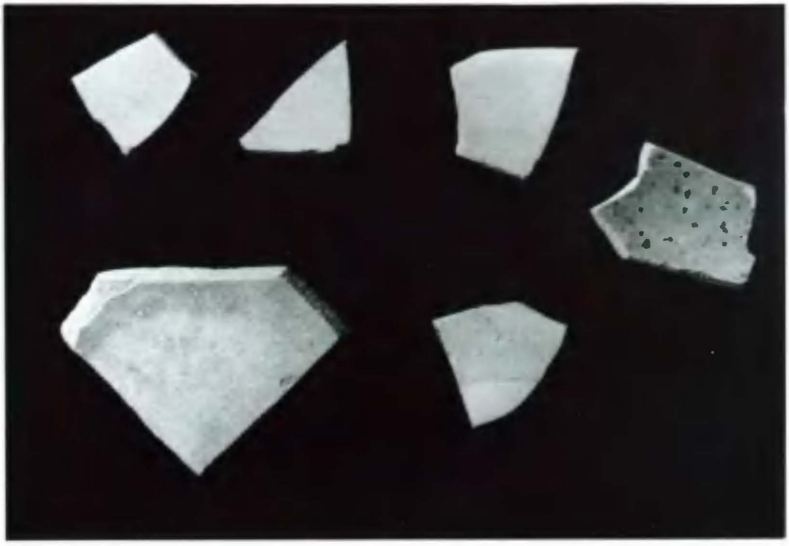
4．須恵器　甕4

5．須恵器　甕7



6．須恵器　甕8右、9左

図版36



1．緑釉陶器　内面

2．同上　外面

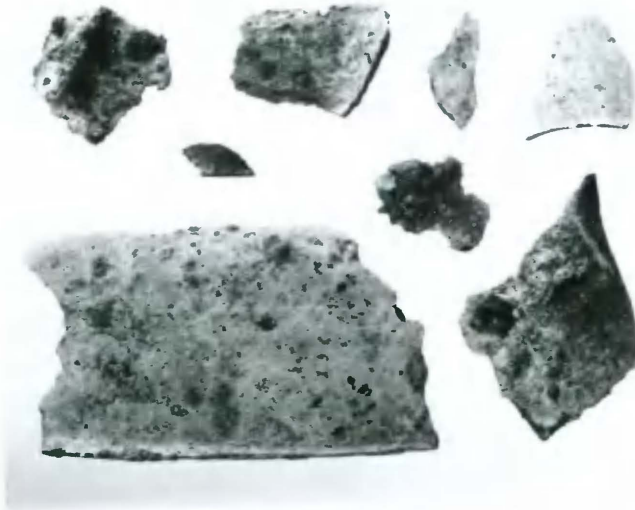
1．中国製陶磁器

和製陶器

（左上は越州窯青磁）

2．備前焼　擂鉢

図版38



相輪

1．釘（½）右下三本は仏像溜り出土

2．鉄製鏃先（½）

4．青銅製金具（½）

3．鉄製矛？½

図版40

1．金箔

2．水晶

3．墨書土器

4．壁土

5．縄文式土器

1．サヌカイト原石・剝片，環状石斧

2．同上裏面

美作国府跡(15)

（補　遺）

例　　言

1．本書は先に岡山県教育委員会より、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査）として刊行された美作国府跡発掘調査報告の補遺の一部である。

2．昭和47年度に行った発掘調査の実施については下記の調査員が担当した。

伊　藤　　晃　（文化課分室）
泉　本　知　秀　（現在大阪府教育委員会勤務）
井　上　　弘　（文化課分室）
池　畑　耕　一　（現在鹿児島県教育委員会勤務）
岡　田　　博　（文化課分室）

3．本書の第1図は津山市都市計画図23（$\frac{1}{3000}$）を用い、縮尺掲載したものである。字名については、津山市役所保管の切図より池畑・岡田が採録したものである。

4．遺構および遺物出土状態の写真は、泉本・岡田の撮影によるものである。遺物写真については、すべて井上が担当した、6×9・4×5サイズの写真を使用した。

5．第3・5図の実測図は、泉本・岡田による1/20・1/50原図を岡田が製図した。

6．遺物の実測図作成は、岡田が担当し、一部伊藤の教示を得、作成したものである。製図は浜本早苗の手をわずらわせた。

7．遺物の整理・実測図作成は発掘調査終了後わずかながら進めてきたが、大半は昭和52年7月～9月にかけて岡山市西古松文化課分室にて、岡田が行なった。その他すべての出土遺物の管理は、昭和51年7月より津山市教育委員会があたっている。

本 文 目 次

本 文

1．緑釉陶器の概要……61

2．緑釉陶器関連土器について……98

表

第1表　緑釉陶器観察一覧表……68

第2表　須恵器・土師器観察一覧表……102

図

第1図　美作国府跡周辺図（$\frac{1}{6000}$）……60

第2図　縦貫道用地内西方調査区遺構配置図（$\frac{1}{400}$）……61—62

第3図　き—d区溝状遺構土層断面図（$\frac{1}{40}$）……63

第4図　き—d区溝状遺構実測図（$\frac{1}{100}$）……63

第5図　緑釉陶器実測図Ⅰ（1/2）……64

第6図　緑釉陶器実測図Ⅱ（1/2）……65

第7図　緑釉陶器実測図Ⅲ（1/2）……66

第8図　緑釉陶器実測図Ⅳ（1/2）……67

第9図　越州窯青磁実測図（1/2）……98

第10図—Ⅰ　緑釉陶器関連土器実測図（1/3）……99

第10図—Ⅱ　緑釉陶器関連須恵器実測図（1/3）……100

図 版

図版1—1　あ—D区溝状遺構＜北から＞

2　緑釉陶器（217）椀出土状態＜北から＞

図版2—1　き—d区溝状遺構＜西から＞

2　き—d区溝状遺構＜東から＞

図版3—1・2　緑釉陶器（1/3）

図版4—1・2　緑釉陶器（1/3）

図版5—1・2　緑釉陶器（1/3）

図版6—1・2　緑釉陶器（1/3）

図版7—1　緑釉陶器（1/3）

2　築地遺構（い—a・b区）＜南西から＞

図版 8　主要緑釉陶器（1/2）

図版 9　主要緑釉陶器（1/2）

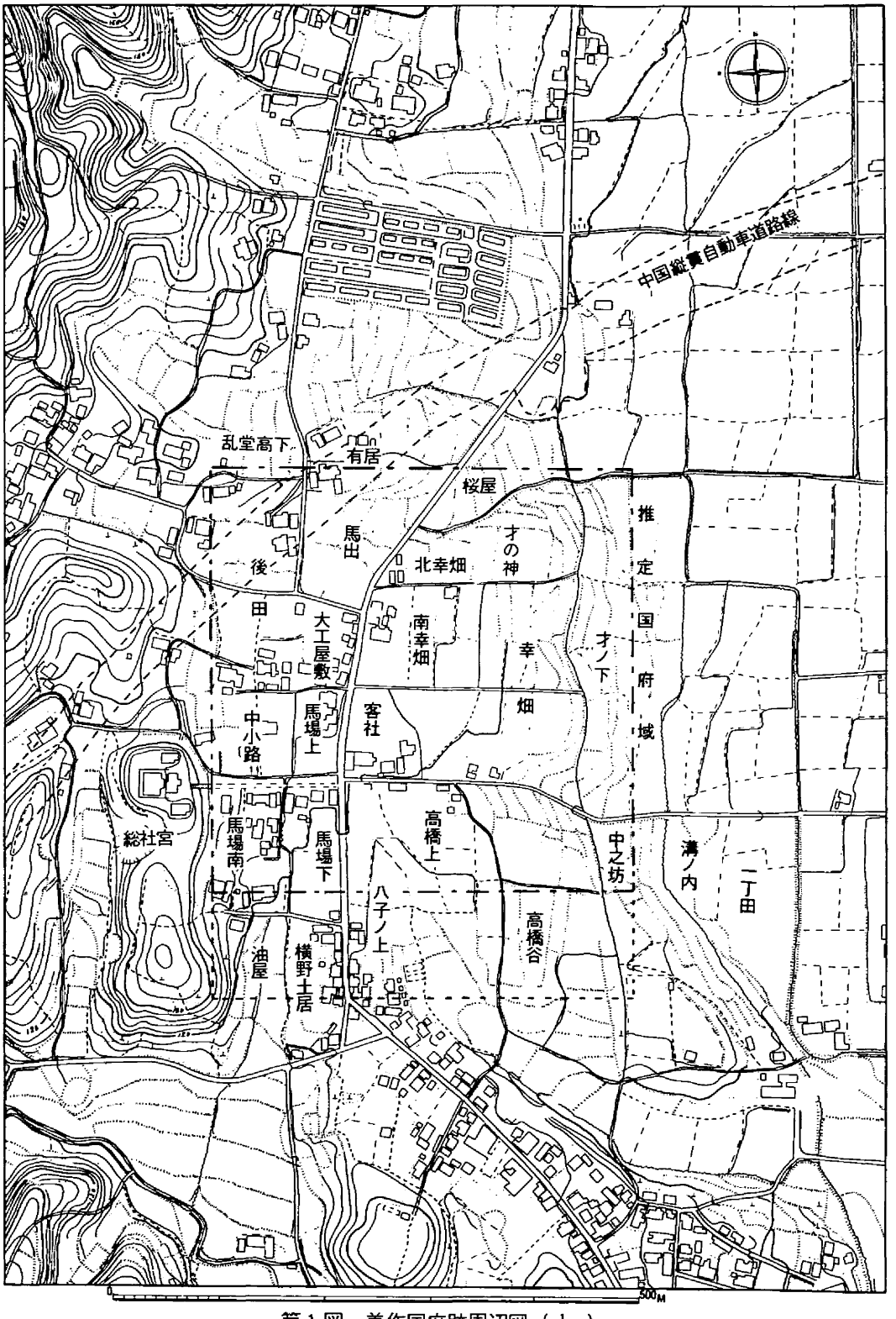
図版10　主要緑釉陶器（1/2）

図版11　主要緑釉陶器（1/2）

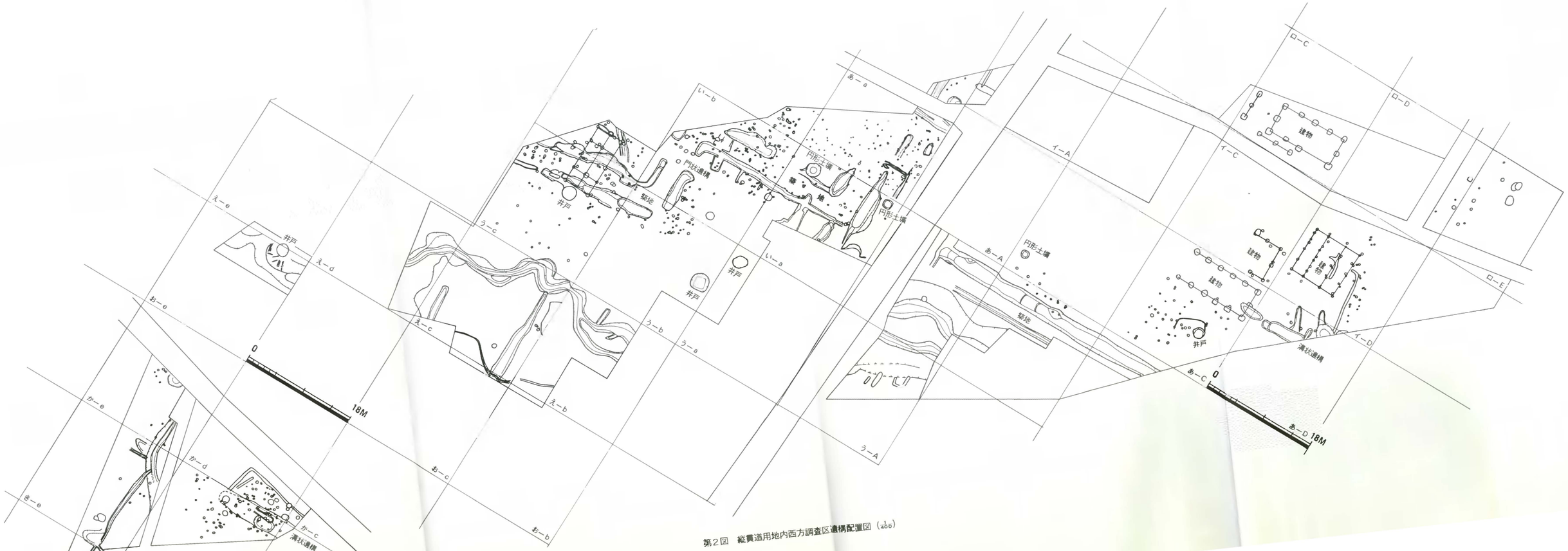
図版12　主要緑釉陶器（1/2）

図版13　完形復元緑釉陶器（1/2・1/3）

図版14　完形復元緑釉陶器（1/2・1/3）・緑釉関連土器（1/3）



第1図　美作国府跡周辺図 ($\frac{1}{6000}$)



第2図　縦貫道用地内西方調査区遺構配置図（$\frac{1}{400}$）

1. 緑釉陶器の概要

美作国府跡の3次にわたる発掘調査の結果によると、ほぼ発掘調査対象となる中国縦貫自動車道路線内約12000㎡のほぼ全面から奈良～鎌倉時代にかけての遺構・遺物が確認されている。更にこの遺跡を「国府跡」という概念に限定しないならば、弥生時代中期中葉から近世にかけての生活遺構・遺物も多く認められている。(註1) 本項で主に述べる緑釉陶器の出土は、他の遺物と同様、発掘区域の全面から出土が認められ、この地域が平安時代における美作国府の国庁域、あるいは国府域の中心部であったことを示唆している。

緑釉陶器の出土点数は、昭和52年9月現在完形復元分も含めて217点にのぼるが、その後数点の増加をみた。しかし、木製整理箱560箱にのぼる、全出土遺物の細部に至る精査を行っていないため、今後の整理が進むにつれ、かなりの増加が期待される。加えて点数は少ないが、灰釉陶器の出土もみられ(註2)、整理が終ればすべての施釉陶器について詳細な報告を行いたいと考えている。本稿では一応の整理を終え217点についての観察一覧表を掲げ、更に正確な計測が可能となった45点の緑釉陶器の実測図(第5～8図)を掲載することが可能となったので美作国府跡調査報告補遺編の一部としたい。

緑釉陶器は主に包含層から他の遺物、たとえば須恵器、土師器などと共に出土したものが多い。発掘調査区の検出遺構の中心を占める築地(東西・南北)遺構・掘立柱建物・井戸・井戸状ピット等からの出土はみられない。確実に緑釉陶器を出土し、時期的に合致する遺構としてはあ—D区の東西溝状遺構・き—d区の東西溝遺構・い—C区のA溝などがある。これらの溝状遺構は、先述の遺構の大半を占める奈良時代の築地溝・井戸等廃絶後の遺構で、遺構そのものの残存状態は、後世の水田耕作や畑作、削平等の影響を受けやすい位置を占めるため、良好とはいえない。むしろ古い奈良時代の築地遺構・井戸などの残存状態の方がすぐれているといえる。しかし、あ—D区溝状遺構・き—d区溝状遺構のいずれも、奈良時代の築地遺構の東西方向に合致し、国府域内の地割・企画が踏襲されていることがわかり、平安時代においても、これらの遺構が存在する部分がなお国府域の中心部を占めていたことも推定される。第3・4図に掲げるき—d区溝状遺構は、ほぼ真北に直行する、検出全長約11.5m、巾3mを測る東西溝で、底部には古い時期に存在したと思われる巾70cm、残存長約4mを測る溝の一部が検出されている。この溝中より第8図—178の緑釉陶器碗が出土しており、溝の廃絶期を示す。また、第10図に掲げる須恵器・土師器の大半はこの溝状遺構の中に埋積していたもので、時期的巾を示しているが、これらについては後述する。この緑釉陶器は、全形を復する数少ない完形品のうちの1点で、胎土は灰白色を呈し内外面共に施釉がみられ、平安時代初期の典型的な緑釉陶器碗と推定される。平城宮における平安初期に比定される緑釉陶器に形状・性状が極めて似る。(註3) 他の出土品の中にも同種の器形を復元推定できる、椀片は多くみられ、切高台あるいは、切高台の中央部を丸く削りとったり、箆の先端で円形の沈線を施すものもみられる。更に、越州青磁碗の底部を明らかに模倣したと思われる、いわゆる蛇の目高台(切高台の一種)を呈する底部片も多々みられ、平安初期に比定される緑釉陶器の多さを物語っている。美作国府における後者の典型的な例は

あ—D区溝状遺構出土の椀である。(217) この溝状遺構はき—d区溝状遺構と同様、ほぼ真北に直行する溝の一部で、残存長11m、巾0.9mを測り、一時期に遺棄されたと思われる多量の土師器皿・椀と共に出土した完形片である。(註4) 高台は中央部の抉りが比較的浅い蛇の目高台を呈し、同一手法による底部片の出土は比較的多い。178と同様、平安初期の典型的な緑釉陶器である。

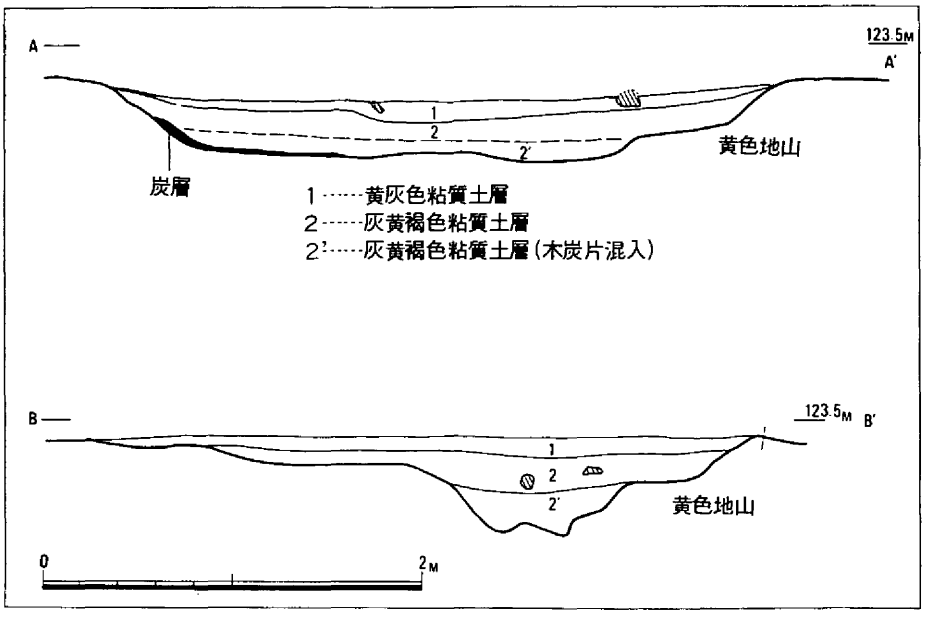
以上、遺構に明確に伴う緑釉陶器椀について概略を述べたが、器種の構成について、若干の説明を加えたい。発掘調査区内出土の緑釉陶器の中でもっとも多いのはやはり椀・皿である。いずれも須恵質(硬陶)・土師質(軟陶)の2種が混在する。多くの破片の中には椀・皿のいずれの破片とも断定しかねるものも多く、判別可能な破片のおおよその比率は5:2である。他に把手付瓶の破片と推定される、把手(46)・体部片(180)や、壷の破片(151)などもみられる。把手片は型押しによる菱形の文様が観察され、遺跡史唯一の破片である。また、碗・皿などの内面にみられる、陰刻文様は130にのみ認められるが、きわめて簡略化された稚拙な筆致である。

施釉技法については従来より指摘されている二度焼技法によって焼成されたと思われるものが大半を占める。しかし素地の焼成はまちまちで、1個体でも部位によって「焼きむら」がある。それによって釉の発色も異なる場合が非常に多い。施釉方法については167のように筆状の刷毛を用いて釉薬を用いたのではないかと考えられるものもみられる。施釉の範囲については外底部をのぞいて内外面全面に施釉されたもの、全面に施釉されたものの2種に大別できる。また、壷の破片と思われる151などには、むろん内面には施釉は認められない。

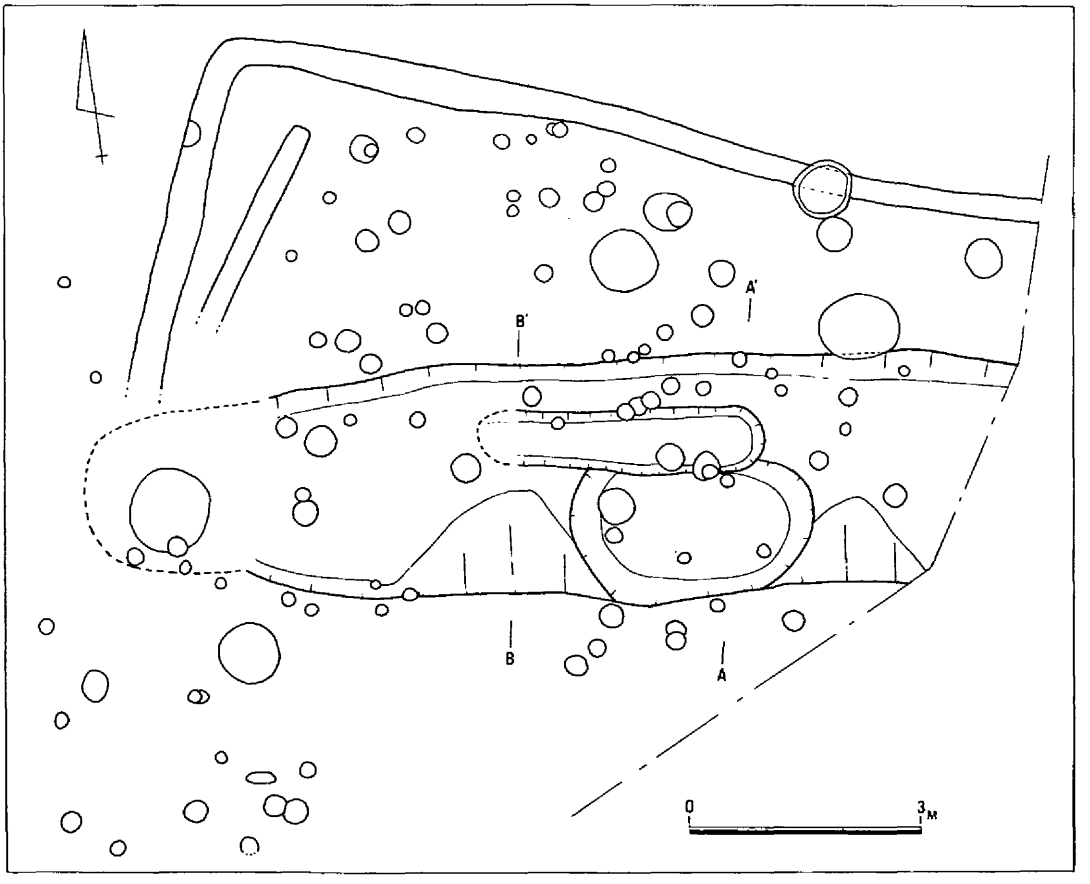
底部の技法についてはA、切高台　B、切高台の中央部を円形に抉りとったもの　C、切高台の中央よりに円形沈線を簡単に篦先によって施されたもの　D、一見貼付高台にみえる帯状高台を有するものでも削り出シ高台とされるもの　E、いわゆる帯状高台を貼付け、須恵器杯の高台貼付けを踏襲するもの　F、回転糸切底であるもの　G、回転糸切された平坦な底部に巾広かつ扁平な高台を貼付けたものの7種類が存在する。大きく、切高台・削り出シ高台を存する底部と回転糸切底のものの2種に大別できる。

色調については、硬陶では48・126～128などのような濃緑色を呈するもの、28のように灰緑色を呈するものが多く、軟陶の黄緑色・鮮緑色を呈するものに分類できるが、各々微妙に色調が異っている。素地胎土が明るさを決め、釉薬そのものの違いは微妙な化学成分の違いはあっても極端な発色を示さないのではないかと推定される。中には灰釉陶・緑釉陶いずれとも断定しがたい破片も存在し、二度焼成の具体的な化学変化、——釉薬塗布後の焼成温度の高低——によって釉面の状態はかなり異なるようである。更に、土中埋没後の状態によって釉面の微妙な変化が存在するとも考えられ、観察表に記す「貫入」についても、焼成時の際生じたものとは断定できない要素も考慮にいれなければならないであろう。

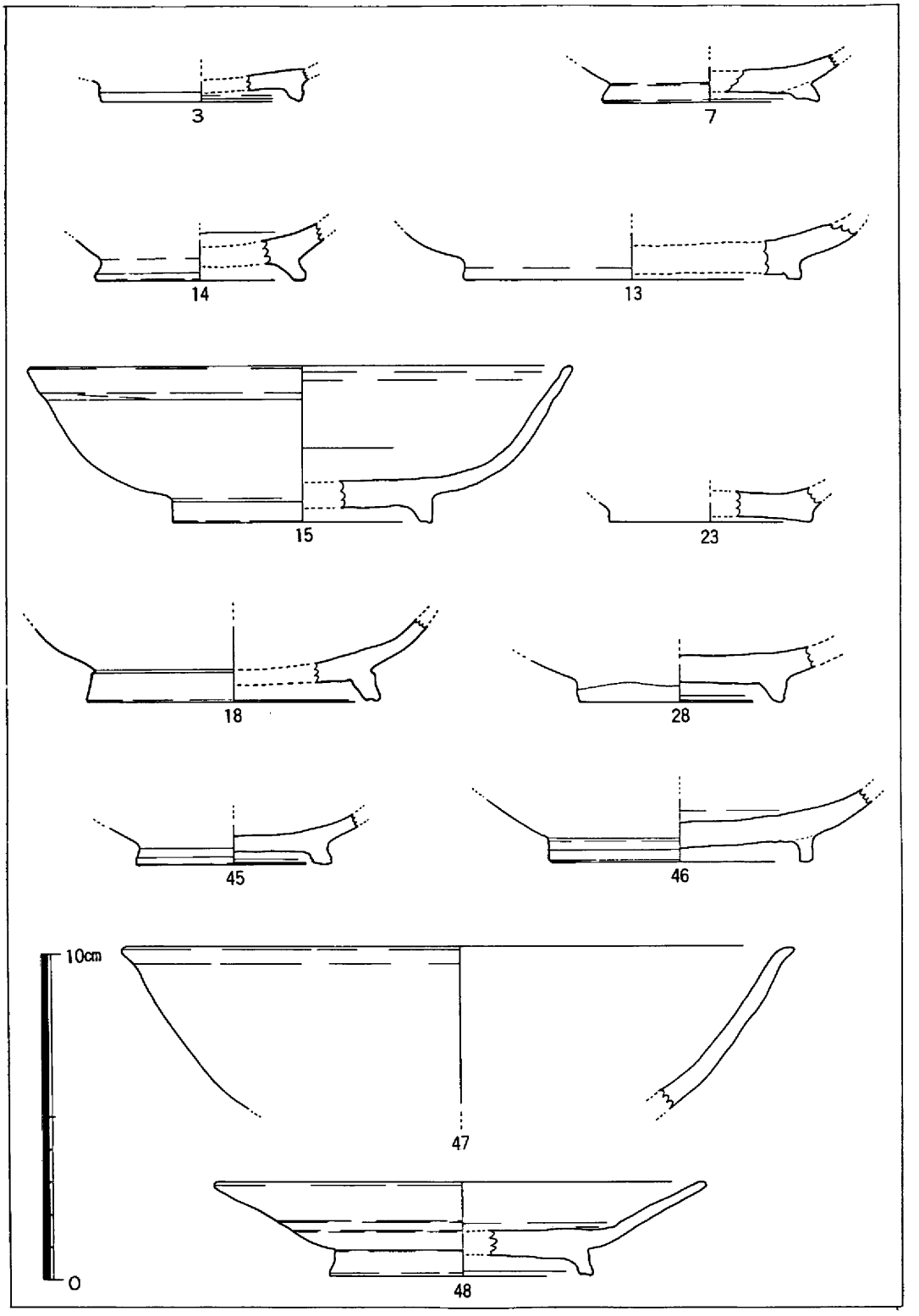
美作国府出土の緑釉陶器の年代的巾については、上限を他の共伴遺物から推察しても平安初期と設定することができるが、下限については、緑釉陶器そのものの即物的年代比定が困難であり、灰釉陶器の整理とあわせて今後の研究課題としたい。



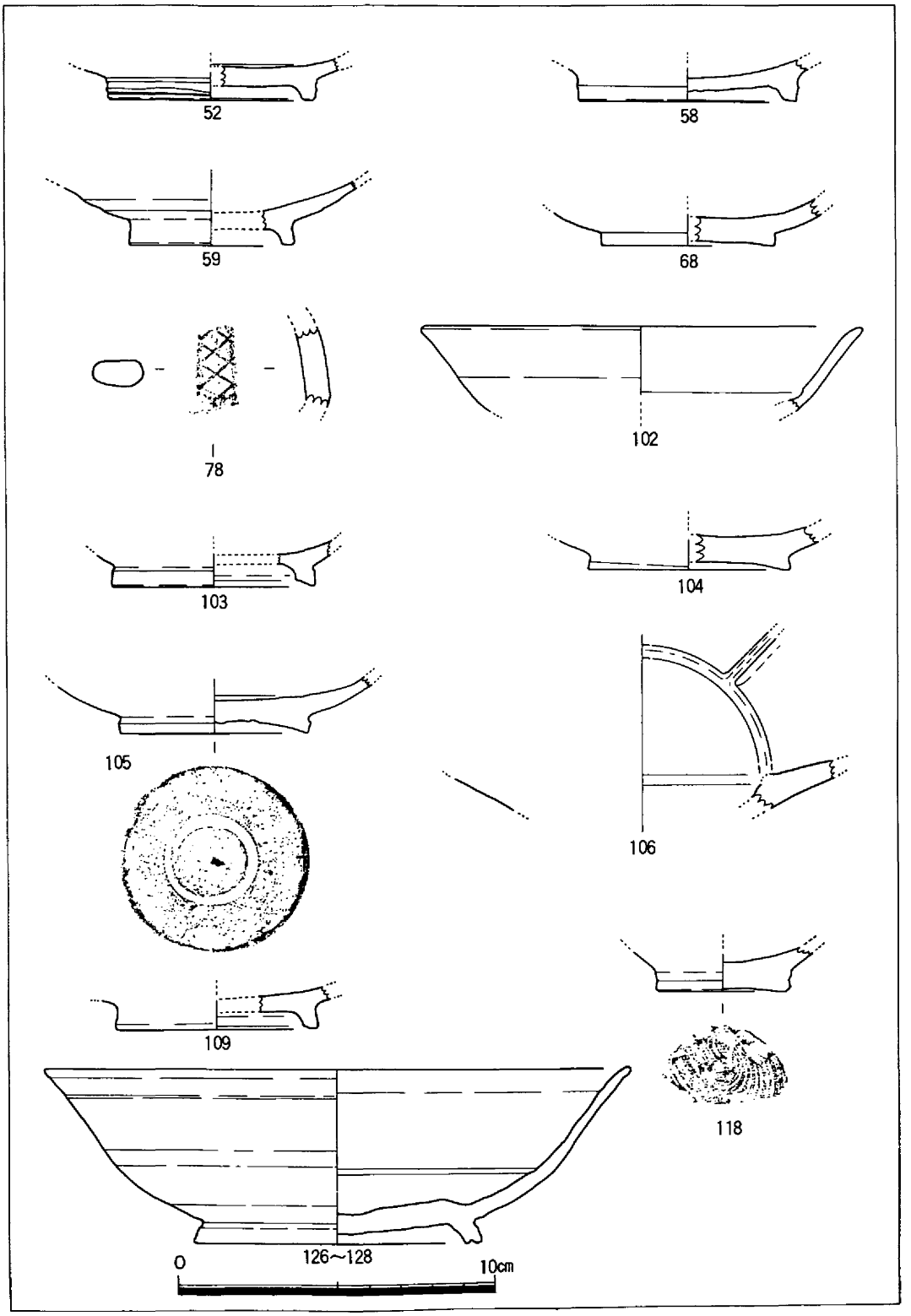
第3図　き－d区溝状遺構土層断面図（$\frac{1}{40}$）



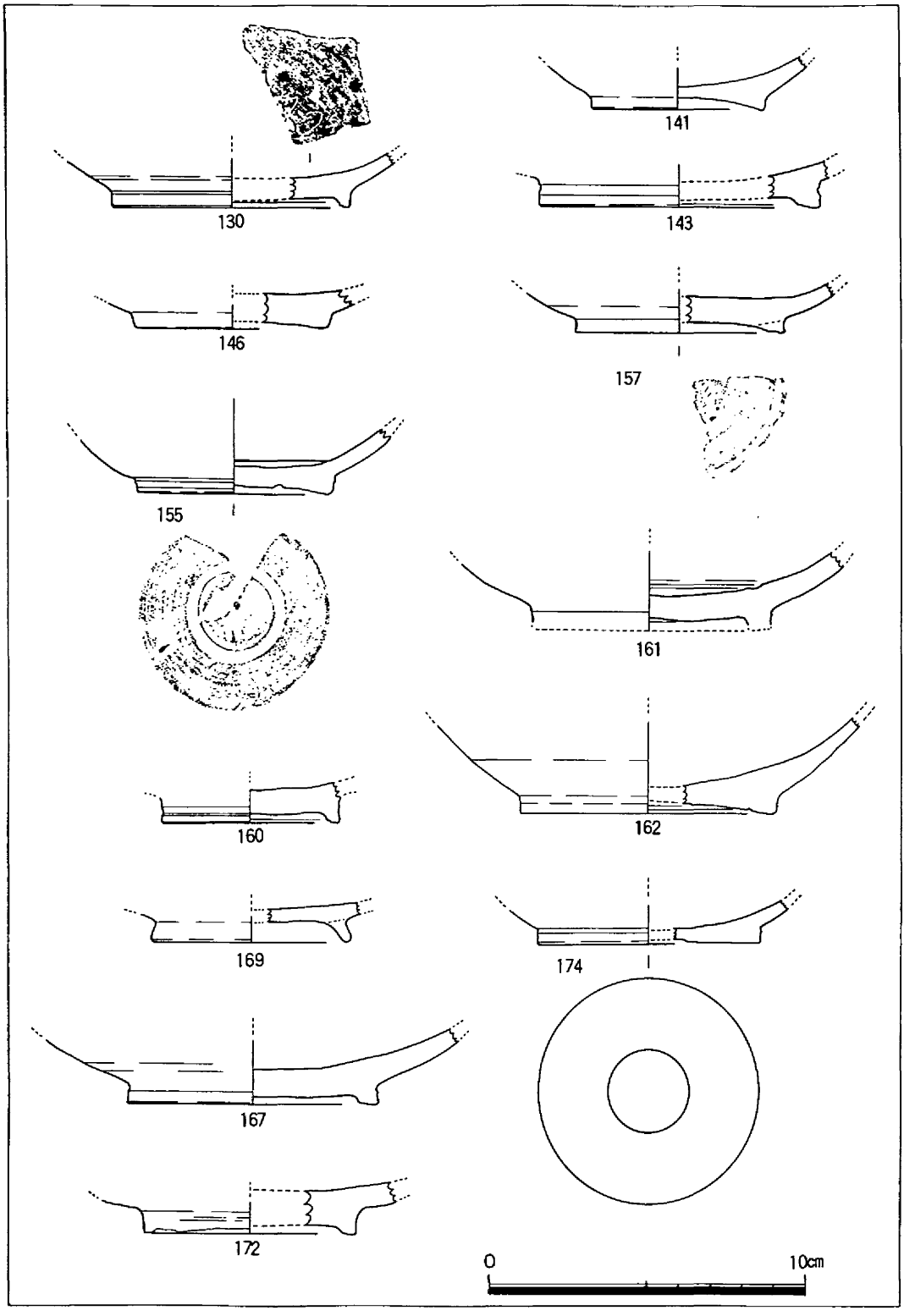
第4図　き－d区溝状遺構実測図（$\frac{1}{100}$）



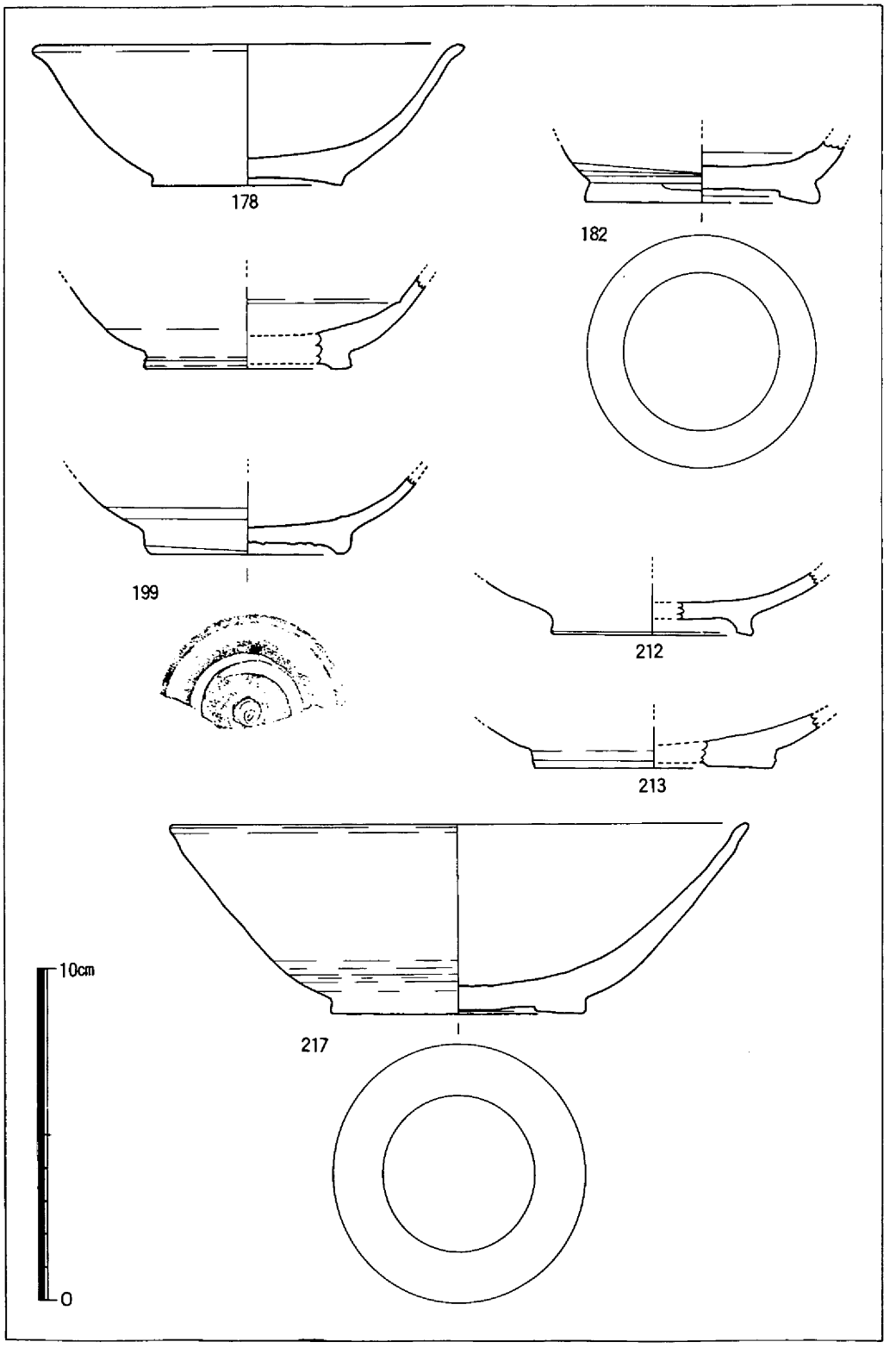
第５図　緑釉陶器実測図Ⅰ（$\frac{1}{2}$）



第6図　緑釉陶器実測図Ⅱ（$\frac{1}{2}$）



第7図　緑釉陶器実測図Ⅲ（$\frac{1}{2}$）



第8図　緑釉陶器実測図Ⅳ（$\frac{1}{2}$）

緑釉陶器観察一覧表

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
1	あ—a—2	包含層	皿か	濃緑色	須恵質	底部片	高台は貼付、釉は全面にあり、胎土精良、釉面は貫入あり。
2	あ—a—3	ピット1	椀	淡緑色	土師質	体部片	椀体部片、胎土は白土タイプの精良土を用いる、石英、長石微砂を含む、釉面はやや剝落するが光沢あり。
3	あ—a—9	包含層	皿か	淡黄緑色	須恵質	底部片	高台はていねいな削り出し、胎土は白っぽい灰色を呈す、微、粗砂を含まぬ精良土を用いる、施釉は高台部内面に至らず。釉面はやや磨滅するがわずかに光沢を放つ、細かな貫入あり。
4	あ—a—9	包含層	椀	淡黄緑色	須恵質	底部片(糸切底)	内外面共に施釉、素地は須恵質生焼け様、灰褐色～赤味を帯びた膚色を呈す、胎土精良、微砂含まず。
5	あ—A—9	包含層上層	皿か	内面 黄緑色 外面 明緑色	須恵質 暗青色	底部片(篦削リ)	胎土は石英・長石微砂を含む、内面釉はやや剝落、外面は光沢を放つ、貫入あり、底部厚3㎜、高台は残存せず、貼付高台か？。
6	あ—b—8	包含層	椀か	黄緑色 ～ 緑色	軟須恵質	底部片(削リ出し)	高台は回転削リ出し高台で蛇の目状をなすが、釉の大半は剝落、素地は淡灰青色～膚色を呈し、硬質ではない、微砂をわずかに含む。
7	あ—b—8	包含層	椀	鮮緑色	土師質	底部片(貼付高台)	釉は鮮明緑色を呈す、二彩風の鮮かな色合、やや剝落しているが残存部は貫入あり、高台は底部切り放し後貼付けられ後ヨコナデ調整で仕上げる、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土、緻密、焼成ふつう。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
8	あ—B—8	盛土	椀	淡黄緑色	土師質	底部片	胎土は赤味を帯びた明るい肌色を呈す、精良土、釉は剝落が目立つが全面に認められる、釉は光沢あり、高台は削り出し。
9	あ—C—1・4	客土層	椀	淡黄緑色	硬土師質	体部片	胎土は灰褐色を呈す、石英・長石微砂を含み、灰褐色～くすんだ肌色を呈す、外面は釉がかなり剝落。
10	あ—C—8	黒褐色土層	椀	黄緑色	須恵質	体部片	釉面は貫入あり、黄緑色～緑色のムラがある、外面は剝落がみられる、素地胎土は精良土を用い、断面灰青色を呈し焼成良好、内外面共に施釉。
11	あ—C—9	包含層	皿か	淡緑色	須恵質灰青色	口縁部片	素地胎土は微・粗砂を含まず精良、釉は光沢あり。
12	あ—C区攪乱層	包含層	椀	淡黄緑色	須恵質灰青色	底部片内面ナデ3～5㎜前後の厚さ	素地胎土は微・粗砂を含まず精良土、焼成良好、内面は比較的なめらかな仕上げ、釉はかなり剝落している。
13	あ—C区攪乱層	包含層	椀	淡緑色～暗緑色	須恵質	底部片	高台は削り出し高台、施釉は全面に認められる、釉は磨滅、素地胎土は須恵質で、石英・長石微砂を比較的多く含む。全面に貫入細かくあり、焼成良好。
14	あ—C区攪乱層	包含層	椀	白っぽい淡緑色	須恵質	底部片	素地胎土は須恵質で、断面淡灰青色、底部外面の釉のない部分は白っぽい、高台は削り出し、わずかな石英・長石を含む精良土を用いる、焼成普通。 内面釉は光沢なく白っぽい淡緑色を呈す、外面釉は光沢を放ち細かな貫入あり、くすんだ淡灰緑色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
15	あ－D－1 ～ あ－D－3	溝状遺構	椀	淡灰黄緑色	須恵質	完形片	8片接合。 釉は高台を含め全面に施されているが土に付着しほとんど剝落、淡緑色で光沢あり、素地は内外面ともに白っぽい肌色を呈す、胎土は石英、長石微砂を含む精良土、焼成普通。
16	あ－D－2	灰褐色土（包土上層か）	椀か	灰緑色	須恵質	体部片	施釉は内面、細かな貫入あり、さほど光沢を放たず、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好。
17	あ－D－2	灰褐色土（包土上層か）	椀	灰黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、全面に光沢あり、素地胎土は精良土を用い、焼成良好。
18	あ－D－2	灰褐色土	椀	濃緑色	須恵質	高台部～体部	釉は濃緑色を呈し、ガラス質、全面に貫入あり、高台はやや焼けひずみあり、素地胎土は石英・長石微砂をわずかに含み、肌色～灰青色を呈す、焼成はやや悪い。
19	あ－D－3	溝状遺構	皿か	灰緑色	須恵質	体部片	外面は釉剝落、内面は遺存よくにぶい光沢を放つ、わずかな粗砂を含むが精良土を用い、焼成良好、（灰青色）。
20	あ－D－3	？	？	淡黄緑色	須恵質	体部片	外面釉は剝落が甚しい、内面は光沢なく貫入あり、素地胎土は精良土を用いるが、焼成はやや悪い、灰色を呈す。
21	あ－D－3	灰褐土	椀か	灰緑色	須恵質	体部片	外面釉は剝落、内面はくすんだ灰緑色を呈し、光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を含む精良土を用いる。焼成普通、灰青色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
22	あ—D—3	?	皿か	鮮緑色	須恵質	口縁部片	外面釉は剝落が目立ち、素地の横ナデ調整痕をよく残す、内面も同様回転調整痕をよく残す、胎土は石英・長石微砂を含み精良、焼成やや悪い。
23	あ—D—4	東西方向溝状遺構	皿か	鮮緑色	土師質	底部片	全面施釉、やや鮮かな濃緑色を呈す、内面を除く他の部分はほとんど磨滅、素地胎土は石英・長石微砂を多く含み、明るい肉色～灰色を呈す。
24	あ—e—8	? 包含層か	皿か	淡灰緑色	須恵質	底部片	施釉は全面、底部外面はムラがあるか、高台は貼付後ナデ調整、長石微粒をわずかに含む精良土、素地胎土は須恵質であるが焼きムラあり、暗い肉色～暗灰青色を呈す。
25	あ—e—8	? 包含層か	椀か	濃灰緑色	須恵質	底部片 (糸切底か)	施釉は内外面、釉は光沢あり、素地胎土は青色を呈し、微・粗砂を含まぬ精良土を用いる、焼成良好。
26	い—A区	包土上層	椀	黄緑色(明緑色)	須恵質	底部片	施釉は全面、高台は削リ出シでナデ調整で仕上げている、内面釉は光沢り、素地胎土は緻密で微・粗砂を含まず精良、焼成やや悪く、ムラあり、肉色～くすんだ灰青色を呈す。
27	い—A区	灰褐色土上面	段皿	灰黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、光沢あり、器壁はやや厚目、素地胎土は微・粗砂含まず精良、胎土焼成は良好、淡灰色。
28	い—A区	包土中層 (暗灰褐色土)	椀	灰緑色	須恵質	底部片	施釉は底部外面を除く高台接地部の一部を含め全面に認む、内面は淡灰緑色、外面は灰緑色を呈しいずれもにぶい光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を比較的多く含み、肉色を帯びた黄褐色を呈す、焼成は極めて良好。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
29	い—a区	?	? (皿か)	淡黄緑色	土師質	小片	外面釉は剝落、内面釉は光沢あり、白土タイプの精良土を用いる。
30	い—a—2	溝状遺構	椀か	淡黄緑色	土師質	体部片	施釉は内外面、素地は微砂を含む精良土で、焼成はやや硬質。
31	い—a—3 〜 い—a—6	包含層	椀	濃緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面全面に認められる、体部内面に段がつく、外面は凹凸が甚しい、胎土中には粗砂が混入しているが全体的に精良で焼成は極めて良好である。
32	い—a—3	ピット	?	濃緑色	須恵質	口縁部片	釉の剝落が甚しい、素地胎土は精良で、焼成も良好である。
33	い—a—3	包含層	皿か	淡黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面に認め、光沢がある、素地胎土は微・粗砂を含まず精良土を用い、焼成良好である、灰青色。
34	い—a—3	包含層	?	淡黄緑色	土師質	体部片	施釉は内外面に認め、剝落部分を除いて光沢がある、素地胎土は微砂をわずかに含む、精良で白土タイプで灰色〜白っぽい褐色を呈す、焼成は普通。
35	い—a—3	溝	?	淡黄緑色	土師質	体部片	微砂(石英・長石)を多く含む、施釉の状況は34と同様。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
36	い—a—3	包含層	皿	灰緑色	須恵質	口縁部片	施釉は内外面全面に施す、口縁部内面1㎝の所に段があり体部の曲折部となる、素地胎土は石英微砂をわずかに含む、焼成良好。
37	い—a—3	包含層	皿か	黄緑色	土師質	底部片	釉の大半は剝落消失、内面に線刻花文あり、施釉は全面、素地胎土は石英・長石微粒を含む精良土で明るい肌色を呈す、焼成軟質。
38	い—a—4	包含層	皿	淡黄緑色	土師質	底部片	釉は全面に施したとみられるがかなり剝落している、高台は貼付とみられる（後ナデ調整で仕上げる）、素地胎土は石英・長石微砂を含み、焼成は比較的良好である。
39	い—a—3	包含層	?	淡緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面に認む、外面は磨滅、内面は光沢あり、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土で、焼成良好である。
40	い—a—5	包含層	椀	淡緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面に認む、光沢あり、内面はきれいな黄緑色、外面は灰色を帯びる、素地胎土は精良で、石英・長石微砂をわずかに含む、焼成は普通、灰褐色を呈する。
41	い—a—4	包含層	?	灰緑色?	須恵質	体部片	内外面ともに釉の残りは悪い、素地胎土は微砂（長石）をわずかに含む精良土を用い、焼成良好。
42	い—a—6	包含層	?	黄緑色	須恵質	体部片	釉は内外面に認む、内面はあわ状に釉のムラがある、ともに光沢あり、素地胎土は精良で微・粗砂を含まず、焼成はやや不良で軟質。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
43	い—a—5	表採	皿か	淡緑色	須恵質	底部片	40と同一個体か、光沢は40に比べるとややにぶい、外内面共に黄緑色に近い色調、素地胎土は灰青色～肉色を呈し硬軟焼きムラあり。
44	い—a—6	?	皿か	緑色～灰緑色	須恵質	口縁部片	内外に施釉を認む、口縁に近い部位はやや濃い緑色を呈し、下方は灰緑色となる、光沢あり、素地胎土は粗砂含まぬ精良土を用い、焼成良好である。
45	い—A区	灰褐色土上面	椀か	淡灰緑色	須恵質	底部片	施釉は体部外面～高台部まで（灰緑色）、細かな貫入あり光沢を放つ、底部施釉せず、素地胎土はわずかな長石微砂を含むも精良、焼成良好。
46	い—a—4	包含層上層	椀	暗黄緑色	須恵質	底部片（½片）	素地胎土は白土質の精良土を用いる、高火度1次焼成をうけた部分は灰青色を呈している。わずかな長石微砂を含む精良土、焼成不良、ムラがある、釉は全面に認む、内面は灰黄緑色、底部外面は黄緑色を呈し体部外面も同様、全面共に貫入あり。
47	い—B—1	?	皿	濃緑色	須恵質	体部片	全面施釉、やや高温（二度焼）のためか部分的にガラス質となる、わずかな貫入あり、外面は回転ナデ痕目立つ、素地胎土極めて精良、焼成良好。
48	いB—1	?	椀	淡黄緑色	須恵質	体部片	全面施釉、白っぽい淡黄緑色～肉色を呈す、細かな貫入あり、細かな傷残る、素地胎土は緻密で粗砂を含まぬ精良土で、白っぽい暗灰色を呈す。
49	い—B—1・4・7	包土上層一括	?	鮮緑色	須恵質	高台片	施釉は全面に認む、光沢あり、付高台はりつけ後ナデ調整仕上げ、素地胎土は精良で、焼成良好。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
50	い—B—3	?	皿か	濃緑色	須恵質	口縁部片	釉は内外面に認む、内外面共に横ナデ調整やや磨滅、素地胎土は微砂をわずかに含む精良土を用い、焼成は極めて良好、断面灰赤褐色を呈す。
51	い—B—7	包土中層	椀	淡黄緑色	須恵質	体部片	釉は内外面に認む、光沢に富む、素地胎土は石英・長石微砂をわずかに含む精良土、焼成ムラあり、灰青色～灰褐色（軟）を呈す。
52	い—B—7	包土中層	椀か	灰緑色	須恵質	底部片	釉はやや濃い灰緑色を呈すが磨滅により内面は少ない。底部外面は施釉されず高台下端、接地面にわずかに認む、素地胎土はわずかに長石微砂を含み精良、焼成良好。
53	い—B—8	?	皿か	黄緑色	土師質	底部片	釉のほとんどは剝落、外面にわずか残る。底部高台は不明、素地胎土は不明、白っぽい膚色を呈す、微砂わずかに含む、焼きは甘い。
54	い—B—7	攪乱層	皿か	灰緑色	須恵質	口縁部片	口縁部は灰緑色を呈す、他は透明に近い、内外面ともに光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を含むも精良、灰青色を呈し、焼成良好。
55	い—B—8	包土中層	碗か	淡黄緑色	土師質	底部片	全面に施釉を認むが剝落が甚しい、底部は削り出シ高台にみえるが糸切底の可能性もある、素地胎土は膚色～赤味を帯びた膚色を呈し、粗砂をわずかに含む。
56	い—B区	包土上層	皿か	灰緑色か	須恵質	口縁部片	内外面共釉の大半は剝落、素地胎土は石英、長石を含む精良土で焼成良好、灰青色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
57	い—B区	包土上層	椀か	濃緑色	須恵質	体部片(腰)	釉は光沢あり、内外面に施す、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土で焼成良好、暗青色を呈す。
58	い—bトレンチ	表採	皿か	淡黄緑色	須恵質	底部片	釉は淡黄緑色を呈す、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土で焼成良好、極めて堅緻、淡灰色を呈す
59	い—b—2・5	表土層	皿	灰緑色	須恵質	体～底部片	内外面共釉は部分的に剝落、高台下端～底部外面は施釉認められず、素地胎土は石英、長石微粒を含み、焼成普通、淡灰青色を呈す。
60	い—b区(2・5)か	包含層	?	濃緑色	須恵質	体部小片	外面釉はかなり剝落、素地胎土は長石、石英微砂を比較的多く含む、焼成極めて良好で断面赤褐色を呈す。
61	い—b—7	包含層	皿か	淡灰黄色	土師質	体～底部片	施釉は内外面共に認められる。高台は残存部はわずかであるが細くて低い高台で、貼付と思われる。素地胎土は白土タイプの精良土を用い、石英、長石微粒を含む、緑釉というよりは白釉のような趣がある。
62	い—b—8 お—c—1 2片接合	包含層	椀か	黄緑色	須恵質	底部片	内面はやや濃い緑色を呈する部分あり、釉は全面、底部は糸切底で後貼付高台、素地胎土は比較的多く石英・長石微砂を含む、焼成普通。(灰青色～灰褐色)
63	い—b—8	包含層	?	淡黄緑色	須恵質	体部片	外面は極めてうすい色調、内面は淡黄緑色、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土を用いる、焼成はやや甘く灰色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
64	い—b—8	包含層	?	灰緑色	須恵質	口縁部片	外面釉は貫入目立ち、その間の部分が剝落している、焼成時か、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土、焼成良好。
65	い—b—9 (bトレンチ)	包含層	?	鮮緑色	土師質	底部片	外面釉は消失、内面にわずか残存、内面は回転ナデ調整痕を残す、素地胎土は肌色を呈し、焼成は普通よりやや甘い、胎土中、微砂わずかに含む。
66	い—c—7	包含層	皿か	灰緑色	須恵質	口縁部片	内面釉は2度焼き時に高温すぎたのか消失、あるいは磨滅している。外面釉は光沢あり、素地胎土は長石微粒をわずかに含む精良土を用い、焼成良好。
67	い—c—8	包含層	皿か	淡黄緑色	土師質	底～体部片	施釉は全面に認むが剝落が目立つ、残存部は白っぽい淡緑色を呈し（透明に近い）、貫入あり、素地胎土は微、粗砂をほとんど含まず、肌色をおびた白色を呈す、焼成普通。
68	い—c—8	包含層	椀	濃緑色	須恵質	口縁部片	外面釉はやや濃い、内外面ともに光沢あり、素地胎土は微粗砂を含まぬ精色土を用い灰青色を呈す、焼成堅緻、良好。
69	い—c—8	包含層	椀か	淡黄緑色	須恵質	底部片	施釉は高台下端より底部外面には当初より行われなかったようである、内外共に剝落、磨滅が甚しい、素地胎土は長石微粒を含む、暗い肌色～灰褐色を呈し、須恵器生焼き様となる。
70	い—c—8	包含層	椀か	透明釉となっている	土師質	底部片	わずかに釉が残存、内外面全面に施釉を認む、高台は貼付けで細くて高い、素地は微・粗砂をほとんど含まぬ精良土で白っぽい肌色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
71	い—C—8	包含層	皿か	灰黄緑色	須恵質	口縁部片	内外面釉は光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂をわずかに含む精良土を用い、焼成良好、黄褐色を呈す。
72	い—C—8	包含層	?	黄緑色	須恵質	体部片	内面釉は2次焼成時、泡状となっている、外面と共に光沢あり、素地胎土は微粗砂を含む精良土を用いるが、焼きはやや甘い。灰褐色を呈する。
73	い—C—8	包含層	皿か	淡灰緑色	須恵質	体部片	外内面ともに光沢あり、微・粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好。灰青色を呈する。
74	い—C—9	包含層	椀か	淡灰緑色	須恵質	体部片	内外面共に釉の剝落が目立つ、素地胎土は長石微砂をわずかに含む精良土を用い、焼成良好、灰青色を呈す。
75	い—C—9	包含層	皿か	灰緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、釉面は光沢あるがきれいな緑色の発色ではない、素地胎土は石英微石をわずかに含む。精良土で焼成良好、断面灰青色を呈す。
76	い—C—9	包含層	?	黄緑色	須恵質	体部片	内外面共に施釉、光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まず精良、焼成は普通。
77	い—C—9	包含層	皿か	淡黄緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、両面共に剝落が目立つ、微・粗砂を含まぬ精良土を用いるが、焼きは甘く、灰色を呈する。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
78	い—C—9	包含層	瓶	黄緑色	土師質	把手	全面施釉、表面は黄緑色、内面は緑色を呈し、貫入あり、素地胎土は白土タイプの良質土で、微、粗砂を含まぬ精良土、焼成やや悪い、黄色っぽい肌色を呈す。
79	い—C—9	地山上面	椀	灰緑色(うぐいす色)	須恵質	口縁～体部片	全面に施釉、内外面共に光沢あり、内外面には釉が泡状となった部分がある、素地胎土は微砂をわずかに含むが精良で、焼成は良好、灰褐色を呈す。
80	い—C—9	包土上層	?	淡黄緑色	須恵質	底部片	底部内外面に施釉あり光沢あり、内面には細かなキズがみえる(擦痕か)、素地胎土は長石微粒を含む精良で、焼成普通、灰褐色を呈す。
81	い—C—9	包土下層	碗か	淡黄緑色	須恵質	口縁部片	外面には一部部分的に釉があるのみ(磨滅)、内面は光沢あり、素地胎土は微砂を含む精良土、焼成普通、断面はさほど緻密ではない。
82	い—C—9	包土下層	椀	〃	須恵質	体部片	内外面に施釉、にぶい光沢を放つ、素地胎土は明るい肌色を呈す、微・粗砂を呈まぬ精良土であるが、焼成は甘く緻密でない。
83	い—C—9	地山上面	椀か	淡黄緑色(白っぽい)	土師質	底～体部片	施釉は内外面全面に認む、高台は台形であるが削り出シ、素地胎土は白土タイプの色調で石英・長石微砂を比較的多く含む(白黄色)
84	い—C—9	包含層	?	淡灰黄緑色	須恵質	底部片(糸切底)	施釉は底部外面を除く全面、光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を比較的多く含む、焼きムラあり、肌色～灰青色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
85	い—C—9	包含層	?	淡緑色	土師質	底部片	施釉は全面、かなり剝落している、素地胎土は白土タイプで石英・長石微砂を含むが精良、焼成軟質。
86	い—C—9	包含層	椀か	淡黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、外面は剝落、残存部は光沢あり、胎土は石英・長石微砂を比較的多く含む、焼きムラあり鳶色～灰青色を呈す、焼成普通。
87	い—C—9	包含層	椀か	淡黄緑色	土師質	底部片	施釉は内外面鮮緑色斑点あり、光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土、焼成普通、断面灰褐色～鳶色、軟質。
88	い—C—9	包含層	椀か	淡黄緑色	土師質	体部片	同上。 体部下半、篦削り痕を残す。
89	い—C—9	包含層	皿	淡黄緑色	土師質	底部片 削り出シ蛇の目高台	内外面に施釉あり、多くは剝落、残存部光沢あり、素地胎土は白灰色を呈す、石英・長石微砂を比較的多く含む。
90	い—C—9	包含層	椀か	〃	土師質	底部片 削り出シ蛇の目高台	施釉は全面、大半は剝落、素地胎土は白っぽい鳶色を呈し石英・長石微砂をわずかに含む精良土、軟質。
91	い—C—9	包含層	?	淡灰黄色	土師質	体部片	釉は内外面に施すが大半は剝落、貫入目立つ、素地胎土は白っぽい鳶色を呈し、石英・長石他微砂を含む、軟質。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
92	い—C—9	包含層	椀か	淡灰黄色	土師器	底部片	削り出し高台 底径≒7㎝ 同上
93	い—C—9	A溝	皿か	灰緑色	須恵質	体部片	施釉は外内面、光沢あり、内面はややにぶい、素地胎土は石英微砂をわずかに含む精良土で焼成良好、堅緻。
94	い—C—9	A溝	椀か	淡黄緑色	土師質	底部片	施釉は内外面、釉面は光沢あり、鮮緑色斑点あり、高台は削り出シ蛇の目高台、素地は精良で微・粗砂を含まない、焼成は比較的良好。
95	い—C—9	A溝	椀か	黄緑色	土師質	底部片	施釉は内外面、釉面は光沢あり面台は削り出シ蛇の目高台、素地胎土は石英・長石微・粗砂を比較的多く含む、焼成軟。
96	い—C—9	A溝	椀か	黄緑色	土師質	体部片	同上。同一個体。 （白っぽい肩色を呈す。）
97	い—C—9	A溝	椀か	黄緑色	土師質	体部片	同上、同一個体か。
98	イ—D— 7・8	包土上層	椀か	淡緑色	須恵質	口縁部片	内外面に施釉、やや磨滅している、素地胎土は灰青色を呈し、微・粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
99	イ—D区 撹乱層	撹乱層	?	淡灰緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、外面はくっつきがみられ、釉面はガラス質で硬質である、灰釉の可能性もある、貫入も細かくみられる、キズあり、白っぽい灰色を呈す素地胎土は微粗砂含まず、焼成も良好。
100	イ—D区	撹乱層	?	淡黄緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、外面はやや磨滅、釉面は光沢あり、素地胎土は白っぽい明るい灰色を呈する、微・粗砂はほとんど含まず、焼成普通（やや軟質）。
101	イ—D—7	包土上層	椀か	灰緑色 くすんだ色	須恵質	体部片	内外面、施釉、釉面は光沢を放つがやや磨滅のためくすんでいる、石英・長石微砂が比較的多い、焼成良好、断面灰青色を呈す。
102	イ—D—7・8	包土上層	椀	黄緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、内面は器壁かなり磨滅、外面はやや磨滅、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成極めて良好、堅緻、暗灰青色を呈す。
103	イ—D区	撹乱層	皿か	濃緑色	須恵質	体部片	施釉は底部外面の一部と全面に認む、内外面釉ともに磨滅により剝落、残存面は光沢を放つ、貫入あり（長石微砂をわずかに含む精良土、焼成は極めて良好、底部外面は暗青色、断面（体部）は青色。
104	イ—D—5～8	建物V東溝内	椀	淡灰黄緑色	土師質	体部片	全面施釉、淡黄緑色を呈し、剝落部を除く残存部は光沢を放つ、素地胎土は粗砂を含まず微砂をわずかに含む精良土、底部は断面暗青色となり高火度焼成、明るく白っぽい肌色を呈す。
105	イ—D区	撹乱層	椀	濃緑色（灰色を帯びた部分あり）	須恵質	高台～体部	全面施釉はやや灰色を帯びた緑色を呈し貫入状ヒビあり、外面は底部を除き暗緑色、高台底面はやや白っぽい濃緑色を呈す、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土、焼成良好、断面褐色を帯びた灰青色を呈する。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
106	イ—D区	攪乱層	皿か	黄緑色	須恵質		唾壺か皿か。 施釉は残存部の全面に認め、黄緑色を呈しやや厚く光沢を放つ、貫入あり、素地は石英・長石微粗砂を含む、焼成はふつうで、赤味を帯びた灰褐色を呈す。
107	う—A区	灰褐色土上面	椀か	淡灰緑色	須恵質	底部片	釉は底部外面にはみられず、体部外面には光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を含むも精良で、焼成良好、器表は青色、断面は灰赤褐色を呈す。
108	う—a—9		椀か	灰緑色	須恵質	体部片	釉は内外面共に若干磨滅、長石微砂を含む精良土、焼成良好、断面灰青色を呈す。
109	う—a区	東西トレンチ	椀か	淡黄緑色	須恵質	底部片	釉は内外面は淡黄緑色だが磨滅が甚しい、細かな貫入あり、削り出し高台は淡灰緑色、底部外面には施釉はみられない、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成極めて良好、堅緻。
110	う—a区	東西トレンチ	皿か	灰黄緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、外面クッツキあり部分的に磨滅、器壁はうすい、光沢あり、素地胎土は微砂をわずかに含み、焼成良好、灰青色を呈す。
111	う—a区	東西トレンチ	?	淡黄緑色	須恵質	体部片	外面釉は剝落、内面釉は光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を含む精良土、焼成普通、断面淡灰青色。
112	う—a区	東西トレンチ	椀	灰黄緑色	須恵質	体部片	外面釉は大半が剝落、素地、白土的胎土がみえる、内面釉は光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を含むが精良で、焼成はやや悪い。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
113	う—a区	東西トレンチ	椀	淡黄緑色	土師質	体部片	内外面共に釉は剝落が多い、素地胎土は石英・長石微砂を含む精良土で、焼成はやや硬質赤味を帯びた膚色を呈す。
114	う—a区	東西トレンチ	椀	濃（鮮）緑色	土師質軟質	底部片	全面に施釉を認むが大半は剝落、高台は付高台で帯状、素地胎土は赤味を帯びた膚色～白っぽい膚色を呈す、石英・長石微砂を含む。
115	う—b—1・4	包含層	輪花皿か	淡黄緑色	須恵質	体部片	内外面共に釉はかなり磨滅、口縁部を内側に約1㎝つまんで折り曲げて輪花を形づくる。素地胎土は石英・長石微砂をかなり含む、焼成普通。
116	う—b—1・4	包含層	椀か	淡黄緑色	須恵質	底部片貼付高台	施釉は全面に認む、内面は光沢なく貫入部に土がしみこみ褐色を帯びる、素地胎土は微・粗砂を含まず精良土、焼成普通(やや軟)、膚色～灰色。
117	う—b—3	灰褐土	?	淡灰黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、外内面はにぶい光沢を放つ、素地胎土は微・粗砂含まぬ精良土を用い、焼成良好。
118	う—b—6	包土下層	皿か	淡黄緑色	須恵質	底部片糸切底	釉は内外面に認む、内面はくすんだ淡灰緑色、外面は淡灰緑色を呈し光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を含む精良土を用いる、焼成良好、堅緻、白っぽい灰色を呈す。
119	う—b—6	包土下層	椀か	〃	須恵質	底部片	施釉は内外面、底部外面にはさほど顕著ではなく本来施されなかったとみられる、素地胎土は石英・長石微砂を含むが精良、焼成良好、淡褐色。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
120	う—b—6	包土下層(灰褐土)	椀	濃緑色	土師質(軟)	底部片	外面はほとんど釉は剝落、高台は削り出シ蛇の目高台か、素地胎土は灰色を帯びた膚色～赤味を帯びた膚色を呈す。石英・長石微砂を含む精良土。
121	う—b—6	溝(中)	椀	淡灰黄緑色	須恵質	体部片	内外面共に光沢を放つ、内面には鮮緑色斑点がある、素地胎土は石英・長石微砂を含む精良土、焼成やや悪い、一見土師器、灰褐色を呈す。
122	う—b—6	包含層		灰緑色	須恵質	底部片	一見土師器、内外面釉は光沢を放ち、内面が明るい、素地胎土は石英・長石微砂を含むが精良、焼成やや悪い、暗灰褐色。
123	う—b—6	包土上層	皿か	濃緑色	須恵質	底部片付高台	全面施釉、内外面ともに光沢あり、素地胎土は微・粗砂を含まぬ精良土、焼成良好、断面青色を呈す。
124	う—b—7	包含層	椀	淡黄緑色	土師質	底部片	高台は削り出シで帯状、施釉は内外面、残存部は光沢あり、素地胎土は石英・長石微砂を比較的多く含む、焼成比較的良好。
125	う—b—6	包含層	椀	灰緑色	須恵質	底部片	内外面施釉、外面にはクッツキ、内面にはラスター様の色調あり、いずれも光沢あり、石英・長石微砂を含む精良土、焼成普通、さほど緻密ではない。
126	う—c—2	包含層	椀	濃緑色	須恵質	体部片	釉は濃緑色を呈す、焼成胎土共にすぐれている、断面は灰黒色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器 種	釉の色調	素地	計測値等	備 考
127	う—c—4	包含層	椀	〃	〃	口縁部片	126に同じ。
128	う—c—5 4片接合	包土上層	椀	〃	〃	完形片	126に同じ。
129	う—C—2	包含層	椀	黄緑色	土師質	底部片	内外面に施釉、高台は貼付やや巾広な形態か、釉の剝落目立つ、素地胎土は微砂をわずかに含む精良土、焼成軟質、白っぽい肌色を呈す。
130	う—C—2	包含層上層	椀か	淡黄緑色	須恵質	底部片	釉は部分的に剝落あり、わずかな貫入あり、光沢を放つ、部分的に肌色（黄色をおびた）を呈す、粗地胎土は微砂をわずかに含む精良土で、くすんだ暗灰色を呈し、焼成はやや悪い、内面に線刻花文あり。
131	う—C—2	包含層	皿？	灰緑色	須恵質	体部片	釉は内外面、光沢を放つ、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好、堅緻。
132	う—C—3	包含層上層	椀か	淡黄緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、内面はラスター様光沢あり、素地胎土は微砂をわずかに含むが精良、焼成普通、灰青色を呈す。
133	う—C—2	包含層	？	黄緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、共に剝落が目立つが残存部は光沢あり、素地胎土は石英微砂を含むが精良、焼成良好、灰色を呈し、堅緻。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
134	う—C—2	包含層	椀か	淡黄緑色	土師質	底部片 削り出し蛇の目	施釉は全面に認む、内面にわずかに残存、他は剝落、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成普通、白っぽい灰色～鼠色を呈す。
135	う—C—2	包含層上層	皿	淡黄緑色	須恵質(土師様)	体部下半片	体部内面に仕切様凸帯が口縁に対して直行する、内外面に施釉あり、素地胎土は微、粗砂含まぬ精良土、軟質、灰白色を呈す。
136	う—C—2	包含層上層	?	淡灰黄緑色	須恵質	底部片	高台は細くて低い付高台、施釉は内外面に認む、素地胎土は石英微砂を多く含む精良土、焼成はやや悪く軟質、もろい。
137	う—C—2	包含層上層	皿か	淡灰緑色	須恵質	口縁部片	釉は内外面光沢あり、素地胎土は精良で焼成良好、堅緻。
138	う—C—3	包含層下層	椀か	灰緑色	須恵質	体部下半片	施釉は内外面に認む、光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を含む精良土、焼成極めて良好、断面赤褐色を呈し堅緻。
139	う—C—3	包含層下層	椀	濃緑色	須恵質	口縁部片～体部片	施釉は内外面、外面口縁部付近は剝落、内面は光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好、灰青色を呈す。
140	う—C—3	包含層下層	?	灰黄緑色	須恵質	口縁部片	施釉は内外面に認む、外面は高火度焼成によりざらつきがあり、釉面はまばら、内面は光沢あり、素地胎土は比較的多く石英、長石微砂を含む、精良、焼成良好、灰色～鼠色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器 種	釉の色調	素地	計測値等	備 考
141	う—C—3	包含層上層	椀	灰緑色	須恵質	底部片～体部片	施釉は外底部を除く全面に認む。外底部は削リ出シ高台で凹部をなす。体部下半は篦削り調整痕を残す。釉面は内外面共に光沢あり。粗砂含まぬ精良土を用い長石を認む。
142	う—C—3	包含層上層	椀か	淡灰黄緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、光沢あり、内面にはラスター様光沢部分あり、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成良好、断面灰褐色を呈す。
143	う—C—3	包含層上層	椀か	淡黄緑色	土師質	底部片削リ出シ高台	当初は全面施釉か、わずかしか残存せず淡緑色、素地胎土はわずかな石英、長石微砂を含む精良土で白土タイプ、白っぽい肌色を呈す。
144	う—C—3	包含層上層	椀か	灰黄緑色	土師質	体部片	施釉は内外面かなり磨滅、にぶい光沢、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成やや硬質、灰色を帯びた肌色を呈す。
145	う—C—3	包含層上層	椀か	淡黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、かなり磨滅するが残存面は光沢あり、素地胎土は微砂をわずかに含み精良、焼成やや悪く土師質的な軟度。
146	う—C—3	包含層上層	椀	淡黄緑色	須恵質	底部片	施釉は高台の一部と内外面全面に認められる、極めて薄い淡黄緑色を呈す、磨滅が甚しく、わずかに光沢を放つ、素地胎土はわずかな微砂を含むが精良土、灰褐色～肌色。
147	う—C—4	包含層上層	皿	淡黄緑色	須恵質	底部片貼付高台	施釉は全面に認む、いずれも磨滅剥落が目立つ、高台は帯状で巾8㎜、素地胎土は微粒わずかに含む精良土、焼成甘く、灰青色を呈す、もろい。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
148	う－C－5	包含層中層	?	淡灰黄緑色	土師質	口縁部片	内外面施釉は部分的な剝落がみられるが光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を含むも精良で白土的、焼成普通。
149	う－C－5	包含層	椀か	外面 黄緑色 内面 灰緑色	須恵質	底部片 貼付高台	施釉は内外面、外底部には認められず、残存部は光沢あり、鮮緑色班点が内面にみられる、素地胎土は石英、長石微砂を含む精良土で焼成はやや甘い。
150	う－C－5	包含層	?	灰黄緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好、緻密、灰青色。
151	う－C－6	包含層	小形唾壺か	黄緑色	須恵質（軟）	体部片	内面には施釉ないが流れ込み（下半）あり、外面釉剝落目立つ、素地胎土は石英、長石微粒を含む精良土を用い、焼成やや甘い、赤味を帯びた肌色～灰青色。
152	う－C－6	包含層	皿か	灰黄緑色	須恵質	口縁部片	内外面に施釉、光沢あり、素地胎土は微、粗砂含まぬ精良土を用い焼成良好、灰青色を呈し、緻密。
153	う－C－6	包含層	椀か	灰緑色	須恵質	体部下半片	施釉は内外面に認む、外面はやや磨滅、残存部（内面）は光沢あり、素地胎土は長石、石英微砂を含む精良土、焼成良好、堅緻。
154	う－C－7・8	表採	椀	淡灰黄緑色	須恵質	高台部	施釉は内外面に認むが外底部はムラが濃淡あると思われる。底部は削り出シで高台は帯状（巾6.5㎜）、素地胎土は石英・長石微砂を含み、焼成良好、灰青色。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
155	う—C—3 う—C—8 2片接合	包土上層	椀	濃灰緑色	須恵質	底部 ほぼ完存	全面施釉で濃緑色を呈す、素地胎土は砂粒が統一され緻密、焼成良好で、断面外表部で青灰色、内部で赤褐色を呈す。
156	う—C—9	包含層	椀か	黄緑色	須恵質	底部片	内外面に施釉、内面はやや磨滅がみられるが存残部は光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土、焼成良好、灰青色を呈す（緻密）。
157	う—C—9	包含層	椀か	濃灰緑色 〜 濃緑色	須恵質	糸切底部	施釉は底部外面を除く（ただし高台部に若干ある）全面に認む：体部外面は淡緑色で底面にはムラとなり、内面は濃緑色〜緑色を呈す、細かな貫入あり、素地は高台部は橙色を呈し生焼気味、他は灰褐色〜灰青色を呈し、焼成良好、胎土は石英、長石微砂を含む精良土。
158	う—d—6	包含層	椀	濃緑色	須恵質	高台底部片	全面施釉、光沢あり、高台部（付高台）欠失、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成極めて良好、灰青色を呈し緻密。
159	う—d—6	包含層	椀	灰緑色	須恵質	体部片	施釉は内外面、光沢あり、内面ラスター様光沢を放つ、素地胎土は微粗砂を含まぬ精良土で、焼成良好、極めて緻密。
160	う—d—6	包含層	椀か	灰緑色	須恵質	高台底部片	釉は高台一部に施され底部はない、貫入あり、灰緑色を呈す、素地胎土は石英、長石微砂をわずかに含む精良土を用い、焼成極めて良好、灰青色を呈す。
161	う—d—8	包含層	椀	灰黄緑色	須恵質	高台〜体部	全面施釉、外面体部は2度焼成の際の高火度燃成のためくすんだ淡灰緑色を呈し、底部外面は淡黄緑色で部分的に剝落、わずかな貫入あり、粗砂含まぬ精良土を用いる。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
162	う—d—8	包含層	椀	濃緑色	須恵質	高台～底部下半	全面施釉、光沢なく暗灰緑色を呈す、器表はややざらつきをなし、釉は泡末状に付着、素地胎土は緻密で長石微砂をわずかに含む精良土、焼成は極めて良好で灰青色を呈す。
163	う—d—8	包含層	椀	濃緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、光沢あり、外面はやや磨滅、素地胎土は石英、長石微砂を含むも精良で、燃成良好、堅緻。
164	う—d—8	包含層	皿か	淡黄緑色	須恵質	体部上半	内外面に施釉、共に光沢あり、内面はやや磨滅、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好、緻密。
165	う—d—9	包土中～下層	?	淡黄緑色	土師質	体部片	施釉は内外面に認む、内面は剝落、光沢なし、素地は石英、長石微砂を含む精良土で、焼成やや軟、緻密とは言えない。
166	う—d—9	包土中～下層	鉢か(椀)	黄緑色	土師質	体部下半片	内外面に施釉、外面は光沢目立たず、内面は光沢あり、石英、長石微砂を含む精良土を用い、焼成比較的良好、白っぽい膚色を呈す、器壁厚い。
167	う—d—9	包土	椀	黄緑色～明るい緑色	〃	〃 底部	高台を含む全面に施釉、やや濃厚にムラがあり明緑色～淡黄緑色を呈す、筆で塗布した痕跡あり、細かな貫入あり、部分的に剝落、胎土はわずかな石英微砂を含む精良土。
168	え—a—1	包含層	椀か	淡黄緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、外面は磨滅、内面は光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成普通、灰色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
169	え—a—1～3	包含層	皿か	黄緑色	須恵質	底部	内外面全面施釉、高台部は磨滅し消失、内面は剝落が著しいがやや暖かい灰緑色を呈す、底部外面も同様、素地胎土は石英、長石微砂をわずかに含む精良土で焼成普通。
170	え—b—2	包含層	皿	灰緑色	須恵質	口縁部片	内外面施釉、光沢あり、口縁部は白っぽい黄緑色を呈す、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好、灰青色（緻密）。
171	え—b—1	暗褐色土	椀	灰緑色	須恵質	体部上半片	内外面施釉、両面とも光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土で焼成良好、灰青色を呈し、極めて緻密。
172	え—b—1	包含層	椀	淡黄緑色	須恵質	底部	内外面、ラスター様光沢あり。内外面全面施釉、外面は淡灰緑色、内面はやや濃い、貫入あり濃緑色の班点あり、素地胎土は石英、長石微砂を含むも精良土で焼成良好。
173	え—b—2	包含層	？	灰緑色	須恵質	底部貼付高台帯状	内面釉は消滅、外面は全面に施釉を認むがかなり磨滅、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土で焼成良好、極めて緻密（灰青色）。
174	え—C—6	包含層	椀	淡黄緑色	須恵質		全面施釉だが多くは剝落、淡黄緑色を呈すが底部外面などは黄色が強い、貫入状に細かなヒビあり、素地胎土は粗砂を含まぬ精良土で、焼成普通、白褐色を呈す。
175	お—b—1	包含層	皿（段皿）	淡緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、いずれも光沢あり、外面は二度焼き、灰白色、焼成時の高火度によってざらつき（釉泡波裂か？釉のすき間あり）、クッツキもあり、素地胎土は極めて精良、焼成秀れる。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
176	か—e—8	包含層	椀か	黄緑色	土師質	体部下半片	内外面施釉、両面共に剝落が多い、明るい肌色を呈す、残存部は光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂をわずかに含む精良土、焼成普通、軟質、(緻密)。
177	き—d—3	包含層	椀	淡黄緑色	須恵質	底部 高台貼付 帯状	全面に施釉を認む、内面は釉泡破裂、ムラがある、内外面ともに釉面は光沢あり、素地胎土は微砂をほとんど含まぬ精良土、焼成やや悪く軟質。
178	き—d区	東西溝中	椀 口径13.4cm 器高4.3cm	淡黄緑色	土師質	完形片	全面に施釉を認むが、剝落部分が多い。内面は丁寧な篦磨キ、外面は横ナデ、横方向の篦磨キを施す。胎土は白土で極めて精良。高台は削り出シで凹部をなす。
179	欠番						
180	北東谷間部 西端拡張区	包土上層	瓶か	灰緑色 淡黄緑色	須恵質	体部片	外面にのみ施釉、大半は剝落、内面釉は流れ込みで灰緑色を呈す、いずれも光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を多く含む、焼成良好、灰青色～灰褐色を呈す。
181	北東谷間部 西端拡張区	包土上層	椀	淡灰黄緑色	土師質 (硬)	底部片	削り出シ蛇の目高台、施釉は内外面全面、かなり磨滅、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成良好で須恵器的、灰青色(底面)～肌色。

出土地点不詳分							
182	?	?	椀	暗濃緑色	須恵質	底部片	越州窯青磁に酷似、釉は暗濃緑色、光沢を放つほどガラス質に近くなっている、細かな貫入あり、素地胎土は精良で、焼成はさほどすぐれず、暗灰色～肉色（ムラ）を呈す、二度焼焼成はすぐれる。
183	?	?	椀	〃	〃	口縁部片	内面貫入目立たず、外面釉は光沢なく黒っぽい、ラスターあり、内面釉は光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好、堅緻で緻密。
184	?	?	椀か	灰緑色	〃	〃	内外面に施釉、外面は磨滅甚し、残存部はいずれも光沢を放つ、素地胎土は石英、長石微砂をわずかに含む、焼成良好、堅緻。
185	あ—D—1付近、溝か	?	椀か	淡灰黄緑色	須恵質	底部片 厚さ≒7㎜	施釉は内外面あり、いずれも光沢放つ、素地胎土は微砂含む、(15)と接合。
186	?	?	?	灰黄緑色	須恵質	底部片	内外面に施釉、光沢あり、高台は欠失するが貼付高台帯状、素地胎土は微、粗砂含まぬ精良土、焼成良好、緻密ではない。
187	?	?	椀か	淡黄緑色	土師質（白土タイプ）	体部片	施釉は内外面、磨滅甚しいが残存部は光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、白土タイプの精良土、焼成は普通。
188	?	?	椀	淡黄緑色	土師質	底部片	施釉は全面に及ぶが外底部は粗、高台は削リ出シ帯状、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成良好、赤味を帯びた肉色。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
189	?	?	皿か	〃	須恵質	口縁部小片	施釉は内外面、口唇は丸味をもって肥厚、素地胎土は精良、焼成普通、緻密ではない。
190	?	?	?	外面 黄緑色 内面 鮮緑色	須恵質	体部片	内外面施釉、光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を含む、焼成良好、灰褐色を呈す。
191	?	?	?	淡黄緑色～黄緑色	土師質	体部片	内外面施釉、光沢あり、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用いる、焼成は比較的良好、肉色を呈す。
192	?	?	?	淡黄緑色	土師質	体部片	釉の大半は剝落、内面の一部に残存するのみ、素地胎土は白土タイプで石英、長石微砂を含む精良土、焼成普通、軟質、白っぽい肉色を呈す。
193	?	?		濃緑色	土師質	体部片	内外面に施釉、光沢あり、外面にはラスター様光沢（青色）がある。素地胎土は赤味を帯びた肉色を呈す、長石微砂をわずかに含む、焼成良好。
194	?	?	椀か	黄緑色	土師質	体部片	内外面に施釉、釉面は光沢を放つ、外面は剝落が目立つ、素地胎土は白土タイプで石英、長石微砂を比較的多く含む、白っぽい肉色を呈す。
195	?	?	鉢か（碗か）	黄緑色	土師質	体部片 器壁は厚い	166に類似する、内外面施釉、剝落が目立つ、素地胎土は長石微砂をわずかに含む精良土、焼成良好、白っぽい肉色を呈す、体部外面は篦削り。
196	?	?	椀か	淡黄緑色	土師質	底部片	施釉は全面にわたり光沢あり、底部は削り出シ蛇の目高台、素地胎土は石英粗砂、長石微砂をわずかに含む精良土、焼成良好、肉色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
197	あ—D—1	溝状遺溝	椀か	鮮緑色	土師質	体部片	内外面に施釉、外面は剝落、内面は光沢あり、素地胎土は石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成良好、灰色～鼠色を呈す。
198	あ—D—2	溝状遺構	椀	淡灰黄緑色	須恵質	底部片	釉は淡黄緑色を呈する。細かな貫入あり、釉はうす目、素地胎土は微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成極めて良好、暗灰色を呈する。
199	あ—D—2	溝状遺構	椀	淡黄緑色	〃	〃	全面に施釉、体部外面は光沢に乏しく白っぽい淡黄緑色、内面は淡黄緑色を呈し、底面はやや磨滅、素地胎土は微砂をわずかに含む精良土を用い、灰白色～淡灰青色を呈す、焼成良好。
200	い—C—9	?	椀か	淡灰緑色	須恵質	口縁部片	内外面に施釉、釉面は光沢あり、素地胎土は長石微砂を含む精良土、焼成普通、緻密ではない。
201	い—C—9	?	皿か	灰緑色	須恵質	口縁部片	内外面に施釉、釉面には鈍い光沢あり、素地胎土は精良、焼成良好、堅緻。
202	い—C—7・9	南北壁	?	淡灰緑色	須恵質	体部片	外面のみ施釉、貫入がみられ、釉面はガラス質で光沢あり、素地胎土は白色を呈する精良土、石英、長石砂を含む、焼成良好、灰釉か。
203	い—C—7・9	南北壁	椀?	淡黄緑色	須恵質	底部	内外面に施釉、但し磨滅が甚しい、素地胎土は精良で、灰青色を呈し、微石微砂をわずかに含み、焼成良好、堅緻。
204	い—C—7・9	南北壁	椀?	黄緑色	軟須恵質	体部片	内外面に施釉、外面はやや磨滅、残存面は光沢あり、素地胎土は石英微砂を比較的多く含む。やや焼成悪く軟質、灰褐色を呈す。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
205	い—C—7・9	南北壁	椀	灰緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、光沢あり、内面は鮮緑色部分あり、横ナデ、外面横篦削リ、微砂もほとんど含まぬ精良土で、淡青色を呈し、焼成良好、堅緻。
206	い—C—7・9	南北壁	皿か	淡黄緑色	須恵～土師質	口縁部～体部片	内外面に施釉を認む、いずれも磨滅するが残存部はやや光沢あり、素地胎土は灰青色～肉色を呈し、須恵とも土師とも断定しかねる、石英、長石微砂をわずかに含む精良土を用い、焼成普通。
207	イ—D—7	包土上層	皿	鮮緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、細かな貫入あり、釉面は磨滅により光沢なし、内面の残存は良好、エメラルドグリーン、素地胎土は灰褐色を呈す、石英、長石微砂を含む、焼成良好、堅緻。
208	あ—D—4	溝状遺構	椀か	黄緑色	土師質	口縁部片	内外面に施釉あり、施釉は細かな貫入あり光沢を放つ、素地胎土は明るい肉色を呈し、石英、長石微砂を含む精良土、焼成普通。
209	ロ—C区	攪乱層	皿	濃灰緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、釉面は細かな貫入あり、素地胎土は暗青色を呈し、微、粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成良好。
210	い—B—1	包含層	椀か	灰緑色	須恵質	体部片	内外面に施釉、釉面には細かな貫入、光沢あり、素地胎土は灰青～灰褐色を呈す、石英、長石微砂を含む、焼成良存、堅緻、灰釉的光沢あり。
211	い—B—9	包含層	皿か	灰緑色	須恵質	口縁部片	内外面に施釉、釉面には細かな貫入、光沢あり。

番号	出土地点	出土位置	器種	釉の色調	素地	計測値等	備考
212	い—B—9	包含層	椀か	灰緑色	須恵質		全面施釉、内外面ともに光沢あり、高温二次焼成のためか貫入あり、素地胎土は石英微砂をわずかに含む精良土、緻密、焼成極めて良好、灰青色を呈す。
213	い—B—9	包含層	?	濃緑色〜鮮緑色	土師質		内外面施釉、鮮緑色〜やや濃い緑を呈す、素地胎土は石英長石微砂を多く含む、焼成普通、断面灰色を帯びた肌色、あるいは白っぽい肌色を呈す。
214	う—C—2	包含層上層	?	淡黄緑色(白っぽい)	土師質	底部	全面に施釉、高台は削り出シであるが蛇の目にはならず、釉は磨滅によってかなり剝落するが、残存部は光沢があり、細かな貫入がみられる、素地胎土は石英微砂を比較的多く含む精良土を用いる、白っぽい肌色を呈し、軟質。
215	う—C—2	包含層中層	椀か	〃	土師質	体部下半片	上記と同様(同一個体か)
216	?	?	皿(段皿)	灰緑色	須恵質	体部下半〜底部	内外面に施釉、光沢あり、細かな貫入を認める、高台は貼付帯状高台、内面底面には段差があり、段皿と推定される、素地胎土は微、粗砂を含まぬ、精良土を用い、焼成きわめて良好、堅緻、灰青色を呈す。
217	あ—D区	東西溝中	椀 口径17.8cm 器高5.7cm	淡緑色	土師質	完形片	体部上半は内外面共に横ナデ調整で仕上げる。外面下半は横方向の箆削り痕を残す。高台は削り出シで蛇の目高台である。胎土中には石英、長石微砂をわずかに含む。素地は白っぽい肌色を呈する。

2. 緑釉陶器関連土器について (第10図・図版)

第10図および第2表に掲げた須恵器、土師器の大半は、き一d区溝状遺構の一括出土遺物である。出土状態から、3層からなる溝中埋積土の上層中・下層とに画一的には分類できず、新旧の年代的巾をもつ遺物が混在する。これらの遺物は大体、上限が奈良時代末期、下限は平安時代前半に比定でき、古い土器あるいは瓦片などが出土している。先述の緑釉陶器椀に、明らかに伴うとされるものは、第10図―1・6・15・16で、いずれも平安初期に比定される。6のように天井部の退化した宝珠ツマミをもたぬ蓋は奈良時代に属する遺構からの出土は全くみられず、美作国府においては須恵器蓋の特異な変化が、平安初期にみられることが明らかである。これは後に、蓋そのものが伴う杯の消滅すなわち椀の増大に結びつく可能性が強く、供膳形態の画期的な変化が介在する可能性を示唆しているといえよう。10・11・13などの杯は奈良時代のそれの形態をそのまま残し、15・16などにわずかに先行する。19などもわずかな体部下半の腰の消滅・高台の退化が、奈良時代の遺構出土遺物との相違を示している。17は、20・22・24に連らなる先行的な形態を示し、21・23などは明らかに椀への指向が認められる。1・2の土師器皿はいずれも、平安時代初期に比定される典型的な形態を示し、ことに1は、緑釉陶器の皿にも同一の形態を示すものがみられる(第5図―48)。以上のき一d区溝状遺構出土遺物については、奈良時代の遺構からの出土遺物から追及しなければならない要素を含み、国府そのものの時代的な機能の変化を遺物の変化が示す可能性を端的に示しているといえよう。美作国府における、奈良時代～鎌倉時代にかけての出土土器の器種構成については、後日稿を改め、あ一D区溝状遺構出土遺物とあわせて公表したいと考えており、本稿の不備な諸点をもあわせて考察を深めたいと考えている。

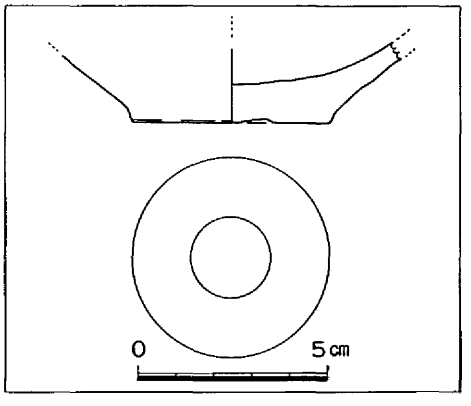
この補遺編は、いわば美作国府発掘調査の補遺編第1部であり実測図・写真・観察データ等の基礎資料を主として公表した。用語の不統一、観察の不備等至らぬ点もあるが、今後の美作国府の調査、遺物の整理を進める上での一階梯として、未完のまま、あえて公刊した次第である。

(註)

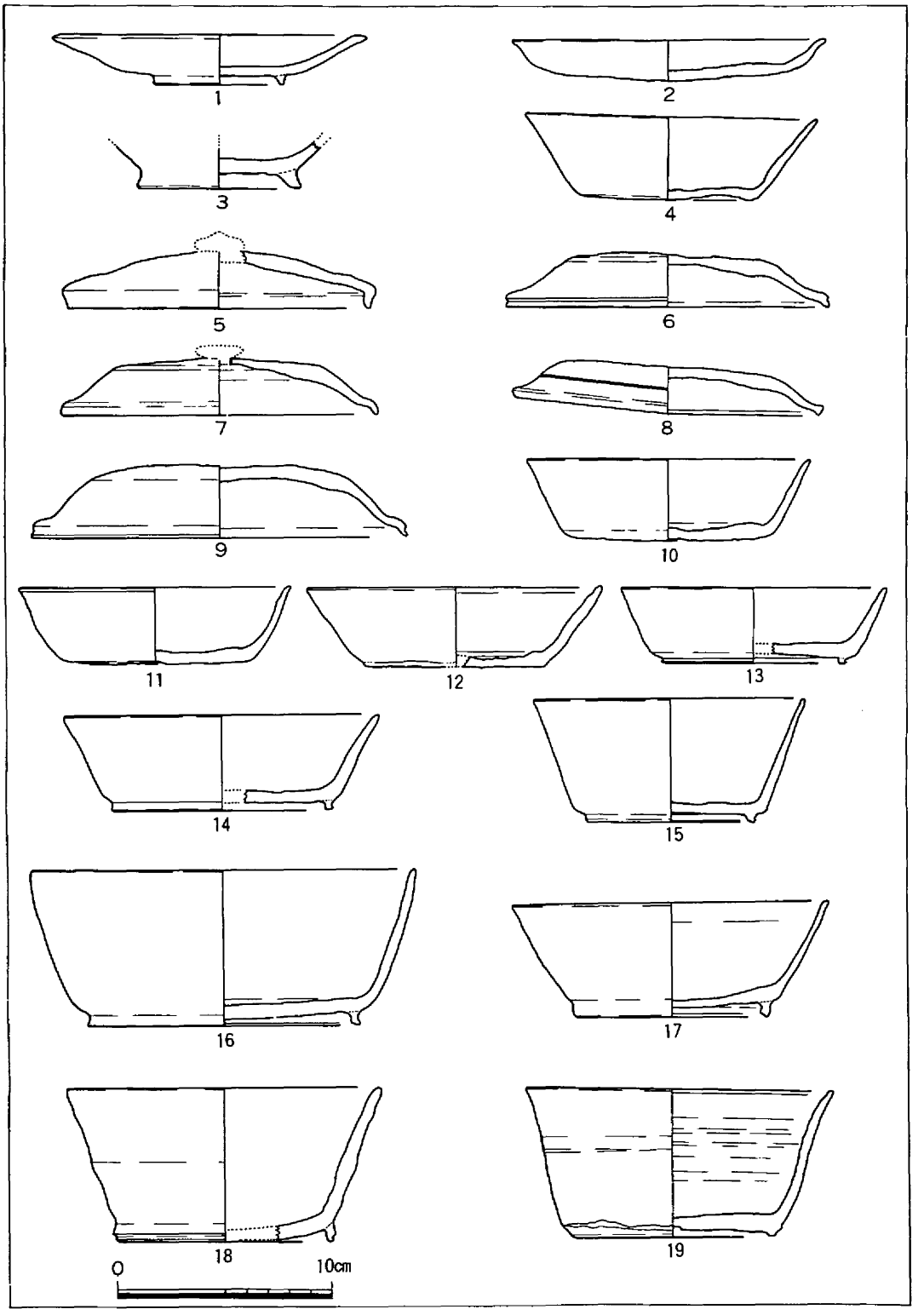
(註1) ことに東方谷部調査区および台地斜面では、多量の弥生式土器が出土した。また、遺跡全面でも弥生時代中期～後期にかけての土器、石器が多量に出土している。(未整理)

(註2) 皿・碗が8点出土している。美作地方では、勝田郡勝央町所在の平(たいら)遺跡で灰釉陶器が比較的多く出土している一方、緑釉陶器も多量にみられ美作国府につぐ施釉陶器の出土量が知られている。

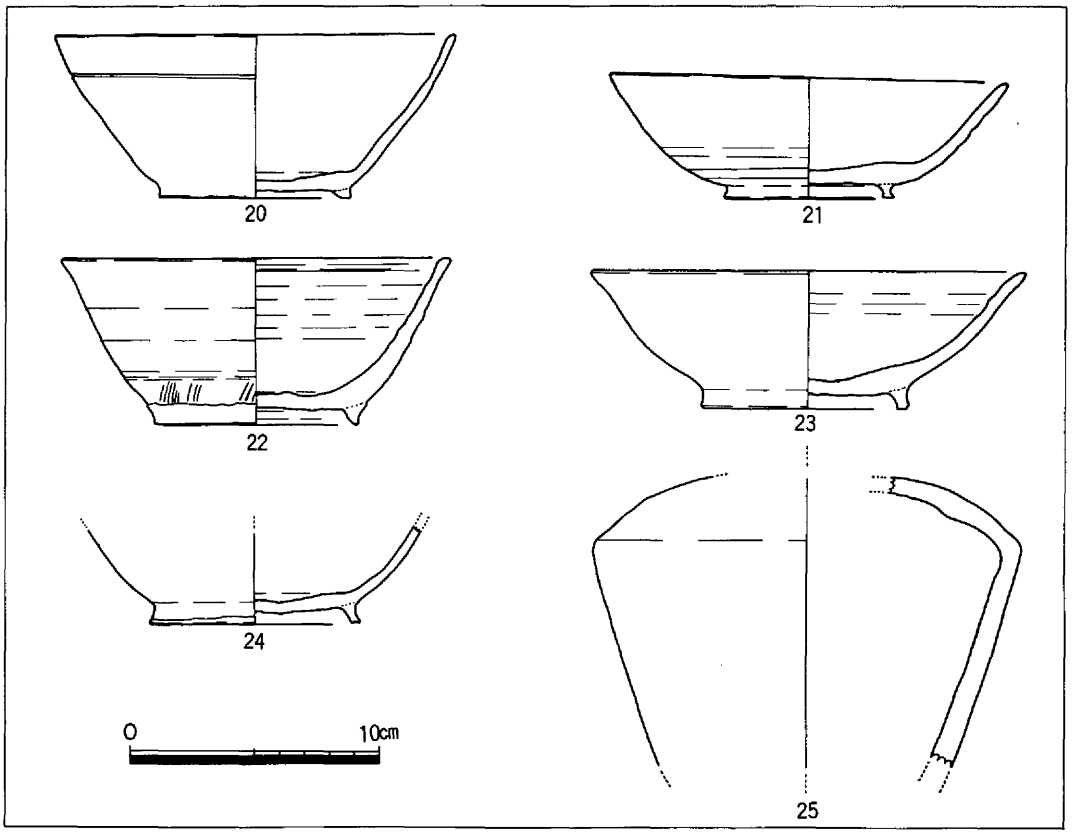
(註3) 田中琢「平城宮跡発掘調査報告Ⅲ―Ⅴ2遺物」奈良国立文化財研究所学報第17冊所収 (昭和43年刊)



第9図 越州窯青磁 (1/2)



第10図－Ⅰ　緑釉陶器関連土器実測図（1～4：土師器，5～19：須恵器）($\frac{1}{3}$)



第10図－Ⅱ　緑釉陶器関連須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）

（註４）　椀・皿いずれも遺存状態が悪く器壁処理・復元作業が未了のため、今回の補遺編に掲 載することが不可能であった。この遺構では須恵器の出土は少なく、わずかな甕・壺片の出土をみる。この中には内外面 格子目の叩き目文をもつものがみられる。奈良末～平安初期に、美作地方でその分布を認める。

第2表　緑釉陶器関連土器観察一覧表　(第10図—Ⅰ・Ⅱ、図版14参照)

掲載図	出土地点	出土層位	計測値	器種	手法・形態の特徴
第10図—1	き—d区	溝状遺構	径14.6㎝、器高2.3㎝(器形は若干ひずむ)	土師器皿(完形片)	器形は緑釉陶器皿の特徴を示す。口縁端部はわずかに外方し、端部は平坦面をなす。高台は貼付け高台。胎土中には石英・長石微砂を多く含む、焼成普通。内外面共に横ナデ調整で仕上げられ、外底部は篦磨キ調整か。全体的に白っぽい肌色～赤味を帯びた肌色を呈する。
第10図—2	き—d区	溝状遺構	径14.6㎝、器高1.9㎝	土師器皿(½片)	口縁部は丸味をもって外方し、丸くおさまる。胎土中には石英、表石微砂を比較的多く含む。焼成やや良好。体部外面は横ナデ調整、内面は任意ナデ調整で仕上げる。外底部は器表剝落のため観察不能。内面は赤味を帯びた肌色。外面は白っぽい肌色を呈する。
第10図—3	き—d区	溝状遺構	高台部径7.6㎝	土師器碗か(底部片)	体部上半から高台外面にかけては横ナデ調整で仕上げる。高台は貼付け高台でやや外方する。底部は篦ケズリ後、ナデ調整。胎土中には長石・石英微砂を含む、焼成普通、器表は肌色～淡褐色を呈する。
第10図—4	き—d区	溝状遺構	径13.7㎝、器高3.8㎝	土師器杯	体部から口縁部にかけてはやや強く外方する。体部横ナデ調整で仕上げられ、内面もすべて同様である。外底部は篦オコシ後不調整でやや凹部をなす。胎土中には石英、長石微砂を比較的多く含む、焼成普通、内外面共に明るい肌色～黄色あるいは白っぽい肌色を呈す。

掲載図	出土地点	出土層位	計測値	器種	手法・形態の特徴
第10図—5	き—d区	溝状遺構	径14cm、残存高2.65cm	須恵器蓋	ツマミを欠失する。天井部上半外面は篦削り、下半よりカエリ部にかけては横ナデ調整で仕上げる。内面はすべて横ナデ調整を施す。天井部内面は極めて滑らかで転用硯として用いられた可能性あり。胎土中には石英・長石をわずかに含む、焼成良好・堅緻、天井部外面には自然釉がかかる。カエリ部はやや内傾し、身受けは深い。灰緑色～淡灰色。
第10図—6	き—d—3	溝状遺構	径15.15cm、器高2.55cm	須恵器蓋（完形品）	天井部にはツマミはみられない。天井部外面は篦オコシ後、不調整。体部外面からカエリ部にかけては横ナデ調整を施し、内面も同様。胎土中には石英・長石微・粗砂を含む、焼成良好堅緻。外面は青色～灰青色、内面は淡灰青色を呈する。カエリ部端部は外方し、身受けは浅い。ろくろ回転は右方向。15と伴出。
第10図—7	き—d区	溝状遺構	径14.7cm、残存器高2.6cm	須恵器蓋	ツマミ部は欠失する。天井部は高く平坦で、外面は篦オコシ後、ナデ調整で仕上げる。体部～カエリ部は横ナデ調整を施す。内面はすべて横ナデ調整で仕上げる。胎土中には石英・長石微・粗砂を含み、焼成良好、外面は暗灰青色、内面口縁部近くは灰褐色、他は暗灰青色を呈する。
第10図—8	き—d区	溝状遺構	径約14.4cm、器高2.15cm	須恵器蓋（完形片）	ツマミはみられない。天井部は篦オコシ後、わずかな仕意ナデ調整を施す。体部からカエリ部にかけては横ナデ調整で仕上げる。カエリ部は鋭角に内傾する。内面はすべて横ナデ調整を施す。胎土中には石英微・粗砂をわずかに含み、焼成不良、軟質で、内外面共に白っぽい灰色～白褐色を呈する。
第10図—9	き—d区	溝状遺構	径17.5cm、器高3.3cm	須恵器蓋（完形品）	天井部中央のツマミはみられない。体部上方外面より天上部にかけては、篦ケズリ調整を施し、下半からカエリ部にかけては横ナデ調整を施す。内面はすべて横ナデ調整で仕上げている。カエリ部は屈曲して外方し、端部は丸くおさめる。胎土中には、石英・長石微粗砂を含む。焼成は極めて良好で外面灰青色、内面はくすんだ灰青色～青色を呈す。
第10図—10	き—d区	溝状遺構	径13.3cm、器高3.8cm	須恵器杯（完形品）	底部は篦オコシの後、不調整、わずかな指頭痕・擦痕を残す。体部から口縁部にかけては内外面共に横ナデ調整を施す。胎土中には石英・長石微砂を含み、焼成良好、内外面共に灰色～淡灰青色を呈する。ろくろ回転方向は右。

掲載図	出土地点	出土層位	計測値	器種	手法・形態の特徴
第10図—11	き—d区	溝状遺構	径12.6cm 器高3.5cm	須恵器杯完形片	口縁端部はわずかに外方し、段がつく。外底部は篦オコシ後不調整。体部から底部の一部外面にかけてはヨコナデ調整が施され、内面も同様に仕上げられる。胎土中には石英・長石微砂を含み、焼成良好、内外面共に暗灰青色～くすんだ灰褐色を呈する。ろくろ回転方向は右。
第10図—12	き—d区	溝状遺構	径13.85cm 器高3.65cm	須恵器杯復元実測	体部～口縁部は大きく外方し、丸くおさまる端部に至る。端部内面は丸味をもった浅い段がつき、凹凸を残す底部に至る。体部は内外面共に横ナデ調整を施し、外底部は篦オコシの後不調整である。胎土は微粗砂を含まぬ精良土を用い、焼成不良、内外面共に口縁部近くは灰黒色、他は灰白色を呈する。
第10図—13	き—d区	溝状遺構	径12.5cm 器高3.5cm	須恵器杯復元実測	外方する口縁部から体部にかけては内外面共に横ナデ調整を施し、やや丸味をもった体部下半の腰をへて貼付け高台に至る。高台はやや細く端部は外方する。胎土中には粗砂・長石が目立ち、石英微砂も含む。焼成良好、比較的堅緻、内外面共に灰褐色を呈する。外底部は篦オコシ後ナデ調整を加える。
第10図—14	き—d区	溝状遺構	径14.6cm 器高4.4cm	須恵器杯復元実測	やや肥厚して外方する口縁部から体部下半にかけては内外面共に横ナデ調整で仕上げられ、わずかにふくらむ腰をへて貼付け高台に至る。高台は端部はやや広く、わずかに外方する。外底部は篦オコシ後、不調整。胎土中には石英・長石微・粗砂を多く含み、焼成良好、体部は暗灰青色、外底部および内面は淡灰褐色を呈する。
第10図—15	き—d区	溝状遺構	径12.75cm 器高5.7cm	須恵器杯（椀）完形片	直線的に外方する体部は器壁が徐々に薄くなり丸くおさまる口縁部に至る。体部下半は丸味をもった腰を形づくり、貼付け高台に至る。内面共に横ナデ調整で仕上げている。外底部は篦オコシ後、不調整。胎土中には、長石微砂を含むが精良、焼成は極めて良好で堅緻、内外面共に暗灰青色～青色を呈すを。ろくろは右回転である。緑釉陶器178および第10図—6と伴出。

掲載図	出土地点	出土層位	計測値	器種	手法・形態の特徴
第10図—16	き—d区	溝状遺構	径17.9cm 器高7.2cm	須恵器杯(椀)完形片	丸くおさまる口縁端部はわずかな弧を描きながらかすかな丸味をもって腰をなす体部下半に至る。貼付け高台は細く、わずかに外方する。外底部は、篦オコシ後回転を利用したナデ調整で仕上げている。内面はすべて横ナデ調整が施されるが、内底部中央部は仕意ナデ調整が加えられる。奈良期の杯にその手法を多くみる。胎土中に石英・長石微砂を多く含み、焼成極めて良好で堅緻、外面は黒っぽい暗青色、内面は赤味を帯びた灰青色を呈する。部分的に灰褐色を呈する部分もみられる。ろくろは右回転。
第10図—17	き—d区	溝状遺構	径14.9cm 器高5.3cm	須恵器杯完形片	口縁端部はわずかに肥厚し稜を残す。体部は直線的に外方し、体部下半は、わずかにふくらむ腰を形づくり、貼付け高台に至る。高台はやや高く、端面は凹部をなし端部は鋭い。内外面共に横ナデ調整を施すが、内底部中央は仕意ナデ調整を加える。外底部は篦オコシ後、不調整である。胎土中には石英・長石微粗砂が多く不良、焼成良好、極めて堅緻である。内外面共に暗灰青色～暗青色を呈する。ろくろは右回転。
第10図—18	き—d区	溝状遺構	径14.5cm 器高7.1cm (推定)	須恵器杯復元実測	体部は器壁は厚く、丸くおさまる口縁端部に向けて直線的に外方する。体部下半には腰はみられず、一気にわずかに外方する貼付け高台に至る。内外面共に横ナデ調整を施し、外底部は不調整。胎土中には、石英・長石微砂をわずかに含み、焼成良好、内外面共に明るい灰青色を呈する。底部はやや凹部をなす。
第10図—19	き—d区	溝状遺構	径14.5cm 器高6.8cm	須恵器杯(椀)完形片	体部は弧を描きつつ外反する口縁端部に至る。体部下半には、腰はみられず、丸味をもった体部は一気に底平な貼付け高台部に至る。体部内外面は横ナデ調整が施され、外底部は不調整、内底部は任意ナデ調整を加え、篦描き×印の窯ジルシがみられる。高台部の接合・貼付けは粗雑である。胎土中には石英・長石微粗砂を多く含み、焼成普通、内外面共に灰青色～淡灰青色を呈する。
第10図—20	き—b区	溝状遺構	径15.9cm 器高6.45cm	須恵器(椀)	低平な外方する高台より一気に体部が形成され直線的に外方し、丸くおさまる口縁端部に至る。内外面共に横ナデ調整が施され、外底部は篦オコシ後不調整である。胎土中には石英・長石微砂を多く含み、焼成良好、内面は灰青色、外面は暗灰青色～青色を呈する。ろくろは右回転。

掲載図	出土地点	出土層位	計測値	器種	手法・形態の特徴
第10図—21	き—d区	溝状遺構	径15.8cm、器高5～4.6cm	須恵器椀（完形品）	体部は緩かに外方し、丸くおさまる口縁端部に至る。高台は貼付けでやや細く、端部がわずかに外方する。体部上半および内面は横ナデ調整が施される。体部下半は横向方の篦ケズリが施され、横ナデ調整で仕上げられた高台に至る。内底部は横ナデ調整に任意ナデが加えられ、外底部は篦オコシ後、回転ナデ調整で仕上げられる。胎土中には粗砂・微砂を多く含み、とりわけ長石が目立つ。焼成は良好、内面は白っぽい暗灰青色～外面は暗灰青色灰青色を呈す。
第10図—22	い—C区	溝状遺構（A溝）	径15.4cm、器高6.1cm	須恵器杯（完形片）	体部は凹凸が目立ち、緩かな弧を描きつつ外方する。口縁端部はやや肥厚し、丸くおさまる。高台は貼付けで、端部は細く、わずかに外方する。体部は内外共に、横ナデ調整によって仕上げられ、下半の高台接合部はその痕跡が擦り消されている。外底部は篦オコシ後、不調整。胎土中には石英・長石微砂をわずかに含む。焼成普通、外面は暗灰色、内面は灰青色～灰白色を呈する。全体的に粗雑な成形がみうけられる。
第10図—23	き—d区	溝状遺構	径17.1cm、器高5.45cm	須恵器椀完形品	体部は中央部がややふくらみ、大きく外方しつつ、丸味おさまる口縁端部に至る。高台は貼付けで、やや太く、端部は内傾する。内外面共に横ナデ調整が施され、外底部は篦オコシ後不調整である。胎土中には微砂を多く含み、焼成良好、外面は暗青色、内面は暗青色～灰青色を呈する。
第10図—24	う—d—8	包含層	高台径8.45cm	須恵器椀復元実測	緩かに外方する体部下半より底部を残す。内外面体部は横ナデ調整が施され、内底部は任意ナデ調整を加える。外底部は篦オコシ後、わずかなナデ調整を認める。胎土中には、石英・長石粗砂を含み、焼成良好、堅緻、内外面共に灰黒色～灰青色を呈す。
第10図—25	き—d区	溝状遺構	体部最大径約16.8cm（肩部）	須恵器壺片	長頸壺と推定される体部片である。体部上半は丸味をもって頸部に至り、稜を残さぬ肩部をへて体部下半に至る。内外面共に横ナデ調整を施す。胎土中には石英・長石微砂を多く含み、焼成極めて良好、外面は赤味を帯びた灰青色、内面は暗青色を呈す。器壁内面には焼成時のヒビ割れが観察される。

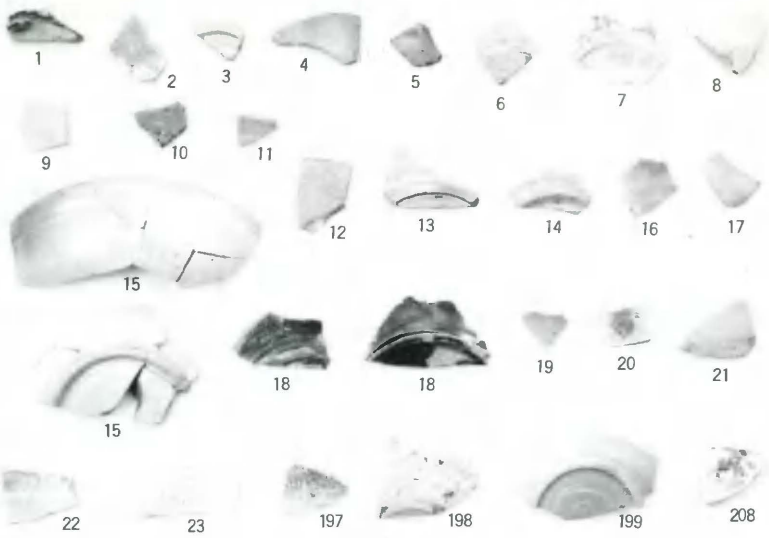
1．あ－Ｄ区溝状遺構〈北から〉

2．緑釉陶器（217）出土状態〈北から

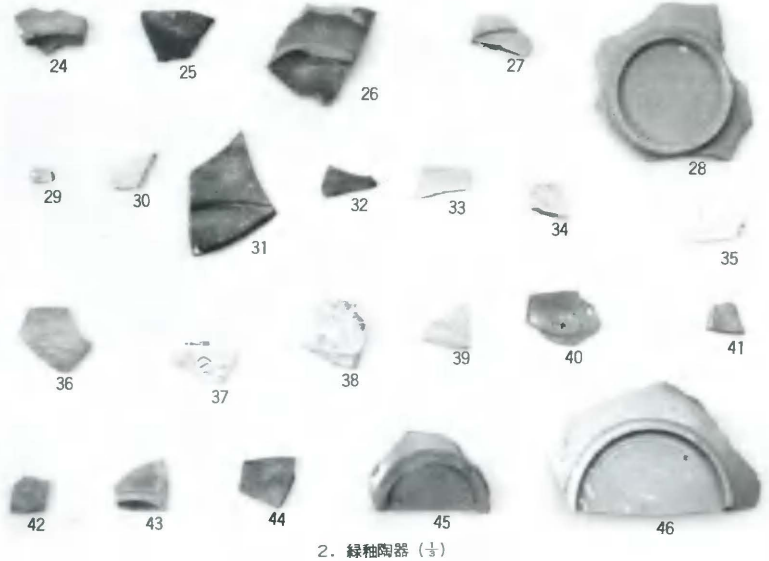
図版２

１．きーｄ区溝状遺構　西から

２．きーｄ区溝状遺構　東から

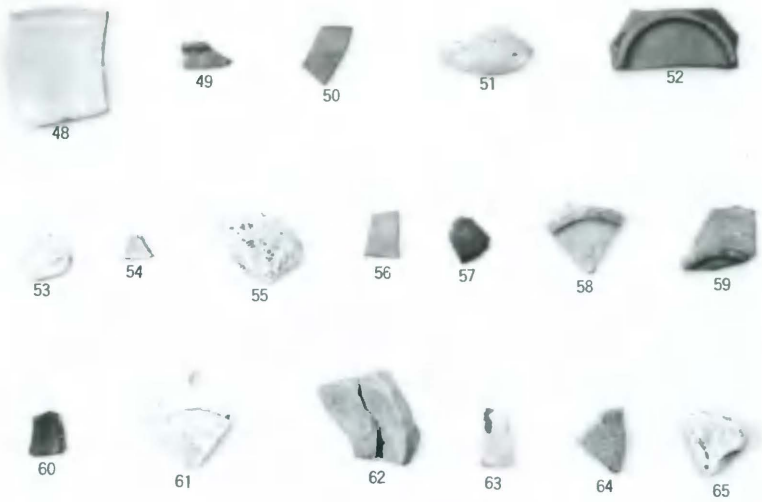


1．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）

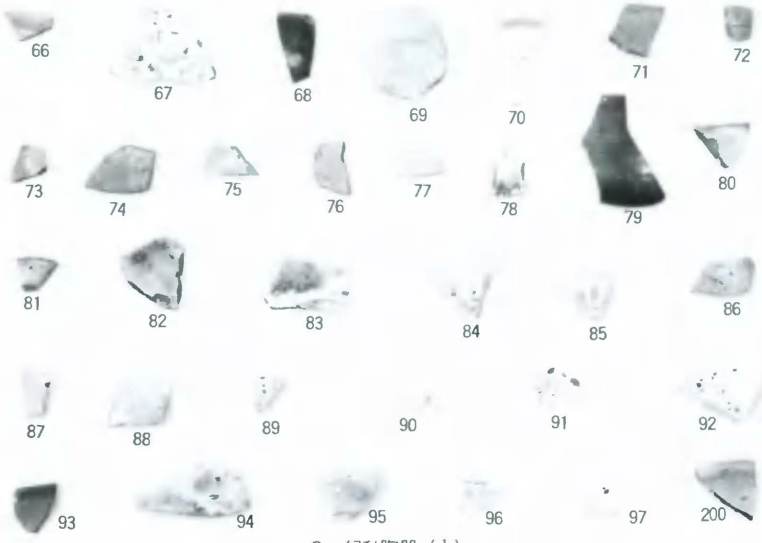


2．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）

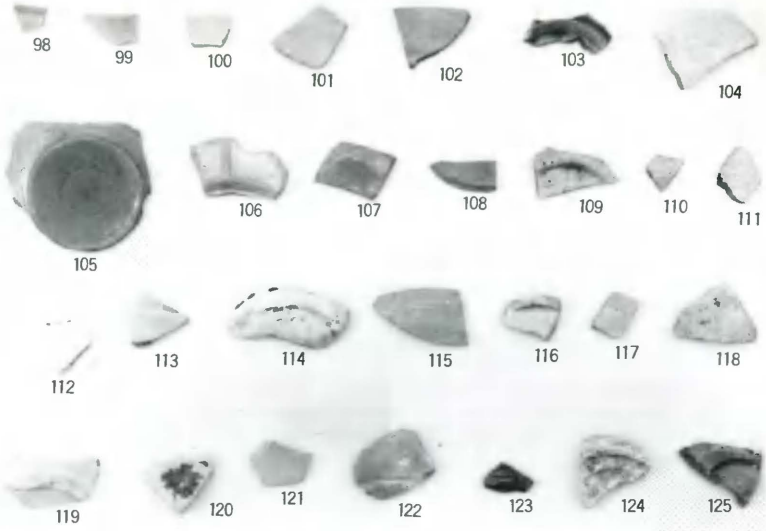
図版４



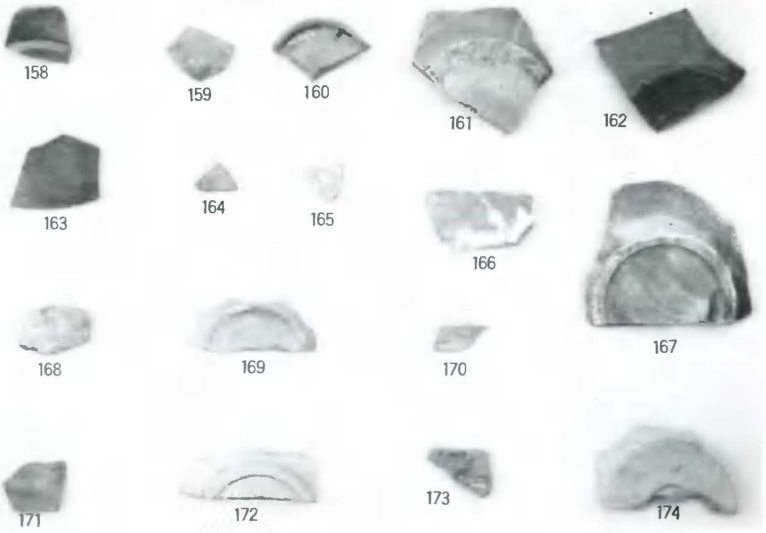
1．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）



2．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）



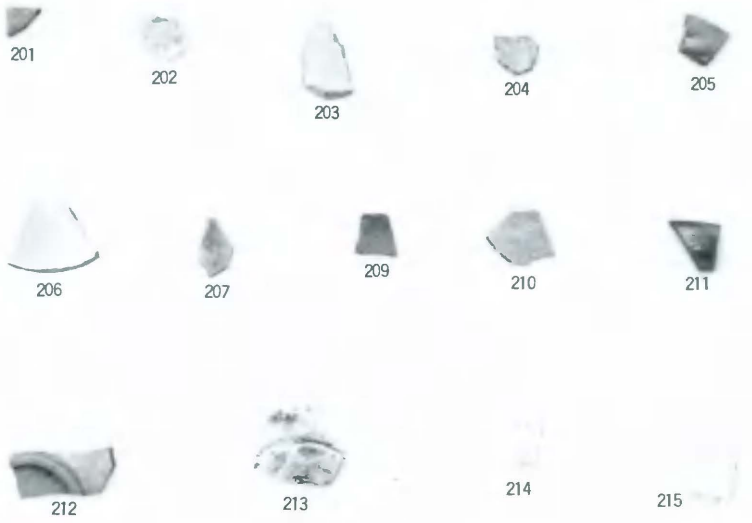
1．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）



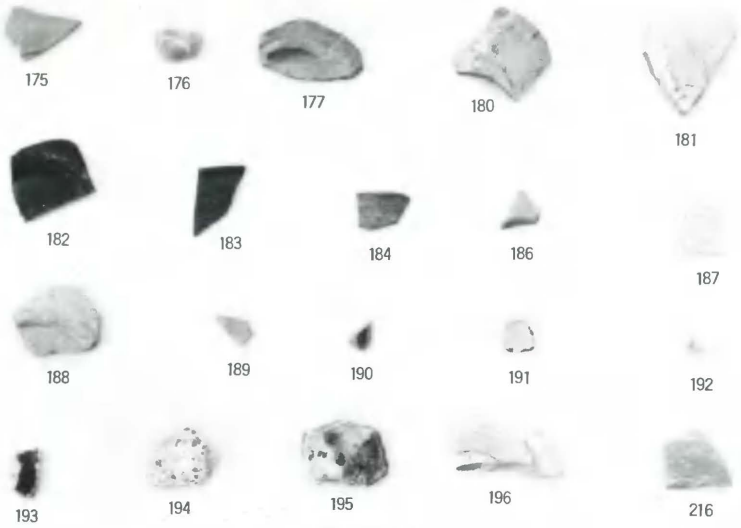
2．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）

図版6

1．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）



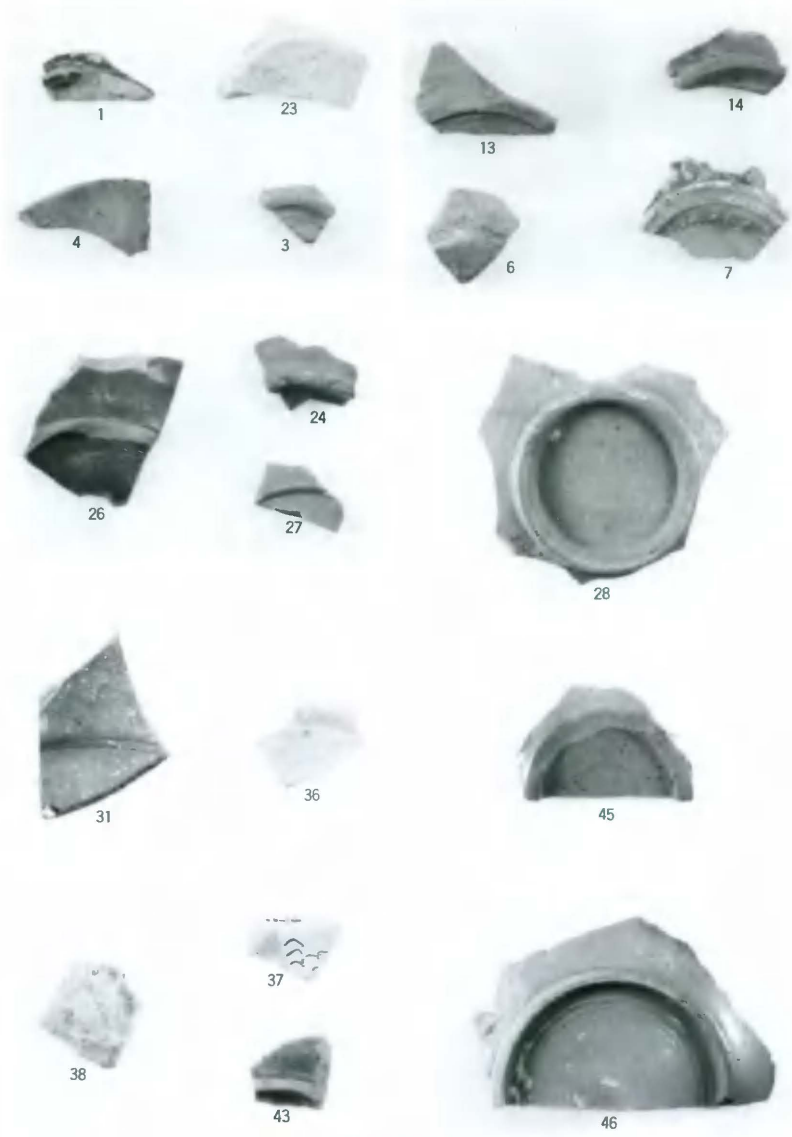
2．緑釉陶器（$\frac{1}{3}$）



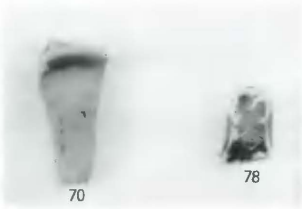
1．緑釉陶器 $\frac{1}{3}$

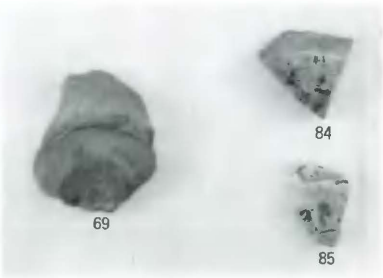
2．築地遺構（いーａ・ｂ区） 南西から

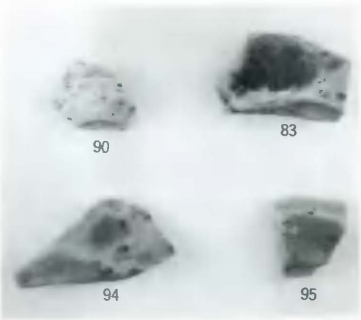
図版８



主要緑釉陶器（×$\frac{1}{2}$）

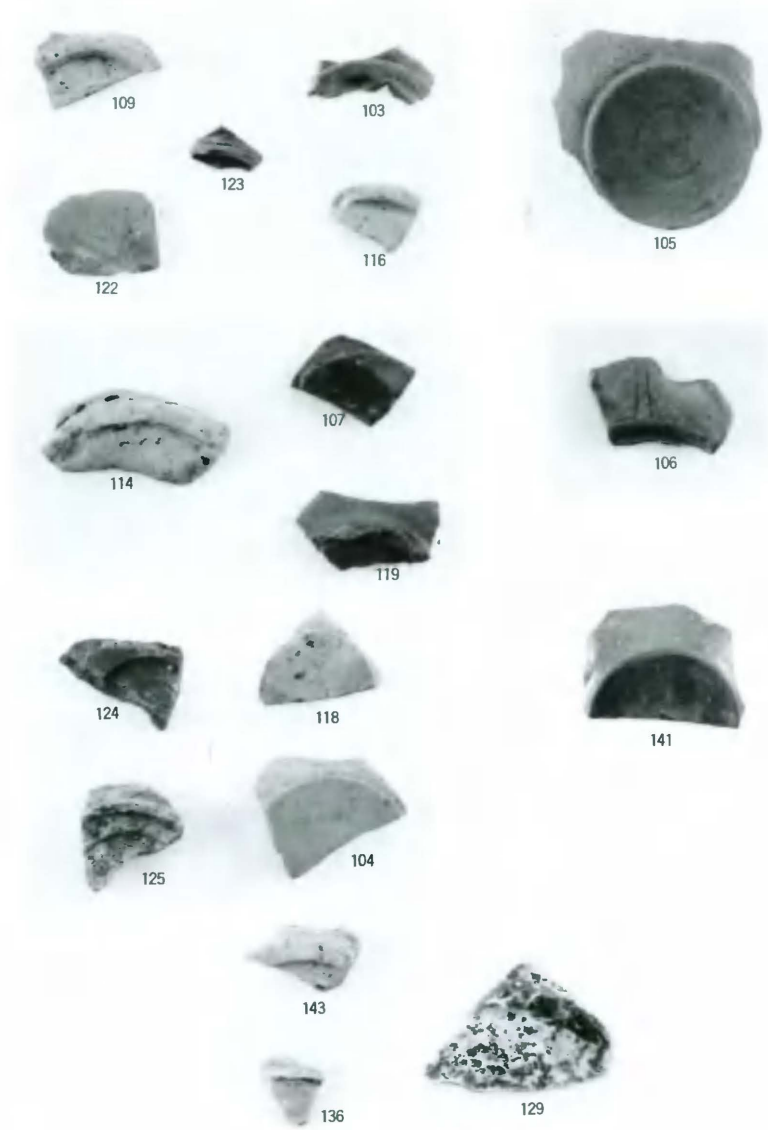




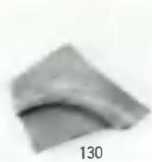


主要緑釉陶器（×$\frac{1}{2}$）

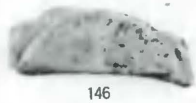
図版10



主要緑釉陶器（×$\frac{1}{2}$）


130

154


146

155

158

160

161

167

162

172

174

169

173

主要緑釉陶器（×$\frac{1}{2}$）

図版12

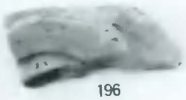
177

181

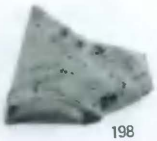
188

182

185


196

216


198

212

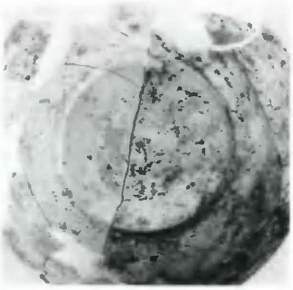
213

199

214

主要緑釉陶器（×$\frac{1}{2}$）

178 椀 （×$\frac{1}{3}$）



178 底部（×$\frac{1}{2}$）

217 椀（×$\frac{1}{3}$）

217 底部（×$\frac{1}{2}$）

47 皿（×$\frac{1}{3}$）

完形復元緑釉陶器（×$\frac{1}{3}$・×$\frac{1}{2}$）

47 底部（×$\frac{1}{2}$）

図版14

126 ～128 復元　椀（×$\frac{1}{3}$）

126 ～128 椀底部（×$\frac{1}{3}$）

越州窯青磁碗片（×$\frac{1}{2}$）

第10回－１　土師器（×$\frac{1}{3}$）

第10回－２　土師器（×$\frac{1}{3}$）

第10回—11　須恵器（×$\frac{1}{3}$）

第10回—19　須恵器

第10回—20　須恵器（×$\frac{1}{3}$）

第10回—21　須恵器（×$\frac{1}{3}$）

第10回—17　須恵器（×$\frac{1}{3}$）

第10回—23　須恵器（×$\frac{1}{3}$）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 24

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 補遺編

昭年53年3月27日 印刷
昭和53年3月31日 発行

発行 岡山県教育委員会
印刷 岡山県出納局用度課